

The background of the cover is a deep blue and purple space filled with stars and nebulae. A large, glowing blue hand is shown from the bottom, cupping a cityscape. The city buildings are illuminated with bright blue and white lights, creating a sense of energy and technology. The overall aesthetic is futuristic and dramatic.

手のひらの 宇宙戦争

戦の手引き書①

与国秀行 著

手のひらの宇宙戦争

～戦の手引書①～

はじめに

『手のひらの宇宙戦争』、すごいタイトルですが、途中まで読まないと、タイトルの意味は、まったく分からないことでしょう。

だからこそ、はじめに言っておきたいことがあります。かつてリンカーンが「奴隷解放宣言」を行ない、黒人たちは奴隷から解放されました。そしてキング牧師たちが「公民権運動」を戦うことで、黒人たちは公然と差別されることはなくなっていきました。

では、本当に「奴隷」はいなくなり、「差別」を受ける人たちはいなくなったのでしょうか。

とんでもないことです。今も差別を受けている人々がいて、そして奴隷の状態に置かれている人たちがたくさんいるのです。

では、どの誰が、どのようなやり方でもって、酷い差別を受けていて、そして奴隷状態におかれているのでしょうか？

実はそれは貴方であり、そして私です。

日本国内では、一部の人たちが電話詐欺に遭っており、その被害額は莫大です。しかし実は本国民全員が、毎日、詐欺に遭っており、その被害総額は電話詐欺の比

ではないのです。

「そんなバカな！」、そう言いたくなる気持ちには十分に分かります。しかしこの本を読み終えた時、貴方は私に言っていることの意味が分かり、そしてきつと貴方の心には、大きな変化がもたらされていることでしょう。それは憤りの芽生えであり、それを「公憤」と言います。

その心の変化が、世の中を変えていきます。一人一人の「公憤」が、他の人を変え、時代を変え、国家を変え、世界を変えていきます。

そしてその一人一人の変化が、この手のひらで行われている宇宙戦争に勝利をもたらすのです。

かつてネルソン・マンデラという方は言いました。「人種差別は魂の病だ。どんな伝染病よりも多くの人を殺す」と。いまだ魂を病んだ人々はいるので。

この一冊は、そうした病んだ人々の魂を健全にし、そして私たちの未来を変える「心の革命の書」であり、「宇宙戦争の勝利の手引き書」なのです。

目次

- 掛け算の凄さ…4
宇宙の果てには何回?…5
日本は何人の隔たり?…6
スモールワールド現象…8
ワインと水のユダヤの寓話…9
自由は幻想だった!?…10
事実を拒絶する洞窟の住人…11
すべてを覚悟の上で語る…13
野ガモ精神の大切さ…14
問題児であることを自覚しつつ…16
資本主義の終焉は近い…18
日本は金融侵略された…19
マンハッタン計画と人体実験…21
特別会計という本物予算…22
民間中央銀行の闇…24
日米を金融侵略する国際銀行家…26
そもそも経済学に大問題が…27
ケインズたちは金融の闇を知っていた…30
私たちが毎日遭っている詐欺被害…31
陰謀論を乗り越えずして未来はない…33
日本も歩んできた滅びの道…35
報道の自由も無い…37
日本の電波は奪われた…39
内政干渉と単年度予算…41
実際の自殺者と自殺予備軍…44
デストピア化された日本…45
奴隷の鎖自慢より悲惨な現実…47
悪魔崇拝者は地球外生命体と関与…48
宇宙情報も封鎖された日本…50
スター・ウォーズは始まっている…52
悪魔教徒がユダヤ人を自称する理由…54
ユダヤにも問題はある…56
バビロニア式借金奴隷制度…58
共産思想とタルムードの一致…61
沖縄に刻み建てられた侵略の爪…64
NWOこそ人類家畜化計画…65
トランプの隠された決意…67
不正選挙に勝ったアメリカ国民…69
日本は民主国家ではなかった…70
やはり自由は幻想だった…72
AIロボットによって仕事が減る…74
ベーシックインカムを実現させたりビア…75
金融侵略は精神侵略でもあった…77
武士道とは真の強さを教える教育…79
神道指令で唯物論を広めた…81
宗教を隅に追いやった…83
暦と言葉も変えられた…84
信仰侵略によって起きた日本の腐敗…85
誰もが冤罪の犯人になりえる…88
腐り果てた日本の姿…90
今は日本にとって恥の時代…91
本当の優しさを思い出さねばならない…93
果たして科学は万能か?…94
巫女と審神者と預言者について…97
東大出ても莫迦は莫迦…100
武士の任務とは…101
真の侍は生きながらにして死人…102
幻想の9条こそ彼らの陰謀…103
日本が金融解放されるためには…104
憲法に必要な武士の心…105
大和魂が神風を吹かせる…107
信仰心こそ現代の日本刀…108
祈りとは美・善・愛…110
悩みがお金や仕事から余暇の時代へ…113
真理とは永遠のもの…114
洞窟の囚人が悪魔の目的…118
ユートピアではダイヤモンドは石ころ…119
仏陀は人に非ず…122
貴方がこの世に生まれてきた理由…123
真理の書こそ奇跡の紙…126
私の声が届かなかった理由…127
5匹のサルに見る組織文化…131
サルではなく悟りを求める宗教者…132
愛の組織・幸福の科学…135
日本を愛の国に…136
常に優しき人にならんとする人々…137
イノベーションを求めて…139
作者&作品紹介

掛け算の凄さ

厚さ0.1ミリのコピー用紙を、何回、折り曲げたら富士山の高さを超え、そしてさらに何回、折り曲げたら宇宙の果てに届くと思いますか？

1回、折り曲げたら2倍の0.2ミリになります。2回、折り曲げたら4倍の0.4ミリになります。3回、折り曲げたら8倍の0.8ミリになります。5回で32倍の3.2ミリです。A4のコピー用紙ですと6回、折り曲げるのが限界ですが、なんとわずか6回で64倍になり、7回、折り曲げますと128倍の12.8ミリになります。

「紙の上に紙を重ねる」という足し算ではなく、「紙を折り曲げる」という掛け算ですと2倍、4倍、8倍、16倍・・・という具合に、常に倍率が2倍に増えていくために、たった7回、折り曲げただけで128倍にもなるわけです。しかしその反面、折り曲げると面積は半分になるために、A4用紙ならば6回、A3用紙でも7回が限界です。

実際に実験を行った人たちがいますが、たとえば体育館のような広い場所を埋め尽くす紙であっても、たった1回、折り曲げるのが限界でした。ちなみに、紙を折り

曲げた回数の世界記録は、アメリカのマサチューセッツ工科大学の4kmのトイレットペーパーで13回です。たとえ長さが4キロであっても、たった13回しか折り曲げられないわけです。

しかしもしも、面積が無限にある「奇跡の紙」が存在したとして、厚さ0.1ミリのコピー用紙を、何回、折り曲げたら富士山の高さを超えるでしょうか？

マサチューセッツ工科大学は、4kmのトイレットペーパーを13回、折り曲げたわけですが、厚さ0.1ミリのコピー用紙を、もしも13回、折り曲げることができたとしたら、その厚さは819.2ミリ、つまり約80センチとなり、800倍以上になりました。14回で約1メートル63センチ、15回では3メートルを超えます。

そしてそのままさらに折り続けますと、17回で10メートルを超え、18回で26メートルを超え、19回では50メートルを超え、わずか20回で100メートルを超えていきます。さらに21回では200メートルを超え、22回で400メートルを超え、23回で800メートルを超えます。つまり厚さ0.1ミリの紙を、もしも折り曲げ続けることができれば、わずかたった2

4回で1キロを超えてしまうのです。こうなると、最初の質問である「厚さ0・1ミリのコピー用紙を、何回、折り曲げたら富士山の高さを超えるでしょうか？」という問いの答えが見え始めてきます。

宇宙の果てには何回？

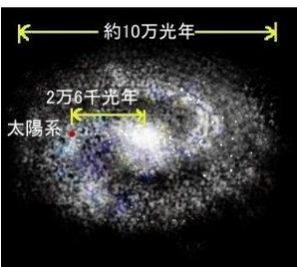
25回では3300メートルとなり、これではまだわずかばかり、富士山の高さ3776メートルには届きません。しかし26回では6700メートルとなり、富士山の高さを簡単に超えてしまうのです。そのために、なんと次の27回では1万メートルを超えて、エベレストの高さ8848メートルさえ遙かに超えてしまいます。紙を折り曲げる世界記録はわずか13回ですが、たったその2倍の回数、もしもコピー用紙を折り曲げることができたら、富士山の高さを簡単に超えるわけです。しかしすでに述べたように、A4のコピー用紙はわずか6回、折り曲げるのが限界です。しかしもしも**無限の広さを持つ奇跡の紙**があったとしたら、あとたった20回で、富士山の高さを超えるわけです。

ここに「掛け算の凄さ」があります。27回では1万

メートルを超えるわけですが、さらにもう10回、折り曲げることができれば、わずか37回で地球の直径を超え、42回、折り曲げると約44万kmになり、月までの距離、約37万kmを超え、50回では地球から太陽までの距離を超えます。

光の速度は秒速30万キロです。つまり光は、わずか1秒間のあいだに30万キロも進むわけです。しかし天の川銀河の直径は光の速度で進んでも、約10万年もかかりません。そして直径10万光年の銀河の中で、地球がある太陽系は、銀河の中心から約2万6千光年に位置しています。銀河の中で太陽系の大きさは、まるで点のような小さな小さなものでしかありません。それほどまでに天の川銀河は大きいわけです。しかし0・1ミリの厚さの紙を、もしも83回、折り曲げることができれば、この天の川銀河の直径、約10万光年とほぼ同じ規模になります。

地球から観測可能な宇宙は、約465億光年先と言われております。それは光が465億光年先までしか観測できないからです。そのために465億光年先が、現



在では「宇宙の果て」と云われています。しかしたった102回、0.1ミリのコピー用紙を折り曲げることができれば、この宇宙の果てに到達します。

このように、0.1ミリのコピー用紙を26回折り曲げると富士山の高さを超え、37回で地球の直径となり、42回で月に到達し、50回で太陽に達し、83回では天の川銀河と同等規模になり、わずか102回で宇宙の果て465億光年に到達するわけです。「信じられない」と、そう思うかもしれませんが、それが現実であり、そして真実なのです。もしも**無限の広さを持つ奇跡の紙**さえあれば、これは実現可能なのです。そしてその**奇跡の紙**は、私たち日本人のすぐ近くに、すでにあるのです。その事実には、多くの日本人が気がついていないだけなのです。

では、次の質問です。日本人が「**お金**」という紙に対して、まったく悩んだり、苦しんだりしないような、そんな大繁栄を遂げた時代は、果たしてどれくらいかの時間で訪れると思いますか？

実は**奇跡の紙**が、私たちのすぐ近くにあるその一方で、実は私たちの目の前で、**紙の詐欺**が行われ続けているのです。その意味では、私も貴方も詐欺の被害者です。

日本は何人の隔たり？

日本が大繁栄の時代を迎えるためには、日本人自身が知らなければならぬことが、大きく分けて2つあります。それはたった2つであり、「**奇跡の紙**」と「**紙の詐欺**」についてです。

そして日本人が、この「2つのこと、奇跡の紙と紙の詐欺」について知っていく時、厚さ0.1ミリのコピー用紙を、わずか102回、折り曲げただけで、宇宙の果てまで到達するがごとく、私たちは**お金**という紙ごときでは、まったく悩んだり苦しんだりしない、大繁栄の時代を迎えるのです。

そしてその大繁栄は、けっして日本一国にとどまることなく、世界の国々へと広がっていくこととなります。戦争と貧困を終わらせて世界を救うことができるのです。

ですからどうか、まずはこれを読まれる貴方自身が「2つのこと」を知り、そして貴方が友人に手紙を送り、その「2つのこと」を伝えて欲しいのです。なぜなら日本も、そして世界も実は小さいからです。

おそらく「0.1ミリのコピー用紙を、何回、折り曲げたら富士山の高さを超え、宇宙の果てまで届くと思

ますか?」、この質問の答えは驚愕であったと思います。では、さらに質問です。「日本は何人を隔てて成り立っていると思いますか?知り合いの知り合いというように、何人をまたいだら、1億3千万人の日本人に到達すると思いますか?そして世界72億人は何人をまたいで成り立っていると思いますか?」

アメリカのイェール大学の社会心理学者スタンレー・ミルグラムという教授は、とある実験を行いました。その実験とは、直接、繋がりのない相手に対して、宛てた手紙を、まずは自分の知り合い宛てに出して、そしてその後、その知り合いの方に、さらに「知り合いの知り合い」を通して転送してもらい、何人を経由して、目的の人物に到達するか、ということを検証する実験でした。同じような実験を、2014年8月27日に放送された『水曜日のダウンタウン』という番組でも行いました。この番組では、まず番組スタッフが、街行く人にランダムに声をかけて、「松本人志とお知り合いですか?松本人志と知り合いの友人はいませんか?松本と面識がありそうな友人をご紹介してもらえませんか?」と、協力を求めました。はじめに協力に応じてくれたのは、アパレルショップに勤務するごく普通の男性でした。番組ス

タッフが、その男性に「松本と面識がありそうな友人はいますか?」と質問を投げかけたところ、2人目でスタイリスの男性につながりました。

3人目で、さらに別のスタイリスの男性につながりました。そしてこの人物が、松本人志さんのマネージャーの連絡先を知っていたことから、なんとわずか5人の隔たりで、ゴールの松本人志さんにたどり着いたのです。「これは偶然かもしれない」と、念のためにもう2回、追加で調査が行われたのですが、いずれも「中学校講師↓舞台俳優↓お笑い芸人のX-GUN・さがね正裕↓三又又三↓松本」、「美容師↓映像編集者↓映像編集者↓フジテレビプロデューサー↓松本」といった具合に、わずか4人をまたいで松本人志さんにつながる結果となりました。すなわち「お笑い芸人の松本人志」という方向性を持っていると、3人目の隔たりまでは、松本人志さん本人もまったく知らない人物なのですが、その次の4人目の隔たりで、本人がよく知る人物に辿り着いたのです。すなわちこのテレビ番組の実験で、「日本は5次の隔たりで成り立っている」という理論が実証されたわけです。

スモールワールド現象

この番組の実験は、すでに述べたように、アメリカ・イエール大学の社会心理学者スタンレー・ミルグラム教授が行った実験と理論が基になっています。

この教授の理論をもう少し詳しく説明すると、「人は平均して44人の知り合いを持つ」と言われています。つまり誰でも携帯電話の電話帳には大勢の名前が記されているように、もしも誰か1人の人と知り合ったら、自分が直接は知らない誰か44人と、間接的に知り合いになっていることを意味するわけです。

そしてその「自分が直接は知らない44人」にも、さらに「それぞれの44人の知り合い」がいます。この場合は、 $44 \times 44 \parallel 1936$ 人という計算になります。この1936人の人々は「1次の隔たり」にあたる人たちです。

そしてさらに、この1936人にも、それぞれ44人の知り合いがいますから、 $44 \times 1936 \parallel 85184$ 人です。この約8万人の人たちは、「2次の隔たりの人たち」です。

そしてもちろんこの約8万の人にも、平均して44人の知り合いがいますから、 $44 \times 85184 \parallel 3748$

096人です。この約374万の人たちは「4次の隔たりの人たち」です。

そしてこの約374万人に44をかけると1億6千万人になり、日本の総人口を上回り、これで「5次の隔たり」になります。この理論を基に考えると、「日本は5次の隔たりから成り立っている」ということが言えるわけです。

そしてイエール大学スタンレー・ミルグラム教授によれば、実験結果として、自分が直接、知らない相手であっても、手紙が到達するのは、平均するとたった6人目だったのです。なぜなら「5次の隔たり」ですと、1億6千万人ですが、この1億6千万人に、さらに44を掛けると72億を上回ってしまうからです。世界の総人口は72億と云われていますから、つまり「わずか6次の隔たりだけで、世界はおさまってしまう、わりと世界は小さい」というのがこの「6次の隔たり」という理論なわけです。

つまりこの実験によって、思ったよりも「世界は狭い」という、「スモールワールド現象」が確認できたわけですから、日本も、世界も、**掛け算**で見ると、実はとても小さいのです。

そして「わずか5次の隔たりで日本は出来上がり、6次の隔たりで世界は成り立っている」、こうしたことを考えた時、日本を変え、世界を変えていくことは、実は物理的には、そう難しくないことが分かります。あとは0.1ミリの紙を26回、折り曲げて、さらにその倍の50回、折り曲げて太陽に到達するがごとく、問題は掛け算なのです。つまりそれは、**奇跡の紙**を見つけることであり、目の前で行われている**紙の詐欺**を暴くことであり、そして貴方や私が友人に**手紙**を送ることであり、たった**6人**を隔てれば良いのです。それが世界を変え、大繁栄の時代を築きます。

ワインと水のユダヤの寓話

0.1ミリの紙をたった26回、折り曲げることができれば富士山を超え、たった5人を隔てて日本は成り立っている、ならば日本を変えることもそれほど難しくない、ということが分かります。

では、どうすれば日本を変え、世界を変え、大繁栄の時代を迎えるのでしょうか。

ユダヤには、こんな寓話があります。とある村に、一

人のラビが新しくやって来たので、そのことを祝う宴が行われることになりました。庭の真ん中には大きな樽が用意されました。あとは村人の一人一人が、一瓶ずつ、ワインを持ち寄って、その樽の中に注ぐだけでした。

こうして宴が始まり、ワインを飲もうとすると、不思議なことに樽から出て来たのは赤いワインではなく、透明な水でした。皆が不思議そうに頭をひねっていると、ある村人が言いました。「実は皆がワインを持ってくるのだから、自分一人くらい、水を持って行っても分からないだろうと考えてしまったのです」。すると別の村人も、「実は私もです」と謝罪し、次々に村人たちは謝罪しました。結局、誰もワインを持ってきていなかったのです。

このユダヤの寓話は、「自分一人くらいは」と考えてはいけない、他人任せではいけない、ということを教えています。

はつきり言います。本当に**奇跡の紙**は存在し、**紙の詐欺**が目の前で行われております。ですから後は、この**2つ**の**こと**を知り、そして友人に**手紙**で伝えれば、必ず日本は変わります。しかしそれには、私たち一人一人の心構えが何よりも大切です。その心構えとは、他人任せに

なることなく、自分が何をするかです。つまり「自分一人くらい」と思わないことです。

むしろ自分一人でも立つ勇氣が、他の人々にも影響を与え、感化を促すのです。

「I HAVE A DREAM (私には夢がある)」、そうキング牧師が演説した際、25万人の人々が集まり、そして人種差別を公然と行っていたアメリカが変わっていきましたが、時代を変え、国家を変えることは、決して不可能ではありません。

あとは私たち一人一人の心構え、心意気、熱意、情熱、あるいは勇氣です。

自由は幻想だった!?

では、次の四つの質問に素直に答えて頂きたいと思えます。

問1 次の8つの中から、1つを自由に選んでください。

「スキー」「鼻水」「コップ」「温泉」「ゴミ箱」「コーヒ」「冬」「お土産」

問2 それでは次は、今選んだその単語と貴方が「関係ある」と思うものを、次の8つの単語の中から自由に選んでください。

「電卓」「雪」「針」「ティッシュ」「米」「まんじゅう」「牛乳」「電話」

問3 さて、次は問2で選んだその単語を強くイメージして、そして次の8つの中から「関係ある」と感じるものを自由に選んでください。

「大きい」「遅い」「白い」「鋭い」「暗い」「甘い」「赤い」「狭い」

問4 それでは最後に、問3で選んだ特徴に当てはまるものを次の8つの中から自由に選んでください。

「ナイフ」「ピラミッド」「砂糖」「亀」「犬小屋」「宇宙」「血」「深海」

貴方が選んだものは「砂糖」です。

実は「自由」はありませんでした。必ず「砂糖」になるように、この「4つの質問」は、意図的に作られていたのです。そしてまったくこれと同様なことが、私たちの身にも起きていたのです。

「私たちは自由ではなかった」、まずはその事実を知る必要があります。

事実を拒絶する洞窟の住人

哲学者のプラトンは、こんな譬え話をされました。

地下にある洞窟の中に、数名の囚人たちが住んでいます。その囚人たちは子供の時から、手も足も、首までも固定されて縛りつけられています。そのために彼らは、ずっと目の前にある壁だけを見て生活しています。あくまでも譬え話です。

彼らの後方では、炎が灯っていて光輝いています。囚人たちは背後を向くことさえできず、その光源の炎を見ることができません。ですから彼らは、自分の真実の姿を見ることができず、壁に映る影こそを自分自身だと思ふのです。つまり影というニセモノの姿を、真実の自分だと思ひ込むわけです。

そして囚人と炎の間を、時おり様々な物が通り過ぎるのですが、囚人たちは、やはりその姿を見ることはできません。ですから彼らの前にある壁には、それらの影だけが映るわけですが、やはり影こそを真実の姿だと彼らは認識するわけです。

そして囚人たちは、その影の動きを鋭く観察し始め、影の次の動きを予測することを始め出します。いつしか誰よりも上手に、影の次の動きを予測できた囚人には、様々な名声と賞賛が、与えられるようになりました。

ある時、囚人の一人が縄を解かれて、背後にある炎の光を見るように強制されました。しかしこれまで影ばかり見ていたその囚人は、光に目がくらんで、よく炎が見えないばかりか、光に目を傷め、苦痛を覚えます。そのためにその囚人は、わざわざ炎に背を向けて、自分からまた壁を向いて、自分にとっては見えやすい、都合の良い影だけを見始めます。

なぜならこれまで「影」だけを見てきて、影の動きを予測することで、すでに様々な称賛と名声を得ていたというのに、「自分は本当は何も知らなかった」という事実と向き合うことが恐ろしいからです。「自己保身」とか、「臆病さ」といった自我が邪魔して、真実から目を

背けさせるわけです。

そのためにその囚人は、またもや影こそを真実と信じ抜き、先ほど自分が炎を見たことは、あえて都合よく忘れてしまつて、これまでと同じように、影についていろいろと議論し、影を観察し、影の動きを予測して、また囚人たちから称賛を得るのでした。

さて、ここで、とある誰かが囚人たちの一人を、無理やり洞窟の中から引きずり出して、炎のさらに向こうにある出口、太陽のある世界に連れていきました。すると当然ながらその囚人は、光のまぶしさのあまり、最初のうちは何も見る事ができません。しかししばらくすると、その囚人も次第に光に慣れていき、水面に映る太陽の光を見て、さらに目を明るさに慣れさせていきます。するとその囚人は、もはや囚人ではなくなり、自由人となりました。彼は太陽の光を知り、光や自然にあふれた本当の世界の素晴らしさを知ること、今まで自分が洞窟の中で見ていたものが、ただの影にしか過ぎなかつたこと、真実の姿ではなく、偽りの世界であつたことを悟ります。

彼はこの体験を通して、とても幸せな感覚を味わうと同時に、今も洞窟にいる他の囚われてる仲間たちを不

幸に想い、憐れみを抱きます。

そこでその自由人は、また洞窟に戻り、自らの幸せの体験を他の仲間たちに伝えようと試みるわけです。自由人になつた彼は、光に満ちあふれた真実の世界を、囚人たちに伝えて、共に自由に生きることが願うわけです。

しかしその自由人は、外の光に目が慣れてしまつたために、今度は洞窟の暗闇の中に入ると、影をうまくみることができません。そのために他の囚人たちは、「あいつは光を見たせいで、すっかり目をだめにしてしまつた」と、その真実の世界を見てきた自由人を笑いものにするのです。

結局、彼らは影の動きを予測することで、すでにたくさん称賛と名声を得ているために、「本当は自分が何も知らなかつた」という事実を受け入れることが恐いわけです。なぜならその称賛と名声は、外の光の世界からすると、それほど価値あるものではないからです。

そのために、洞窟に捕らわれ続ける囚人たちは、外には光あふれた自由な世界があるというのに、影の次の動きを予測することに没頭し、満足し、酔いしれ続けるわけです。そしてもしも仮に、自分たちを無理やり洞窟の外に連れて出そうとする者がいるならば、その人間を殺

してでも阻止しようと、彼らはますます意固地になるわけです。意固地の原因は「自己保身」や「臆病」です。

プラトンの師である哲学者ソクラテスは、「無知を知ることが大切である」と述べましたが、しかしそのソクラテスは、無知を自覚することを恐れた、称賛と名声を得ている意固地な知識人たちによって、裁判にかけられて殺されてしまいました。そうしたことから、プラトンは『洞窟の囚人』の話を思いついた面があるのでしよう。無知を自覚することは恐ろしいことであり、時にソクラテスのように、人の命さえ奪いかねません。

しかしそれでもはつきり言います。私たちは「自由」ではありませんでした。ですから私がこれから述べる話は、まさに驚愕の内容です。

そしてすでに称賛と名声を得ている人ほど、影の動きを予測することに没頭してきた洞窟の囚人の如く、「本当は自分が何も知らなかった」という事実を受け入れることが恐くて、私の話を受け入れることを拒絶してしまふことがあるのも、十分に承知しております。

しかしそれでも「自由の創設」のために、私は勇気を持って事実を語ります。

すべてを覚悟の上で語る

わたくし与国秀行は『幸福の科学』の出家者であり、そして『幸福実現党』の党員です。

しかし「還俗」も、「破門」も覚悟で、この組織の中で一人、違うことを主張し続けております。「還俗」というのは、「出家」を取り消されて在家になることであり、つまり職を失うことを意味し、また「破門」というのは、幸福の科学から追放されることを意味しております。

しかし「一人だけ違うことを主張している」と言っても、我が師の教えに背くことは、私は何も言ってはおらず、あくまでも私は、新たな「情報」を収集し、その「情報」を発信しているだけであり、それはマスコミ的、ジャーナリズム的な仕事をしているだけに過ぎません。宗教の世界において説かれる「真理」、仏教ではこれを「仏の教え」、「仏の法則」、「仏の法」ということから、「仏法」とも呼びますが、これは永遠不変、永遠不滅なものです。

では、永遠の真理とは何でしょうか？

神、仏は実在します。

そして人は皆、神の子、仏の子であり、ゆえに神、仏

が尊い存在であるように、その子である人間もまた、誰もが皆、尊い存在です。そして人間が持つその神の性質、仏の性質のことを「神性」と呼んだり、「仏性」と呼んだりしているわけです。

そして人は死に、肉体が滅んでも、魂としては生き続け、人間はこの世とあの世を転生輪廻、すなわち生まれ代わりを繰り返している霊的存在です。

つまり人は、神性、仏性を磨いて、神仏に近づいている存在なわけです。

そのためにこの世は、幸せを得る場であると同時に、魂の修行場でもあり、人は死後、この世において築き上げた己の心境と同じ世界に還ることになります。ですからもしも心の中が、天国ならば天国へと還れますが、しかしもしも心の中が地獄ならば地獄へ赴くことになり、そして修行を積んで菩薩の境地へ達すれば菩薩界へと還ることになります。

ですから仏教的に言えば菩薩や如来、キリスト教的に言えば天使もいれば、悪霊や悪魔も存在しております。

人はこの世における魂修行を通して、悟りという名の魂の向上を掴み取ってこそ、この世とあの世を貫いた、真の幸せを掴み取ることができのです。これは永遠に

変わることをない「真理」であり、また「仏法」であります。

幸福の科学の教えとは、こうした永遠不変の真理の教えであり、愛と知と反省、発展といった四つの教え、四正道であります。わたし与国秀行は、こうした我が師の教え、仏法に背いているわけではなく、あくまでも変化変転する情報を収集、発信しているに過ぎません。

野ガモ精神の大切さ

「仏法」は永遠のものであるのに対して、「情報」は新たな情報が出てくることで、それまで善とされていたものが悪になることがあります。また隠されていた歴史的眞実、「新情報」が発掘されることよって、常識が大きく覆ることもあります。このように「情報」というものは絶えず変化、変転していくものです。

そして宗教は、永遠の眞理を求め、悟りを求めるものであり、一方で政治は、悟りを得た徳高き為政者いせいしやうが、その永遠の眞理を基にして、変化する情報を絶えず仕入れながら、時代をより善く変革し、素晴らしい国造りを行っていくものです。

そして神仏と人間の関係は、親と子のような関係です。具体的に言うならば、神仏と人間の関係は、仏教の禅でいうところの「啐啄同時」です。

「啐啄同時」とは、雛が孵るとき姿を称しています。「啐」というのは、孵化しようとするときに、雛が殻の内側からコツコツと、くちばしでつつく合図のことです。「啄」というのは、母親が外から殻を割ることだそうです。

つまり「啐啄同時」とは、内側から雛がコンコンとつつくのと、親鳥が外から殻を破るのが同時でなければならぬという、禅の言葉なわけです。すなわち「啐啄同時」とは、神仏の他力にすべて頼りきるのではなく、あるいは神仏の存在を完全に忘れて、人間の自我我力だけに頼るのでもなく、人間の自力あつてこそその仏の他力である、という意味です。

そして宗教の世界では、神仏より、真理を学ばせて頂き、自力修行を行なうことで、病気が治ったり、インスピレーションが降りてきたりと、他力の救いが臨むものですが、政治の世界とは、情報・知識を自力・自助努力によって収集して、行動を起こしていくことで、神風を吹かせるような奇跡・他力が臨んでくるものです。

ですからつまり、私はただ単に、自助努力のもと、情報を収集し、そして発信しているだけに過ぎません。もしも情報の収集まで師に頼ってしまったら、それこそいずれ『幸福実現党』は亡びることでしょう。なぜなら師が地上を去った後、百年後も、千年後も、弟子は政治の世界で戦かわねばならないからです。

だからこそ私は、『幸福の科学』の中で一人、皆とは異なる情報を発信しているのです。そして我が師も、このようにおっしゃっておられます。

『伝道の法』第1章 心の時代を生きる

百年以上前の人になります。デンマークのキルケゴールという哲学者は、こんな話を紹介しています。

その国のある地方には、毎年、渡り鳥の野ガモが飛んでくる所があり、親切な老人が餌付けをしていたそうです。ところが、栄養のある餌をもらえるものだから、野ガモたちの一部は、寒くなったら南のほうへ飛んでいくという習性を忘れ、だんだん太っていき、飛べなくなってしまうといいます。

ところが、ある日、その親切な老人がコロツと亡くなってしまったのです。それで大変なことになりました。実は、太った野ガモたちは空を飛べなくなっていた

め、「さあ、困った。どうしよう」ということになったのです。彼らはすでに渡り鳥の習性を失ってしまっていたわけです。

そして、雪解け水が洪水のように流れてきたときに、溺れて死んでしまったということです。〈中略〉

したがって、「野ガモ精神」を忘れてはいけません。ここが非常に怖いところであり、そういう危機感を持って人生を生きなければいけないということでは同じだと思ふのです。

やはり、みなさんも、いつもそういう気持ちを忘れてはなりません。「日々精進する気持ち、日々自己変革をし、新しい課題に挑戦し、環境の変化に耐えていこうとする」「遺伝子」を持たなければ、もはや、人間個人としても、あるいは組織としても、生き残ることはできないのです。

神仏に頼る気持ち、信仰心を失ってはなりません、しかし仏と人間の関係は、あくまでも「啐啄同時」であり、そして非難に耐え抜いても、挑戦する「野ガモ精神」を持たなければ、『幸福の科学』すら滅びにいたります。だから私は、一人で異なる情報を発信しているのです。

問題児であることを自覚しつつ

こうしたことを踏まえて、もう一度、述べますが、わたくし与国秀行は『幸福の科学』の出家者であり、そして『幸福実現党』の党員ですが、しかし「還俗」も、「破門」も覚悟で、一人だけ違うことを主張しています。しかしそれは仏法を創造しているのではなく、情報を発信しているに過ぎません。

なぜなら我が師は、私たちにこう教えてくださっているからです。

当会は、かなり組織が大きくなってきたため、信者のなかには、周りの人をキョロキョロと見たり、上の立場の人を見たりして、「どうやればよいのか」「怒られるのではないか」などと思つて躊躇する人もいるでしょう。しかし、批判されてもよいのではないのでしょうか。あまり、人にほめられることばかりを考えないことです。

教団にとってよいと思ふこと、あるいは、本来の伝道の使命、ミッションから見て、「これは、自分がやらずして誰がやるのか」と思ふようなことがあったならば、怒られても、叩かれても、批判されても、悪口を言われても、行ふべきです。「自己顕示欲だ」「独走だ」「人の言うことをきかない」「三宝帰依に違反する」などと言

われても、行うべきなのです。

「自我我欲や利己心のためではない。どう考えても、これは教団にとって絶対によいことだ。私はやりたい。その思いが、どうしても収まらない」という場合には、それを断行してください。そして、打たれても打たれても頭をもたげてくるような「復元力」を持つてほしいのです。

総裁である私がそういう人間であったのですから、信者のみなさんがそうであっても、別におかしくはないわけです。

しかし、そういう人ばかりだと、一般的には、組織がまとまらなくなるため、いわゆる「学級崩壊状態」が起きるかもしれません。

学校では、学級崩壊が起きると、副担任を付けたりして、教員を増やします。問題児が多い学級だと担任一人ではもたないため、教員を増やすのです。

そのため、そういう人は、実際に「問題児」ではあるのでしょうか。しかし、「問題児」であることを自覚しつつも、「問題児」がいないよりは、自分がいることによって、全体としては確実によくなっている」というような結果を出すことが大事なのです。

したがって、たくましく生きるには、「最後は結果を出す。最後までやってのける」という力強さが必要です。そういう力強さを持つてください。

以上、「人生において現れてくる壁を打ち破れ」「復元力をつけよ」ということを述べました。

『ストロング・マインド』第2章 たくましく生きよう

我が師が、このように教えてくださっているがゆえに、私も一人だけ違うことを主張する問題児であることを深く、謙虚に自覚しつつも、しかし「新たな情報」を発信し続けております。そしてその「新たな情報」というのは、「日本には中国や北朝鮮といった国防・軍事の脅威があるけれども、しかしすでに日本は金融侵略されていた」ということです。これは、「まさかのまさかの秘されてきた新情報」であるがために、なかなか信じてもらえず、耳を傾けてもらえないことも多いのですが、実は日本は金融侵略されており、デストピア社会になっていたのです。デストピアとは、ユートピアの反対のことです、地獄的な社会のことです。

資本主義の終焉は近い

私には、一つの確信があります。というのもおそらく『幸福の科学』の幹部を含めたほとんどの方が、すでに日本が金融侵略されていることに気がついていないからです。それは我が師の『資本主義の未来』の中での、次の言葉からも分かります。

教団の経営に関係する方々が、資本主義のところに、やたらとこだわっているようです。春頃、私は、「資本主義が死んだ」ということを言ったのですが、それが非常に気になっているらしいのです(二〇一四年三月三十日、HS政経塾での法話「未来創造の帝王学」での発言)。
しかし、そんなに驚くようなことはありません。簡単なことです。

日銀がゼロ金利をずっと続けているのに、経済がまったく発展しないのはどういふことかという点、基本的には、「資本主義経済が終わりを迎えている」ということを意味しているだけのことです。はっきり言えば、そうです。

もっと言えば、「ゼロ金利といっても、実質マイナス成長になっている」というのであれば、実は、「資本主

義経済と逆のもの」が起きているわけです。タダの金利で資金がいくらでも供給されているのに、経済発展は減速しているわけですから、これは、資本主義経済と反対の方向に向かっています。

したがって、“異次元ポケット”に入ったとしか言いようがない方向に進んでいると思います。

『資本主義の未来』

我が師のこの言葉からも、どうやら当会の幹部をふくめたほとんどの方々が、大半の日本の方々と同様に、すでに日本が金融侵略され、デストピア化していることに気がついていないことが分かります。つまり無神論、唯物論を根底に持ち、そして何でもかんでも公営にして、結果平等にしてしまう共産主義は、まったくダメだったわけですが、実は資本主義にも、かなり問題があったわけですから。そしてそのことにどうやら当会の幹部、もしくは当会の経済学者たちも、どうやら気がつかれていないようです。なぜなら、後に詳しく説明いたしますが、実は何でもかんでも民営、民間にすると危険極まりないからです。

そしてそういった意味では、たしかに我が師が言われ

ているように、資本主義にも終わりが到来しつつあり、今まさに新たな大繁栄の時代が始まろうとしているからです。ゆえに私は、この秘されてきた新情報を知った者として、すべてを覚悟の上で、たとえ自分一人でも、異なる情報を発信することを決意したわけです。

はつきり言います。東大でも教わりませんが、日本はすでに金融植民地であったのです。

日本は金融侵略された

では、日本はどのようなカタチで侵略を受けたのでしょうか。

たとえば先の大戦について、タイ王国の元首相ククリット・プラモード氏はこう述べました。

日本のおかげで、アジアの諸国はすべて独立した。日本というお母さんは難産して母体をそこなったが、生まれた子供はすくすく育っている。今日、東南アジアの諸国民がアメリカやイギリスと対等に話ができるのは、いったい誰のおかげであるのか。それは「身を殺して仁（じん）をなした」日本というお母さんがあったためである。（1941年）12月8日は、我々にこの重大な思想を

示してくれたお母さんが一身を賭して、重大決意された日である。さらに（1945年）8月15日は、我々の大切なお母さんが病の床に伏した日である。我々はこの二つの日を忘れてはならない。

政治思想において、「保守」とか、「右派」と呼ばれる人ならば、誰でもよく知っていることですが、先の大戦は、日本は「侵略」のために戦争したのではなく、自国の「防衛」のため、そしてアジア諸国の「解放」のために戦いました。しかし戦後、悪名高い『東京裁判』が行われて、「日本は悪い侵略国家だった。だから正義の側に立つ米国・連合国によって日本は倒された。こうして日本に民主主義が出来あがった」という偽の歴史観が、日本のみならず世界中に広められました。その裁判の中で、ありもしない「南京大虐殺」を、日本は行なったことにされてしまいました。

この偽の歴史観を信じて、日本人なのに反日化しているのが、政治思想において、「革新」とか、「左派」と呼ばれている人たちです。彼らは『日教組』という教職員労働組合を作って、日本の小中学校で、「日本は悪い侵略国家であり、南京で大虐殺まで行なった」といった

偽の自虐的な歴史観を教えております。

普通に考えて、「防衛」と「解放」ならば正義ですが、しかし「侵略」と「虐殺」は悪であり、そして見事なまでに、『東京裁判』と、その後の日本の公教育、さらには世界中のマスコミによって、「正義」と「悪」が入れ替えられてしまいました。

しかしなぜ、「正義」と「悪」は入れ替えられたのでしょうか？どうして裁判を起こして、教育を使い、マスコミも駆使して、「正義」と「悪」を入れ替える必要があったのでしょうか？

日本の広島と長崎に原爆を落とした当時の米国大統領ハリー・トルーマンは、次のように述べたと云われております。

猿（日本人）を『虚実の自由』という名の檻で、我々が飼うのだ。

方法は、彼らに多少の贅沢さと便利さを与えるだけで良い。

そして、スポーツ、スクリーン、セックス（3S）を解放させる。

これで、真実から目を背けさせることができる。

猿（日本人）は、我々の家畜だからだ。

家畜が主人である我々のために貢献するのは、当然のことである。

そのために、我々の財産でもある家畜の肉体は、長寿にさせなければならぬ。

（化学物質などで）病気にさせて、しかも生かし続けるのだ。

これによって、我々は収穫を得続けるだろう。これは、勝戦国の権限でもある。

こんな酷いことをトルーマンが本当に言ったかどうか、映像や音声が残っているわけではないので、その真相は明らかではありません。ならばこのトルーマンの言葉が真実かどうか、これを考え、検証してみる必要があります。なぜなら、もし、この言葉が事実であれば、私たち日本人は、「単なるみせかけの自由」の中を生きる悲しくも哀れな民であり、日本は金融植民地であったということになるからです。

彼らはなぜ東京裁判を起こして、教育やマスコミまで使って、「正義」と「悪」を入れ替えたのでしょうか。それは簡単なことです。日本こそ、彼らによって「侵略」され、「虐殺」を受けたからであり、この残酷な事実を

覆い隠すためです。日本が大繁栄の時代を迎えるためには、「日本こそ侵略され、虐殺を受けた」という悲しき事実を、まず前提にしなければなりません。

先ほど私は、この小冊子の中で、たった2つのことを日本人が知れば、日本人はお金で悩んだり苦しんだりしない大繁栄の時代を迎えることができる、ということを書きました。そのうちのひとつが、「覆い隠されている政治的な真実」です。どこの大学でも教えられていない、「すでに日本は金融植民地であり、心邪悪なる者たちによって、意図的に日本はデストピア化されてきた」ということです。

マンハッタン計画と人体実験

先ほどのトルーマンの言葉の中で、彼は私たち日本人のことを「猿」と呼び、蔑んでいるわけですが、まずこの部分を検討してみる必要があります。

広島と長崎に落とされた原爆、実はこれは『マンハッタン計画』といって、原爆投下の数年前から計画されていた「プルトニウム人体実験」でした。

なんと当時のアメリカは、自国民にまでプルトニウムを注射して、人体にプルトニウムがどんな及ぼすのかを

調べており、この「プルトニウム人体実験・マンハッタン計画」の一環で、広島、長崎に原爆が落とされて、30万、20万もの日本人が虐殺されたのです。この事実については『アルバカーキトリビューン紙』が掲載し、しかもピューリッツァー賞を受賞しています。また6年を費やして、『プルトニウムファイル』——冷戦下におけるアメリカの極秘医学人体実験』という本にもまとめられています。

本当に驚くべきことですが、広島、長崎に落とされた原爆は、日本人に対するプルトニウム人体実験だったのです。

当時の国際法では、民間人に対する軍事攻撃は違法です。そして日本は、この国際法を守ることにつとめました。しかし米国は、ことごとくこの国際法を破って、軍人、民間人を問わない無差別攻撃を行い続けたのです。

その一つに東京大空襲があります。当時の米国はユタ州ソルトレークシティーの砂漠に、ダグウェイ試爆場を造り、わざわざ日本家屋の建物を緻密に再現して、いか





にすれば東京の町を火の海にできるか、綿密な実験を行いました。その結果、10万人の東京都民が虐殺されました。

東京裁判で主張された「南京大虐殺30万人」は捏造ですが、しかし実際は、その2倍の数にもなる約60万人の日本人が、東京、広島、長崎において、大虐殺されたわけです。

これらのことから考えても、トルーマン大統領が日本人を「猿」と見なしていたことは、どうやら間違いないでしょう。

特別会計という本物予算

次にトルーマンの言葉で問題となるのは、やはり「多少の贅沢さと便利さを与えるだけで良い」という言葉が非常に気にかかります。たしかに日本は豊かになりました。それは日本人が物造りに長けており、「メイド・イン・ジャパン」のブランドを築き上げたことの結果でもあります。しかし日本国民は、本当にその豊かさを満喫しているのでしょうか？

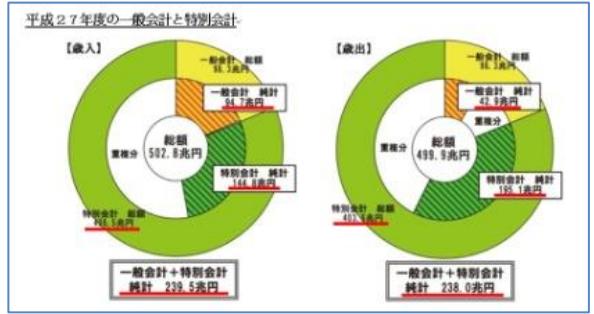
金融経済の本質を見ていくと、実のところ、日本国民は自分たちが築き上げた繁栄を、「まったく」と言つて

も過言ではないほど、受取つてはいないのです。私は『Youtube』をやっております。私の動画を見た方が、カナダから私に会いに来ました。日本人の彼はシェフとなり、カナダに出てみて、はじめて日本の異様に気が付いたといいます。「日本は豊かな国なのに、なぜ日本人はこれほどまでに貧しい暮らしを強いられるのだろうか？」と。

「豊かな日本なのに、日本人の生活は貧しい」、その理由は実に簡単です。なぜなら日本の本当の税金・予算が海外に消えているからです。

日本国民が見せられている予算は、「一般会計」という単なるタテマエ予算だけで、その奥には数倍におよぶ「特別会計」という名のホンモノ予算があります。この本物の予算については、大学教授どころか、政治家も、大臣さえも知らない場合があります。実際に2001年4月の時点で、宮沢喜一財務大臣さえ把握していなかったのです。残念ながら、幸福の科学の人たちも、今のところこの「特別会計」の存在を知らない人がほとんどです。





国民が消費税、所得税、法人税、住民税など約50個にもおよぶ大量の税金を支払うことで、政府の予算が組まれているわけですが、一般会計というタテマエ予算は、税収と国債(借金)の発行で、毎年約100兆円程度です。しかしその奥に、実にその4倍の400兆円にもおよぶホンモノ予算、特別会計があります。一般会計と特別会計では、

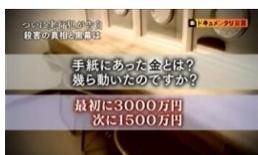
重複している部分があるために、平成27年度の一般会計と特別会計の純粋な合計は約240兆円です。

民主党の石井紘基という政治家は、国会議員が持つ「国政調査権」という憲法で認められた権限を使って、この日本の本当の税金・予算である「特別会計」を暴き、このお金がどこに消えているのか、それを国会で暴露しようとした。するとその3日前の2002年10月25日に、彼は殺されてしまいました。彼は亡くなる直

前、周囲の人々に「これで日本はひっくり返る」と、話していたそうです。殺したのは尹白水という在日朝鮮人の暴力団員です。刑務所送りとなった尹は、テレビの取材で「計4500万円もらって頼まれたからやった」と答えています。

米経済紙『フォーブス』の元アジア太平洋支局長のジャーナリスト、ベンジャミン・フルフォード氏は、殺された石井紘基議員の遺族への取材等を通して、いったい石井議員が、国会で何を暴こうとしていたのかを調べました。彼の調べによれば、「結局、日本のホンモノの税金・予算・特別会計は海外に消えている」と言います。

国民の目には、タテマエの税金と予算しか見せられておらず、そして国民から選ばれた国会議員が、憲法で認められた権限「国政調査権」を使って、本物の予算と税金の行方を、国会で暴露しようとするや殺されてしまう、これを考えてもトルーマン大統領の「多少の贅沢さ他便利さを与えるだけで良い」という言葉が、より真実性を帯びてきます。



民間中央銀行の闇

「特別会計という本物の税金と予算が海外に消えていく」、これだけでも十分に驚きですが、金融経済の闇は、実は、もつともつと奥が深いのです。なぜなら実は「円」や「ドル」というお金を印刷し、発行し、管理している日銀やFRBといった中央銀行は、日本政府やアメリカ政府の持ち物ではないからです。これらの通貨発行権を持つ中央銀行は、政府から独立した民間の中央銀行です。つまり日本も、アメリカも、政府が「通貨発行権」を持つていない、という驚愕の事実があるわけです。

ここに、どこの一流大学でも教えられていない、資本主義の恐ろしさが隠されてあったのです。なんでもかんでも公営にする共産主義は大問題ですが、しかし通貨発行権を持つ中央銀行まで民営・民間にしてしまうのも、やはり大問題なわけです。だから資本主義の終わりが近づいているわけです。

このことについて、第3代アメリカ大統領トーマス・ジェファソンはこう述べていました。

銀行は軍隊よりも危険である。

もしも民間銀行に通貨発行を奪われたら、我々の子孫はホームレスになるまで、銀行に利益を吸い上げられて

しまうだろう。

通貨発行権、それは、単なる紙キレをお金に変える力です。それはつまり、何の価値も持つていない「単なる紙キレ」を、人々が「欲しい、欲しい」と望み、必死に労働して獲得する、「価値ある紙」に変えることのできる大きな力のことです。すなわち「通貨発行権」とは、人々を支配することも可能な力であり、軍隊をも動かすことができる危険な力なわけです。

だからこそ、第16代大統領エイブラハム・リンカーンはこう言っていました。

政府は、自分で政府に必要な費用をまかない、一般国民の消費に必要なすべての通貨を流通させるべきである。通貨を創造し、発行する特典は、政府のたつた一つの特権であるばかりでなく、政府の最大の建設的な機会なのである。このシステムを取り入れることによって、納税者（国民）は計り知れないほどの金額の利子を節約することができる。それでこそお金が人間の主人ではなくなり、人間が人間らしい生活を送るために、お金が召使になつてくれるのである。

この発言から一カ月後、リンカーンは「グリーンバックス」という政府支配を発行して暗殺されます。

つまりエイブラハム・リンカーンという偉大な大統領は、政府に通貨発行権があることこそが、国民がお金の主人となって、人間が人間らしい幸せな暮らしを送る上で、必要な大条件である、と述べたわけです。

だからトーマス・ジェファソンという偉大な大統領は、通貨発行権を持った中央銀行は軍隊よりも危険であり、もしも通貨発行権を奪われたら、国民はお金の奴隷となり、国際銀行家の奴隷状態に置かれてしまうだろうと、そのように述べていたわけのです。

しかしアメリカは1913年に、民間銀行に通貨発行権を奪われてしまいました。当時の第28代アメリカ大統領ウッドロー・ウィルソンは晩年、こう発言していたのです。

私はうっかりして、自分の国を滅ぼしてしまいました。大きな産業国家は、その国自身のクレジットシステムによって管理されています。(民間中央銀行FRBが設立されたことによって)私たちのクレジットシステム



は一点に集結しました。

したがって国家の成長と私たちのすべての活動は、ほんのわずかな人たちの手の中に有ります。(通貨発行権が奪われたことで)私たちは文明開化した世界においての支配された政治、ほとんど完全に管理された最悪の統治の国に陥ったのです。

このようにアメリカ政府も1913年に、民間銀行に通貨発行権を奪われました。だからそれから50年後の1963年6月4日、ジョン・F・ケネディ大統領は、アメリカの金融システムを再建しようとして、「大統領令」を発して、5ドルの政府紙幣を発行したわけです。このケネディの行為はまさに、銀行家たちからアメリカ政府に、通貨発行権を取り戻そうとする行為でした。するとその5ヶ月後、彼はダラスにて謎の暗殺に遭い、そして彼が発行した5ドルの政府紙幣も、すぐさま回収されてしまいました。



日米を金融侵略する国際銀行家

日本の「円」にしても、米国の「ドル」にしても、これらを発行している日銀やFRBといった中央銀行は、民間の中央銀行であり、スイスのバーゼルにある国際決済銀行（Bank for International Settlements）、略称「BIS」の管理下にあります。そしてこのBISも、国連とも、スイス政府ともまったく関係のない民間の国際中央銀行です。これは都市伝説でも何でもなく事実です。「信じられない」と思われるならば、ネットにホームページが出ていますので、BISに国際電話をかけてみれば、誰でも確認することができます。しかもこの国家権力を超越した国際銀行は、ただの一度も会計の検査を受けたことがなく、どこにも監督されたことがありません。そもそもこの地球という星に、スイスのバーゼルにあるBISを会計検査、指導監督できる機関が存在していないことが、この星の問題なわけ



です。

この国際銀行こそが、米国や日本などの世界各国の中

央銀行に対して、規制をかけて、世界各国のお金を管理しているわけです。そしてBISを営むことで、日本やアメリカの経済金融を動かしてきたのが、歴史の表舞台にも、経済学にも登場しない国際銀行家たちだったので。アメリカよりも先に、1815年の時点で、国際銀行家たちによって金融侵略されてしまった国はイギリスですが、イギリスの元首相ベンジャミン・ディズレーリは次のように述べています。

世界は舞台裏を知らない人には想像もつかない人々によって支配されている。

これが現実であり、秘されてきた国際政治の真実です。「特別会計」という本物予算が海外に消えている」、「日本政府が通貨の発行権を持っていない」、そして「東京大空襲、広島と長崎へ行われた原爆投下は大虐殺だった」、このたった3点のことからでも、「日本こそ金融侵略されていて、大虐殺が行われた」という驚愕の真実が見え始めてきます。

実は先の大戦は、日本は「解放」と「防衛」のために戦いましたが、しかしその日本こそ「虐殺」され、「侵略」を受けていたのです。そしてその事実を隠すために、

わざわざ悪名高い『東京裁判』が行われて、そして「正義」と「悪」が見事なまでに入れ替えられて、「日本は悪い侵略国家であり、南京大虐殺を行なった」という偽の歴史観が世界中に広められたわけです。

日本を金融侵略しているのは、けっして米国ではなく、国際銀行家です。むしろ米国は、日本よりも一足先に、1913年の時点で、金融侵略されていたわけです。

1790年、国際銀行家たちの中心の一族でもあるロスチャイルド家の初代、マイヤー・アムシェル・ロスチャイルドはこう言っていました。

私に一国の通貨の『発行権』と『管理権』を与えよ。そうすれば、誰が法律を作ろうと、そんなことはどうでも良い。

まず私たちが大繁栄の時代を到来させるためには、このすぐ目の前で、今も、昨日も、そして明日も行われる、通貨発行権という紙の詐欺に気づかねばなりません。

そもそも経済学に大問題が

マイヤー・アムシェル・ロスチャイルドと同時代のイ

ギリスに生きた経済学者に、アダム・スミスという人がいます。そして彼によって始まったとも云われる経済学は、19世紀にはカール・マルクスに受け継がれ、マルクスによつて「共産思想」が説かれ、20世紀にはジョン・ケインズに引き継がれ、そして21世紀に入った最近ではトマ・ピケティという経済学者たちに受け継がれてきました。これらの世界的な有名な4人の経済学者たちは、主張していることはそれぞれ様々、ばらばらですが、しかし共通していることがあります。それは、ただの一人も「民間中央銀行」と「通貨発行権」の問題に触れていない、ということ。彼らは誰一人として、国際銀行家について触れていません。

同志社大学の元教授・山口薫さんは、「世界のトップ10に入る」と言われているカリフォルニア大学バークレー校で、ノーベル経済学者のジェラルド・ドブルーヤジョージ・アーサー・アカロフといった、世界に名だたる経済学者たちから、経済学を学んで来られた方ですが、その彼が述べています。

現在の経済学では中央銀行については何も教わることはなく、また現在の貨幣制度というものは、我々が教えて頂いた経済学とはまったく異なり、中央銀行が無か

からお金を創り出している。

東大だろうが、どこの一流大学だろうとも、経済学の授業において、「中央銀行」と「通貨発行権」という問題は、これまでスルーされてきました。つまり経済学そのものに問題があるのです。

たとえば『幸福の科学』にも、鈴木真実哉さんという経済学者がおられます。しかしこの方は、「理念経済学」というものを追求されている方であります。この方が、講演等でお話になられる内容は、「個人であれ、企業であれ、国家であれ、どういう心構え・精神・思想を持つことで成功・繁栄するか」、ということです。たとえば鈴木真実哉さんは、「3回、失敗してもあきらめない人には指導者の可能性があり、10回、失敗してもあきらめない人には天才の可能性があり、成功者は皆、そんな強い信念を持った人たちであり、そうした成功者を嫉妬することなく、一人、二人と出していける世の中が、繁栄の扉を開いていく」といったことを、講演などで説かれておられます。つまり彼が話すその内容は、きわめて思想的、精神的、宗教的であり、あくまでも鈴木真実哉さんは、理念経済学者であって、けっして「通貨発行権」

や「国際銀行家」に関する話はなさっていません。

一方の山口薫元教授は、マクロ経済学といって、国家の政治政策にそのまま直接、関係のある経済学を学ばれた方です。しかしそのマクロ経済学において、「通貨発行権」にまったく触れないのです。もしもこれに触れると、ケネディ元大統領のごとく、ことごとく消されてきたのです。それはつまり、「経済学者たちが本当の経済を知らない」という驚愕の事実があったわけです。

政治経済思想家で、フアイナンシャルプランナーの天野統康という方も、「経済の大切な部分、お金の創造と消滅の両方について書かれている教科書は一つも無い。だから経済の大切な部分は、義務教育でも、大学教育でも教えていない」と述べています。

たとえば1929年の世界恐慌当時のシカゴの大学の教授8名が、「中央銀行制度はおかしい、通貨発行権は民間銀行にあるべきではなく、やはり米政府に返すべきだ」と、FRBに対して意見を唱えて、『シカゴプラン』という経済の提案を行ったことがあります。しかし結局、この『シカゴプラン』はタブー視されて封殺されてきました。

そして近年、同志社大学の山口薫元教授も、「中央銀

行制度」に疑問を持ち、研究を重ねて、ようやくこの『シカゴプラン』にたどり着きました。そして研究を重ねた結果、やはり「通貨発行権が民間銀行にあることはおかしい」と、そう主張を始めました。すると彼も、経済学のタブーを破つたためか、突如、同志社大学を解雇されてしまいました。

ちなみに山口元教授が、カリフォルニア大学において、経済学を学んだノーベル経済学者のジョージ・アースラー・アカロフの妻は、ジャネット・ルイーズ・イエレンという人物です。このジャネット・イエレンという女性は、2018年2月まで、FRB議長を務めておりました。つまり「金融経済のカラクリの中心にいる女性の夫が、世界のトップの大学において経済学を教えていて、ノーベル経済学賞を貰っている」、ということです。

しかも実はノーベル経済学賞にも問題があります。なぜならこの経済学賞の正式名称は、「アルフレッド・ノーベル記念経済学スウェーデン国立銀行賞」などと、そもそも「銀行」という名称が入っているからです。

では、「スウェーデン国立銀行」とは何かと言えば、1668年に、国際銀行家たちによって世界で最初に創られた中央銀行です。そのためにこの経済学銀行賞だけ

は、賞金の出所も、他のノーベル賞とは異なります。なぜなら他の部門が、ノーベル財団が運用して得た利益から賞金に充てるのに対して、この銀行賞だけは、スウェーデン国立銀行によって賞金が支払われているからです。

すなわちノーベル経済学賞とは、中央銀行制度のための銀行賞だったわけです。それを裏付けるかのように、1983年にジェラルド・ドブルーがノーベル経済学銀行賞を受賞した際、記者会見の席で、「先生の理論は、現在の米国経済が置かれている状況にどのように役立つのか」と問われて、彼は「私の一般均衡理論は、日々の経済活動にはまったく役立ちません」と平然と答えました。「ノーベル賞」を名乗る銀行賞は、マクロ経済学の真相には迫らず、実際の経済には関係ないのです。

これですべてが分かるはずですが、つまり「一流大学で教えられている経済学その根本部分に、すでに大きな問題がある」ということです。

日本の正義が捻じ曲げられて、日本が悪者にされたように、歴史にもかなり嘘があります。これと同様に、経済学にもかなり嘘が紛れ込んでいる、ということですからどの一流大学で、いくら経済学を学んだところで、

経済金融問題の本質は学べない部分があるわけです。

そしてここにこそ、『幸福の科学』の幹部・経営陣の方々もお気づきにならない事実として、何でもかんでも民営化することの危険性と、そして資本主義の闇の部分、資本主義の終わりが見え隠れしているわけです。

ケインズたちは金融の闇を知っていた

しかし今から百年ほど昔の1930年、経済学者のジョン・ケインズという方は、次のようなことを述べていました。

およそ100年後には、ほとんどの経済的問題は解決されてしまい、人々の悩みは余暇をどのように使うか、ということになるだろう。『孫の世代の経済的可能性』

このケインズの言葉からも分かるように、彼ら経済学者たちが、「民間中央銀行」と「通貨発行権」という経済金融の闇・大問題を知らなかったわけではないのです。おそらく彼らは、アメリカ大統領さえ殺めかねない国際銀行家のことを恐れて、あえてこの問題に触れなかったのでしょう。ケインズがこの言葉を述べた1930年は、

ちようどシカゴの大学教授たちが、「シカゴプラン」を立ち上げたころです。

だからケインズは、知ってはいたのですが、しかしあえて予言のように「百年後には経済の問題をすべて片付けて、人々は余暇をどのように使うかで頭を悩ませているだろう」と述べたわけです。それはあたかも、今現在は、まるで金融経済の世界の中に、悪魔の手が入り込んで、詐欺が行われているようなものですが、ケインズはいつの日か、アダム・スミスの述べた「神の見えざる手」が働いていくことを見越していたかのようです。

実際に、もしも日本人が、「特別会計」と「通貨発行権」という経済の問題を、すべて解決することができたのならば、日本人は「お金」という紙にはまったく悩んだり苦しんだりしない、大繁栄の時代を迎えることになります。

それは厚さ0.1ミリの紙を、もしも26回、折り曲げることができたら、富士山の高さを超え、50回で太陽に達し、102回で宇宙の果てまでいくがごとく、1930年ごろにケインズが述べたように、それから百年の2030年ごろ、つまり今からわずか十年ほどで、十分に可能なことなのです。そのためには、紙の詐欺を暴

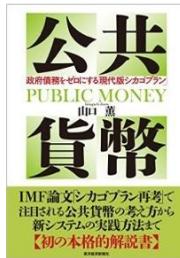
くと共に、無限の大きさを持つ奇跡の紙が必要であり、その紙は実はすぐ近くににあるのです。

私たち日本人が、目の前で行なわれている紙の詐欺に気がつき、そしてすぐ近くにある奇跡の紙に目を向けていく時、日本から世界に向けて夜明けが始まっています。それはまさに、黄金の時代の始まりです。

私たちが毎日遭っている詐欺被害

山口薫元教授が『公共貨幣』の中でも述べているように、もしも民間の中央銀行から通貨発行権を政府に取り戻して、政府紙幣を発行すれば、今ある日本政府の1500兆円にもなる借金は雪のように消えていくのです。それが秘されてきた、なおかつ今、徐々に明かになりつつある、本当の経済学です。

日本では、タテマエ予算・一般会計とホンモノ予算・特別会計を含めて、とにかく高い税金となっており、その理由として、政府の借金が膨大にあることがありません。しかしもしも政府に「通貨発行権」があれば、



その借金は雪のように消えていくわけです。つまり「通貨発行権」が民間銀行ではなく、日本政府にあれば、高い税金は必要ないわけです。もちろんホンモノ予算・特別会計が海外に消えていることも、日本の税金が高い理由の一つでもあります。このように通貨発行権を持たない日本という国は、金融経済的に見れば、確実に植民地なわけです。

では、なぜ政府に通貨発行権があり、政府紙幣を発行すると、政府の借金は消えていくのでしょうか。

実は民主主義に基づいて、きちんと正当に国民から選ばれた、なおかつ景気や不況に対して責任を持った政治家が、政府紙幣を発行して、そして市中銀行が行っている「信用創造」の額を管理・統括していけば、政府は必要な時に、必要な分だけお金を創りだせるからです。

「信用創造」について、ごくごく簡単に説明いたしますと、実は私たちの生活に無くてはならない「お金」というものは、「東京三菱UFJ」とか、「みずほ」とか、「三井住友」とか、「りそな」とか、こういった市中銀行が、人々に貸し出すことによって、「無」から創り出していたのです。たとえば貴方が家を買うとして、1億円を市中銀行から借りるとしても、その1億円はその市

中銀行には存在しなくてもよいのです。市中銀行はポタン一つ押しして、貴方の預金通帳に、ただ「1億円」と書き込めばそれでよいのです。そしてそれは貴方から住宅ローン会社へと支払われます。しかし貴方は、その「見たことのない1億円」を背負って、返済していくこととなります。そして貴方が返済したその1億円で、住宅ローン会社は、社員に給料を支払ったり、取り引き先の会社を支払ったりするわけです。実は「お金」は、市中銀行が世の中に創り出しており、そして返済すると、その「お金」は雪のように消えていくのです。これが最近、明らかになった経済学です。

そして市中銀行を管理、統括しているのが中央銀行の日銀やFRBであり、さらにその上に、中央銀行の中央銀行BISがあるわけです。

だからこそ、政府が政府紙幣を発行して、そして市中銀行が行っている信用創造の額を管理・統括していけば、政府は必要な時に、必要な分だけお金を創りだせるために、政府の借金は雪のように消えていくわけです。(ただし日本のように、政府の借金が自国の国債の場合)

しかし日本もアメリカも、現状の銀行制度はそうはなっていない。日本もアメリカも、現在は国民から選

ばれたわけではなく、また景気や不況に対して、何ら責任を持たない、日銀やFRBといった民間会社(銀行)に勤務する人たちが、「民間紙幣」を発行して、そして市中銀行の信用創造を管理・統括を行っているわけです。このことについて詳しく知りたい方は、「腐敗した銀行制度」と題して、カナダの12歳の少女が語っている有名な動画をご覧ください。一流大学でも教わらない経済学の真相を、わずか12歳の少女が語っていることは、まさに驚愕です。

単純に言って、政府がお金を得る方法は3つしかありません。1つ目は税収です。2つ目は国債の発行、すなわち借金です。

そして3つ目が政府紙幣です。つまり政府みずからがお金を創るという方法です。リンカーン大統領が「お金を発行する特典は、政府のたった一つの特権であるばかりか、政府最大の建設的な機会なのである」と述べていたように、「政府が通貨を発行する」、実はこれこそが、私たち国民にとって一番大切だったのです。①税金の徴収、②国債の発行、③政府紙幣、これ



私が見つけたことは、銀行と政府が共謀して、財政的にカナダの人々を奴隷にしているということです。

ら3つが、政府がお金を得る方法であり、その中でも特に最も大切なのが、3つ目の政府紙幣なのです。しかし日本も、アメリカも、その最も大切な権限が政府にはなく、民間の中央銀行にあります。だからそのために、政府の借金は増え続け、それと共に、税金も上がり続けているわけです。

だからこそ、『フォード・モーター』の創業者・フォードは、皮肉を込めて次のように述べたわけです。

国民が銀行制度や貨幣制度を理解していないことは良いことだ。もし国民がそれを理解したら、明日夜が明ける前に革命がおきるだろう。

このフォードの言葉は、表現を変えれば、「金融経済のカラクリを知れば、明日の朝にも革命が起こる」ということです。しかしなぜ、フォードは、こんなことを述べたのでしょうか？

それは実に簡単なことです。なぜなら私たちは毎日、毎日、「金融経済のカラクリ」を知らないがために、詐欺被害に遭っているようなものだからです。お金のために働く度にお金のために電車や車に乗って出かけていく度に、お金のために上司に叱られてストレスを抱え、

胃薬を飲む度に、そしてお金を使って生活する度に、高い税金を払う度に、増え続ける税金に頭を悩ませる度に、そして特別会計が海外に消えていく度に、私たちは常に金融詐欺に遭っていたのです。

だからフォードが述べたように、金融経済のカラクリを知り、今、私たちの目の前で行われている金融詐欺について知り、そして自分たちが詐欺の被害者だと知れば、たしかに明日の朝にでも革命が起きることでしょう。

だからこそ真実を暴き、そして広める必要があるのです。

陰謀論を乗り越えずして未来はない

アメリカ元大統領のトーマス・ジェファソンが、「国際銀行家は軍隊よりも危険である」と述べたように、そしてイギリス元首相のベンジャミン・デイズレーリが、「国際政治の舞台裏は想像もつかない人々によって支配されている」と述べたように、たしかに政治には裏があります。それはつまり、「政治には陰からの謀はかりごとがある」、「政治には陰謀がある」ということです。

そして国際銀行家たちは、わざわざアメリカのCIA

を使って、世に「陰謀論」という言葉を流布して、政治の真実を語る人に「変な人」というレッテルを貼ってきたのです。実はこれまで、このCIAこそ、国際銀行家の手足・実行部隊として動いてきました。

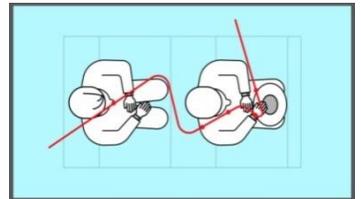
アメリカの歴史学者ランス・デヘイヴンスミスが2013年に記した『アメリカの陰謀論 (Conspiracy Theory in America)』とこう書物によれば、「陰謀論」という言葉が、アメリカの日常会話で自然に使われ、そして陰謀論を語る人々が、「おかしな人」というレッテルを貼られ、不思議な目で見られるようになったのは、1960年代以降のことだそうです。彼は自身の書物の中でこう記しています。

米国人の多くは、陰謀論というレッテルが1967年に始められた中央情報局(CIA)のプロパガンダ計画によって侮蔑的な言葉として広められたと知ったら、ショックを受けるだろう。

通貨発行権を中央銀行から取り戻そうとした1963年のケネディ大統領暗殺事件、アメリカ国民の大半の人々が、政府が発表する公式見解に対して、強い疑いの思いを持ちました。なぜならケネディ大統領を撃つたと

される弾丸は、「マジック・ブレット(魔法の銃弾)」と呼ばれ、どう考えても理屈に合わないからです。暗殺犯は、オズワルドという人物と発表されていますが、しかし彼を犯人とするには、自然な点が多く、この情報を信用していいアメリカ人も数多くいました。

しかもこの暗殺犯とされるオズワルドは、逮捕後の2日後に、ダラス警察署の中でジャック・ルビーという男に撃たれて殺されたため、裁判の場に立って真相が語られることはありませんでした。大統領暗殺の容疑者が、どうしてこうも簡単に、警察署内で殺されたのか謎ですが、そのオズワルドを殺したジャック・ルビーも、その後、獄死するのです。そのために真相は謎のまま、暗殺事件は迷宮入りとなりました。実はケネディ大統領暗殺事件から、わずか数年のうちに、事件の証人や、それに何らかの関係があった人たちが、次々と自殺、事故、他殺によって、十六人も死んでいくという前代未聞の現象が生じたのです。しかも事故によって亡くなった人たちは皆、接触事故ではなく単独事故です。



これによって、アメリカ国民も当然ながら、「ケネディ大統領暗殺の裏には何かある」と気づきました。「通貨発行権」と国際銀行家の存在には気づかずとも、アメリカ国民も、ケネディ大統領暗殺事件に対して、強い疑いの思いを抱いたのです。

するとその数年後から、CIAがテレビ・ラジオなどの電波を使って、「陰謀論」という言葉を流行らせて、そして政治の裏・真実を語る人々に、「変な人」というレッテルを貼ることによって、「通貨発行権」と「中央銀行」という真実を、さらに埋もれさせていったのです。

おかげで、わたしと与国秀行も、「陰謀論を語る変な人」という目で見られ、時には嘲笑され、時には無視され、時には相手にされずに黙殺されてきました。しかしそれでも、「真実を伝えなければならぬ」と、幸福実現党の中で孤立しながらも、異なることを主張しているわけです。

しかししたしかに言えることとして、政治には裏があり、「陰謀がある」ということは事実です。そうである以上、勇気をもって真実を語り、なんとしてでも「通貨発行権」を取り戻さなければなりません。ですからどうか皆さまも、陰謀論を乗り越えていただきたくと思います。

日本も歩んできた滅びの道

「世界的な事件は偶然に起こる事は決してない。

そうなるように前もって仕組まれていたと私はあなたに賭けてもいい」

これは、アメリカ第32代大統領フランクリン・ルーズベルトの言葉と云われております。

アメリカという国が、『ジギルとハイド』のような、どこか二重人格性を持った国であることは、もはやある程度、知識を持った人ならば歴然に分かることです。アメリカの一般的な国民は、平和と正義を愛する国民であり、リンカーンやケネディなど、偉大な大統領も大勢おりました。しかしかつてアメリカは、日本を真珠湾攻撃にいたるように窮地に追い込んで、ルーズベルト大統領が「リメンバー・パールハーバー」と演説することで、自作自演のカタチで戦争を開始しました。そしてその戦争の中で、大虐殺を行い、しかも戦後にはわざわざ『東京裁判』を行って、「正義」と「悪」を入れ替えたのです。

アメリカは『ジギルとハイド』のように、まぎれもなく二重人格性を持った国です。しかしそれはアメリカが、日本より先に国際銀行家に通貨発行権を奪われて、民間

中央銀行FRBを設立させられて、金融侵略されていたからです。

アメリカ第40代大統領のロナルド・レーガンは、なぜアメリカ政府には、「通貨発行権」が無く、FRBに「通貨発行権」があるのか、前々から気になっていました。この意味と理由が彼には分からなかったわけです。政治経済の本質を分からない人々が、政治家になったり、政治家を目指したり、あるいは大統領になることが、国民にとっては不幸の始まりです。

そこでレーガン大統領は、当時のFRB議長のポール・ボルカーというユダヤ人に面会を求めました。しかしまんまと断られました。「大統領が面会を求めても断られる」、この事実を見ても分かるように、大統領は国際銀行家が描く絵の中の単なる俳優にしか過ぎません。皮肉にもレーガンは元役者です。

しかし最終的にはボルカーが折れて、昼食を取りながら面会をしたそうです。そしてレーガンは、開口一番、「FRBはなぜ必要なのか？という質問を、私はよく受けるんだが」と述べたそうです。するとその質問に、ボルカー議長は慌てたそうです。そしてその後、レーガン大統領銃撃暗殺未遂事件が起きます。

ボルカーの次にFRB議長になったグリーンズパンは、そのやりとりを見ておりました。そして彼は自身の著書の中で、「政治家はFRBに触れるべきではない」といった内容のことを述べています。

第7代大統領アンドリュー・ジャクソン、第16代大統領エイブラハム・リンカーン、第20代大統領のジェームズ・ガーフィールド、第29代大統領ウオーレン・ハーディング、第35代大統領のジョン・F・ケネディ、そして第40代大統領ロナルド・レーガン、彼ら6人の歴代アメリカ大統領に共通していること、それは任期中に暗殺未遂、もしくは暗殺されたことであり、そしてもう一つはFRBに触れたことです。

通貨発行権を持つFRBはアンタッチャブルな存在であり、これに触れると暗殺に遭う、それが大半のアメリカ国民さえ未だに知らないアメリカの真実の姿なのです。

しかしその流れが今、大きく変わろうとしています。かつての日本人に武士道があり、そして侍たちが腰に刀を下げ、そして彼らに侍精神があったように、アメリカやヨーロッパには、ギリシャ時代から受け継がれてきた騎士道があり、カウボーイたちは腰に銃を下げ、そし

て彼らにはフロンティア精神がありました。そのために
幾人ものアメリカの歴代大統領たちが、騎士道精神のも
と、国際銀行家と対決してきました。

たとえば「銀行は軍隊よりも危険である」と述べたト
ーマス・ジェファアソンですが、彼の側近として、第3
代副大統領を努めた方に、アーロン・バーという方がい
ました。この方は、国際銀行家の手先であったアレクサ
ンダー・ハミルトンと、銃による決闘をして勝っていま
す。もちろん銃で撃ち殺しておりますが、決闘なために
無罪となり、こうして当時のアメリカは、通貨発行権を
守り抜きました。そしてアメリカで初めて暗殺未遂に遭
った第7代大統領アンドリュウ・ジャクソンも言います。

銀行は私を殺したいだろうが、私こそ銀行を殺す。
お前たちは腹黒い盗人の巣窟だ。私達はお前たちを一
掃する。

永遠なる神の力によって、お前たちを必ず一掃する。

彼は死の直前も、自身の大統領としての功績を尋ねら
れて、「通貨発行権を守った」と述べています。

かつてのアメリカは、騎士道精神のもと、国際銀行家
たちから、「通貨発行権」を守り抜いてきたわけですが、

しかし1913年、ウッドロー・ウィルソン大統領の頃
に、アメリカは金融的には滅びてしまったわけです。

そして実は日本も、「明治維新後の日銀の設立」、「先
の敗戦による国防力の欠如」、「2001年の大蔵省の解
体による日銀の独立性」、これらによって徐々に、徐々
に、金融的な滅びの道を歩んできてしまったわけです。

報道の自由も無い

では、なぜ日本国民は、自分たちの国が金融侵略され
ている事実を知らないのでしょうか？それは「テレビ」
をはじめとするマスコミに、大きな問題があります。パ
リに本部を持つ『国境なき記者団』によれば、日本の報
道の自由ランキングは世界で72位です。

1位	ノルウェー	2位	スウェーデン	3位	フィンランド
4位	デンマーク	5位	オランダ	16位	ドイツ
22位	カナダ	39位	フランス	40位	英国(38)
43位	米国	52位	イタリア	70位	韓国

72位 日本

マスコミに「報道の自由」が無ければ、情報は行き届かず、日本国民には何も知らされなくなります。これでは日本人は、自分たちの国が金融植民地民であることにも気づかず、たとえ石井紘基のように、金融経済の真実に気がついたとしても、その真実ごと闇に消されてしまいます。

その結果、日本国民は、トルーマンが述べたように、わずかばかりの贅沢さを満喫しながら、「自分たちは自由な民である」と、そう信じ込み、思い込み続けることになってしまいうけです。

日本に「報道の自由」が無いその証拠として、『日本テレビ』の初代オーナーの正力松太郎には、「ポダム」というCIAのコードネームがありました。CIA文書には「本人に知られないように、ポダム（正力松太郎）をポダルトン作戦に使う」と書いてあります。

実のところ、正力松太郎と渡辺恒雄が、国際銀行家の実行部隊のCIAの工作員として、読売新聞、日本テレビ、プロ野球・読売巨人軍などを創立して、しかもその経営資金がCIAから出ていたという事実は、米国政府の心理戦争局の内部文書『Records Relating to the Psychological Strategy Board Working Files 1951-53』

に明記されています。

また国際銀行家の傀儡組織であったGHQは、佐々木康監督を呼び出して、『はたちの青春』という映画の中に、「キスシーンを入れるように」と命令をくだしていたことも分かっております。当時の日本では、人前でキスをするという性文化が無かったのですが、そうした性文化も、彼らによって解放されました。

このことから、トルーマンの「スポーツ、スクリーン、セックス（3S）を解放させる」という言葉に、まともや真実性が出てきます。実のところ「3S政策」といって、アメリカおよびGHQ、そしてこれらの背後にいる国際銀行家たちは、日本国民の関心を「政治」から反らさせ、テレビや芸能、映画、あるいは野球や格闘技などのスポーツに向かせようと画策してきました。それは日本国民が、自分たちが金融奴隷であることに気付かせなくさせるためです。

つまり日本国民の関心を政治から、スポーツ、スクリーン、セックスに向かわせて、日本国民が「特別会計」と「通貨発行権」に気付かず、金融奴隷であることに気付かせなくさせるために、わざわざ彼らは、「3S政策」を行い、それらを日本人に解放したわけです。

我が師・大川隆法総裁の靈查によれば、今もメジャ
ー・リーグで活躍されるイチロー選手は、その過去世は
戦国時代の劍豪・塚原ト伝であるそうです。ト伝は生涯
成績212戦212勝の「無敗の劍豪」、伝説の劍豪で
すが、彼は日本刀をバットに持ち替えて、野球からベー
スボールへと逆輸入するカタチで、日本人として、侍と
してアメリカで戦い、アメリカ国民からも尊敬を受けて
います。また二刀流として知られる大谷翔平さんも、我
が師の靈查は無いものの、しかし「ベースボールの神様」
と呼ばれるベーブ・ルースの記録に挑戦するがごとく、
今、アメリカに渡っておりま。まさに日本の神々は、
国際銀行家たちが仕掛けた「3S政策」さえも、逆手に
とって、相手の力を借りて技をかける柔道のごとく、日
本を大繁栄に導こうとしているかのようです。

日本の電波は奪われた

すでに述べたように、「本人に知られないように、ポ
ダム（正力松太郎）をポダルトン作戦に使う」とCIA
の文書には書かれているわけですが、この「ポダルトン
作戦」こそ、日本人が「報道の自由」を奪われた作戦で

した。ポダルトンとは、「全国的マイクロ波通信網建設
作戦」とも言われています。

そしてこのポダルトン作戦の結果、「正力マイクロ波
事件」が起きました。「正力マイクロ波事件」とは何か。
1950年6月1日に電波三法が施行されたことで、戦
後の日本の放送事業の形態が確立されたわけですが、し
かしその背景において、実は世界銀行・国際銀行家たち
から、正力松太郎に対して、1000万ドル（30億円）
もの巨額の資金援助が行われていたことが、明るみにな
った事件のことです。

この海外からの巨額の資金によって、正力が日本にお
ける通信網を建設するその代わりに、通信技術を含めて、
すべての一切が、実は海外主導で行われていきました。
つまり日本の電波法、放送法、電波監理委員会設置法
といった「電波三法」は、正力松太郎というCIAのエ
ージェントを操り人形として、アメリカ主導で施工され
たわけです。もちろんこの黒幕は国際銀行家です。

これが何を意味するのでしょうか？この結果、どうな
ったかと言えば、日本のテレビやラジオは、「電波利用
料」というものを国に支払っています。なぜならテレビ、
ラジオ、携帯電話などの「電波」というものは、実はそ

こいら中に飛び回っているために、個人や企業が勝手に電波を飛ばすことはできないからです。もしも勝手に電波を飛ばしたら、電波が混線してしまい、「テレビが見れない」、「ラジオが聞けない」、「携帯電話が入らない」なんてことにもなりかねません。こうした電波の混線、電波障害を無くすために、国が電波の管理をしており、そのために電波に関する法律があるわけです。

そしてそのために、テレビ局、ラジオ局、携帯電話の会社などが電波を利用するには、「利用料金」を国に支払わなければなりません。つまり違法電波による混信障害などから電波環境を守るために、国が経費を徴収するという法律、それが「電波三法」なわけです。

実は携帯電話の支払い明細書には、「電波利用料」という記載はありませんが、しかし実は携帯電話1台につき、年間で約200円ほど支払っています。ではテレビ局は、どれだけ国に電波利用料金を払っているのかと言えば、そこに一つのカラクリがあります。

たとえばテレビ局全体の収益は約3兆円もあるのに対して、しかし電波利用料は、わずか約30億円でしかなく、つまりテレビ局の電波コストは、わずかたったの「0.1%」ということになります。

国全体の電波利用料の収入は約700億円ほどもあり、実はその内訳は携帯電話会社が、約70%も支払って、国民が負担しているのです。しかしこれに対して、テレビやラジオはたったの約7%でしかありません。つまり公共放送NHK、あるいは日テレやフジテレビなどの民放といったテレビ局等のマスコミは、莫大な利益を上げているにも関わらず、しかしそのコストは異常なほどに格安なわけです。

というよりも、まるで国民が携帯電話1台につき200円も払って、テレビ局の電波利用料金を肩代わりしているようにも思えなくもありません。

それはまるで「親方日の丸」ではありませんが、テレビ局というのは民間の普通の会社であるにも関わらず、官庁や公営企業のように、経営に破綻をきたしても倒産する心配がない、ということなんです。逆から考えると、放送法が足かせとなることで、衛星放送やネットならばいざしらず、テレビ局を新規に開設することは、非常に困難になることを意味しています。なぜなら既存のテレビ局は莫大な放送利権で守られているからです。

これではテレビは、放送に対する厳しさに欠け、放漫経営になりやすくなります。

というよりも、日本のマスコミが、「上辺の真実」だけを報道して、「本当に大切な真実」は隠し続けて、国民を欺き続ける売国奴の道具に成り下がっても、それでも経営的には何の問題もなくあります。それが現在の電波三法に守られた既得権益のテレビ局なわけです。

だから朝や昼の情報番組は、日本国民にとって、本当に大切な情報は何も報じていないのに、そうした帯番組でタレントが司会者になれると、月収で二千万円ももらえてしまうのです。だからお笑いタレントは、爽やかさを演出して、帯番組の司会になりたがるわけです。

ですからNHKをはじめとする日本のテレビを変えなければなりませんし、そしてそのためには、ネットの力を使う必要もあります。しかしそののみならず、一人一人の目覚めた日本人が、実際に勇気をもって行動を起こしていかなければならないでしょう。「赤信号、みんなで渡れば怖くない」、そう述べたのは、お笑い芸人で映画監督でもあるビートたけしさんですが、私は「陰謀論、みんなで語れば怖くない」と述べておきたいと思えます。

なぜなら冒頭でも述べましたように、日本は、たった5次の隔たりから成り立っている小さな世界であり、私

たちが友人を目覚めさせ、覚醒させていくことができば、ケインズが述べた「黄金の時代」は、本当はもうすぐそこからです。一人一人が「自分くらいは」と水を持っていくのではなく、「たとえ自分一人でも」と、ワインを持っていく気概が、私たちには必要なのです。

内政干渉と単年度予算

もちろん日本を隠れ植民地に行っているのは、アメリカをも隠れ植民地に置いてきた、「軍隊より危険な国際銀行家たち」ですが、もしかしたら、まだこの小冊子をここまで読んでも、「日本が隠れ金融植民地だなんて信じられない」と、そう考えている人もいるかもしれません。しかし日本が植民地である証拠は、実は他にもたくさんあります。その一つが「年次改革要望書」です。

戦後、日本の富は吸い上げられてきました。しかし「戦後の日本が金融植民地である」と言っても、国防やエネルギー政策といった「外交面」で、自由を奪われてきただけであり、「内政面」については、それほど干渉されてはきませんでした。しかし1985年の「プラザ合意」、それからさらに90年代に入ると、かなり様子

が変わってきて、国際銀行家たちは、アメリカを使って、日本に対して堂々と内政干渉を行ない始めたのです。

1980年代初頭、世界中で「メイド・イン・ジャパン」の商品が売れまくって、貿易黒字のために、日本にはたくさんドルがありました。しかし「プラザ合意」によって、日本が大量に保有しているそのドルの価値が一気に強制的に下げられました。外交圧力・力技によって「円高ドル安」に誘導されることで、わずか数年で、1ドル240円から1ドル120円まで下がりました。たとえば100万ドルの資産を持っていた人は、2億4000万円を持つていたわけですが、その半分の1億2000万円を失ったわけです。単純に言って85年の「プラザ合意」は、日本人が汗水流して働いた利益・貿易黒字を、半分以下の価値に下げさせられたわけです。これを「日本の第二の敗戦」とする見方もあります。

また90年代に入ると、国際銀行家はアメリカを使って、さらなる内政干渉を行い始めました。それが先ほども述べた「年次改革要望書」です。つまり国際銀行家たちは、「日本をこのように変える！」と、堂々と次々に命令を下してきたわけです。その一つが「派遣法の改悪」です。今、日本で派遣社員が増えているのは、国際銀行

家から、アメリカを通しての内政干渉があったからであり、これは都市伝説でも何でもなく歴史的事実です。

独裁者という生き物は、独占欲・支配欲が強いゆえに、大衆には無知なまま眠っていて欲しいのです。だから彼らは、「報道の自由」を奪うだけではあきたりず、わざわざ日本の派遣法を改悪したわけです。日本人を貧しくさせて、生活に追われるようにして、そしてテレビを信じ込ませることで、「無知な大衆」で眠らせ続けさせるためです。そしてもしも真実、政治の裏、陰謀を語る者が現れたら、その者が嘲笑されるようにするわけです。

その他にも、日本国民の郵便貯金を狙った「郵政民営化」も、彼ら国際銀行家たちからの命令でした。郵政が民営化されたことで、郵便局のサービスが向上した面も多少はあるでしょうが、しかし日本国民が貯蓄していた360兆円にもなる郵便貯金が、外資系保険会社と日本郵政が提携したことによって、こうしている今も海外に垂れ流されています。ちなみに郵政民営化に絡んで、当時の松岡忠洋金融担当大臣が、謎の自殺をしております。

あるいは「年次改革要望書」によって、「持株会社」が解禁になりました。「持株会社」とは、他の株式会社を支配することだけが目的で、会社の株式を保有する会

社のことです。「ホールディングカンパニー」(Holdings
＝保持・保有)とも言いますが、国際銀行家によるこの
内政干渉、そして会社法の改悪によって、日本に「○○
ホールディング」という会社が増え、日本の会社は世界
で最も買収し易い仕組みになり、次々と日本の大企業が
外資に買い漁られていきました。

日本の会社が、次々に外資に買い漁られて、そして株
の配当金ばかりが上がっているために、たとえ日本政府
が量的緩和を行ない、日銀に円を発行してもらって、株
価を上げて、結局は外資・国際銀行家ばかりを儲けさ
せているわけです。

しかも国際銀行家から、GHQを通して押し付けられ
た憲法の86条には、次のように記されています。

第八十六条 内閣は、毎会計年度の予算を作成し、国会
に提出して、その審議を受け議決を経なければならない

どういうことか、簡単に言ったら「集めた税金は必ず
一年間で使い切る、あまつても使い切らないといけない」
ということなのです。そのために日本では、年度末の3月に
なると、無駄な道路工事が日本各地で行われ始めるわけ
です。

しかも日本は重税国家です。働けば個人としては所得
税、会社としては法人税を払いますが、まずこれは二重
取りです。そしてコンビニに行つてパンとジュースを買
えば消費税、お酒を飲めば酒税、タバコを吸えば、国へ
のタバコ税、都道府県へのタバコ税、市町村へタバコ税
を支払います。これらの税金に対して、消費税がかかっ
ているのは大きな矛盾です。車に乗れば自動車税と自動
車重量税の二重取り、ガソリンを合わせれば石油ガス税
と揮発税も足して四重取りです。飛行機に乗って出かけ
れば航空機燃料税、ゴルフをすればゴルフ場利用税、温
泉に入れば入湯税を支払います。土地や建物を取得すれ
ば不動産取得税と、固定資産税の二重取り、家に住めば
住民税もありますから三重取りとも言えます。電気は必
ず使いますが、電源開発促進税を支払います。財産を誰
かに贈れば贈与税、死ねば相続税として、またもや二重
取りです。

国に納める税金が22種、都道府県に納める税金が1
3種、市町村に納める税金が13種、合計48種類もの
税金があるというのに、それでもなお消費税を5%から
8%へ上げて、さらに10%にまで上げます。幸福実現
党は「消費税を5%に下げる」と言っておりますが、し

かし特別会計を日本国民のために使えば、消費税そのものを無くすどころか、所得税も、住民税も無くして、「無税国家」に近づけていけるのです。いや、後に詳しく説明いたしますが、「無税国家」のさらに進んだ、配当国家も決して夢や幻ではないのです。

それでも日本政府とマスコミは、「ケータイ電話に課税して新たな税金を」と述べているのです。

「特別会計が海外に消えている」、「通貨発行権を日本政府が持たない」ということに加えて、こうした派遣法の改悪や単年度予算などの「幾つもの内政干渉」も、日本が金融植民地であるその証拠と言えるでしょう。

実際の自殺者と自殺予備軍

すでに労働人口の4割を占めている非正規雇用の人々、彼らは正規社員の3分の1の給料で、正規社員とほぼ同じだけ働かされて、それでも3ヶ月、あるいは半年に一度、契約更新を行っています。その度に彼らは、「派遣切りに遭うのではないか」と、怯えながら生きています。そんな彼らは生きるだけで精一杯です。結婚や子育て、老後など、未来に様々な不安を抱えています。

しかしだからといって、彼らは餓死はしません。たとえ死ぬほど苦しく、ウツ病になるまで働こうとも、あるいは実際に自殺してしまうほど苦しくとも、彼らは餓死するまでではありません。まさに日本人に対して、「生かさず殺さず」の最悪な状況が続いています。

日本政府の発表では、日本の年間の自殺者は2万5000人ということになっています。しかしこれは嘘です。金融侵略されている日本の政府など、もうあてにしてはならず、信じるべきではありません。

なぜなら「貧困」と「自殺」は、けっして無関係ではなく、「日本の年間の自殺者は10万人を超える」という話があるからです。それは実際は自殺していたとしても遺書が無い場合、「変死」として片付けられてしまい、年間の変死者が約15万人もいるからです。たとえばタレントの飯島愛さんがそうです。彼女は生きる希望を見失い、氣力を無くし、仕事を辞め、ウツになり、薬を飲み、そして本当に死んでしまいました。彼女が発見されたのは、死後一週間ほどが経過してからでした。彼女のようだが、年に約15万人もいるわけです。あるいは家族や親族が「身内が自殺していると結婚や就職の時に困るから」という理由で、医者にお金を渡して、「ホン

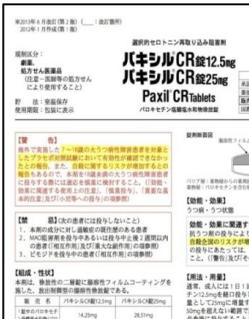
トは自殺」を「変死」にしてもらっている、なんて悲しい話もあります。

しかも「自殺予備軍」と云われているウツ病患者は、日本に約100万人もいます。2016年、初の全国規模の自殺に関する意識調査が行われました。これは4万人以上を対象にした調査で、調査の結果、過去1年以内に自殺未遂をしたことのある人が、日本全国では推計53万人にも上ることが分かりました。4人に1人が「本気で自殺したいと考えた経験がある」と答え、「5人に1人が親族や友人などの身近な人を自殺で亡くしている」と答えました。また20代・30代の若者層が、最も「自殺リスク」が高い世代である事実が明らかになりました。

このようにデストピア化している今、ウツが増えているのですが、しかも「パキシル」という抗ウツ薬には、

説明書きに「自殺の危険性がある」とはつきりと書かれてあるのです。

実は国際銀行家というのは、そうした製薬会社をも営む者たちでもあります。小保方さ



んの「STAP細胞」が発見されたら、彼らの持つ医療利権、年間約38兆円が吹っ飛ぶので、彼らは何としても妨害したいことでしょう。

デストピア化された日本

こんな話があります。とあるお笑い芸人が、バイトしなければまだ生活できない若手芸人の相談に乗り、かつて自分がバイトしていた居酒屋を紹介したそうです。

「若いころ、自分はあの居酒屋でバイトしていて、あの居酒屋には劇団員から看護師を目指している人、大学生、様々な人がいて、バイト代もそれなりに良いだけではなく、人生経験としても良かった。芸の肥しになった」、そんなことをその先輩芸人は、後輩に述べたそうです。

するとこの話を聞いて、その若手芸人はその居酒屋でアルバイトを始めました。そして数日後、その先輩芸人と若手芸人は再会しました。「バイトの調子はどうだ?」、先輩芸人がそう訊ねると、若手芸人はこう答えました。「きつくて三日でやめました」と。

先輩芸人が事情を詳しく聞いてみると、「かつては3人でやっていた業務を、ホールから、厨房から、食器洗

いまで、なんと1人でやらなければいけなくなっていた」、というのです。これはその居酒屋だけに限ったことではなく、日本中で言えることです。安い飲食店やレストランが増えていますが、そうしたお店に限って、少ない人数で回しており、一人当たりの仕事量が増えており、以前と比べてもの凄くハードになっているのです。だから日本では今、ニートや大人の引きこもりが増えていくのです。時代が変わったのです。悪くなったのです。すなわち国際銀行家たちによって、デストピア化させられたのです。

私がジャーナリストのフルフォード・ベンジャミンと、『幸福の科学』の東京正心館という施設で対談させていただいた時に、これは彼から教えてもらったことですが、国際銀行家たちは、「何が何でも大衆を貧しくさせたい」と考えているそうです。また彼ら国際銀行家たちは、「自由だと考えている奴隷ほど、いい奴隷はいない」とも考えているそうです。

そんな彼らの陰謀によって、日本はデストピア化させられて、異常事態になっていることに一刻も早く気が付かなければなりません。ほんの数十年前、日本人の悩みは「仕事を取るか、家庭を取るか」ということでした。

「仕事と家庭の2つをどうやって両立させていくか」、それが『メイド・イン・ジャパン』というブランド力を持つ日本人の悩みだったのです。働けば働くほどに年収が上がるために、「仕事よりも、もっと家庭をかえりみて欲しい」、それが専業主婦たちの悩みでした。

ですからたとえ一流大学を出ていなくても就職先はたくさんあり、内定も何社からももらえる時代でした。そのためにテレビドラマや映画でも、普通の独身のサラリーマンやOLたちが、ゆとりある豊かな暮らしを満喫しながら恋に葛藤する、そうしたストーリーのものが数多くありました。『男女7人夏物語』とか、『私をスキーに連れていって』などのドラマや映画がそうです。

しかし今は違います。今の日本人は生きていくだけで精一杯です。内政干渉によって派遣社員が増えているために、普通のサラリーマンやOLが恋愛する、というストーリーでは、視聴者が違和感を感じて視聴率は取れないことでしょう。専業主婦はほとんどいなくなってしまうのに、しかし世帯収入はほとんど変わっていないのです。それはつまり「共働き」が増えて、「一人当たりの収入」は減っている、ということを意味しております。日本は豊かな先進国はずなのに、いつの間にか多く

の人々の頭の中で、お金が人生の悩みの大半になってしまっているのです。その証拠に、北海道大学（国立）の学生が、「イスラム過激集団」に参加しようとして騒ぎになったことがあります。彼は「日本にいても、どうせ数年後には自殺しているだろうから」と述べていました。国立大学を出たって就職先がないのです。

「年間約10万人の日本人が実際は自殺している可能性がある」、「4人に1人が自殺を考えたことがある」、「大人の引きこもりが増えている」、これらの日本のデストピア化は、まさに狂った異常事態なのですが、しかし極めつけは、そんな日本人がすでに監視状態にあることです。

それはアメリカからロシアに亡命した、エドワード・スノーデンの証言のおかげで明らかになりました。スノーデンはアメリカ政府において、NSA（国家安全保障局）というところで働いていて、世界中の人々を監視する仕事をしていました。彼は日本の横田基地でも働いていて、アメリカ人のみならず、日本人もNSAの監視状態にあることを、『暴露』という書籍を、世界同時発刊することで明らかにしたのです。それはアメリカに対する愛国心からの暴露でした。彼の暴露によると、カメラ

付きのパソコンや携帯電話は、そのまま監視カメラにも、盗聴器にも早変わりします。

この『暴露』は、日本ではほとんど報道されませんでした、映画にもなっており、まさに驚愕の内容でした。

私たちは、まるで家畜のように監視されていたのです。日本はかなりデストピア化しております。

奴隷の鎖自慢より悲惨な現実

さて、「まさか、まさか」の連続とも言える、驚愕の話が続いておりますが、ここで『奴隷の鎖自慢 (The chain is slaves' boast)』という話を紹介したいと思います。

奴隷は、奴隷の境遇に慣れ過ぎると、驚いた事に自分の足を繋いでいる鎖の自慢をお互いに始める。どっちの鎖が光って重そうで高価か、などと。

そして鎖に繋がれていない自由人を嘲笑さえる。だが奴隷たちを繋いでいるのは実は同じだった1本



の鎖に過ぎない。そして奴隷はどこまでも奴隷に過ぎないのだ。

過去の奴隷は、自由人が力によつて征服され、やむなく奴隷に身を落とした。彼らは、一部の甘やかされた特権者を除けば、奴隷になつても決してその精神の自由までを譲り渡すことはなかった。その血族の誇り、父祖たちが築いた文明の偉大さを忘れず、隙あらば逃亡し、あるいは反乱を起こして、労働で鍛え抜かれた肉体によつて、肥え太つた主人を血祭りにあげた。

しかし現代の奴隷は、自ら進んで奴隷の衣服を着、首に屈辱のヒモを巻き付ける。そして、何より驚くべきことに、現代の奴隷は、自らが奴隷であることに気付いてすらいない。

いや、それどころか彼らは、奴隷であることの中に、自らの唯一の誇りを見出しさえしている。

リロイ・ジョーンズ(Leroi Jones)
1968年、NYハーレムにて

この『奴隷の鎖自慢』という話が、悲しいほどにあてはまつてしまうのが、現代の私たち日本人です

しかし本当はもっと悲惨な状況なのです。なぜなら深

く語ると多くのページを取られ、わずかだけ語ると、あまりにも、「信じがたい話」で、理解不能であるために、この短い小冊子では語れませんが、本当はもっとたくさん日本人が、殺されてきたからです。東京大空襲、広島や長崎の原爆投下以外にも、実は日本人への大虐殺が行われてきたのです。

もっと奥深い事実を知りたい方は、どうか私が『Youtube』に上げている動画をご覧になって下さい。

悪魔崇拝者は地球外生命体と関与

では、なぜ国際銀行家たちは、日本人やアメリカ人をはじめとする世界の人々に対して、これほどまでに酷い扱いをするのでしょうか？彼らの目的や計画は何なののでしょうか？

それは彼らの宗教心に問題があります。彼らは「ルシファー」という名の悪魔を「神」と考える悪魔崇拝者たちなのです。『旧約聖書』をひも解くと、預言者エリヤという人物が、「バアル信仰」といつてベルゼブブという悪魔を信仰する者たちと戦う話が出ておりますが、これとまったく同じようなことが、実は現代でも行われて

いたわけです。ロスチャイルド・国際銀行家たちは悪魔崇拝者です。

つまり、『旧約聖書』に記される「エデンの園」、そこで蛇の姿に化けた悪魔は、エヴァをそそのかすことによつて、アダムとエヴァの二人を神の怒りに触れさせて、追放させることに成功するわけですが、これはまさに「悪魔の陰謀」でした。卑怯で狡猾な悪魔というのは、陰謀や詐欺を得意とするわけであり、そんな悪魔を崇拝している国際銀行家たちも、やはり同じく様々な陰謀と詐欺を行っているわけです。

ですからこれはまさに、魔との戦いなのです。写真にもありますように、彼らは今現在も、アメリカのサンフランシスコの人気のない広大な森の中で、一年に一度、「ボヘミアン・グローブ」という悪魔的なキャンペーンを行っています。1967年の撮影された写真には「ボヘミアン・グローブ」に出席しているロナルド・レーガンやリチャード・ニクソンが写っております。1996年には、ブッシュ父子が壇上に上がり、パパブッシュが、「いつか息子は偉大な



す。

アレックス・ジョーンズというジャーナリストが、命がけでセキュリティの目をかいくぐって、このバビロニア時代の悪魔的な儀式の一部を映像におさめて、そしてネットにアップしてくれたのです。

その儀式とは、本当に行っているのか、それとも模擬なのか、それは定かではありませんが、まるで子供を悪魔に捧げるような生贄の儀式でした。

また、わたくし与国秀行は、『幸福の科学』の施設である「ユートピア活動推進館」とか、あるいは「東京正心館」というところで、元『フォーブス』の記者で、現在はフリーのジャーナリストのベンジヤミン・フルフォードという方と対談



イベントを行なってきました。東京正心館には約160人ほどの人が来られ、その半分が、『幸福の科学』の会員ではない一般の方々でした。

私が対談を行なったベンジャミンは、世界中を飛び回って活躍するジャーナリストであり、国際銀行家勢力の人たちにも実際に、直接、取材されてきた方でもありません。

そして私は、彼の書籍等で、彼がなんと答えるのか、事前に分かかっておりながらも、あえて次のように質問しました。「ロスチャイルドをはじめとする国際銀行家たちは、果たしてどんな宗教を信仰しているのですか？」と。すると彼は「彼らはルシファーを神と考えている」と、『幸福の科学』の宗教施設の中で答えたのです。

この発言は、まぎれもなく問題発言であり、何よりのポイントは、宗教法人『幸福の科学』の施設の中で、彼が「国際銀行家たちは悪魔崇拜をしている」と語ったことです。

そしてさらにベンジャミンは、こうも言葉が続けました。「彼ら（国際銀行家）が言うには、今から2万5千年前に、悪魔崇拜者たちは、地球外知的生命体と契約を交わし、地球外知的生命体から指示を受けてきた。しか

しマヤ暦が終わると云われていた2012年末に、彼らは自分たちの計画を完成させる予定であったが、それに失敗して、宇宙からの指示も来なくなり、内部分裂して今に至っている」と。ベンジャミンはそう言いました。そして彼はこうも言葉を続けます。「誤解して欲しくないのは、この話は、あくまでも彼らが言っていることで、ジャーナリストという仕事は、取材して得た情報を世の中に伝えることだから」と。

このように、自分たち以外の人間を蔑んでいる者たち、それが悪魔を崇拜する国際銀行家です。それはつまり、私たちは彼らから、「差別」を受けているということですから。そして彼らは通貨発行権を持って、金融侵略することによって、私たちを金融奴隷状態にしています。

つまり現代の私たちにも、奴隷解放が必要であり、公民権運動が必要だということなのです。

宇宙情報も封鎖された日本

「地球外知的生命体」という単語まで出てきて、驚いている方もいるかもしれませんが。しかしこんな話があります。それは、とあるテレビ番組で、芸人の「雨上がり

決死隊」の宮迫さんが明らかにされたエピソードです。

彼が後輩芸人とバーで飲んでいると、彼らの隣にも先輩と後輩といった感じの男性二人組が飲んでいました。そしてその男性二人と、何気なく会話が始まったそうです。そして相手の男性が宮迫さんに、「普段は番組を見れないんですけど、DVDを見させてください」と答えたので、宮迫さんが不思議に思い、「なんで普段は見れないんですか？」とたずねました。するとその相手の男性は、「パイロットをやっていますよ、テレビはあまり見れないんです」と答えたそうです。

そこで宮迫さんは、もしもいつかパイロットをやっている人に会ったら、「絶対に聞いてみたいこと」があったので、「UFOって見たことありますか？」と問いかけました。するとその男性は、しばらく間をおいてから、飲んでいたグラスをテーブルに「ドンツ」と置いて、「そんなのあるに決まっているじゃないですか！」と、勢いよく答えたというのです。するとその男性の隣にいた後輩らしき人物が、「ダメですって！」と急に間に割って入って止めて、もめ始めたそうです。宮迫さんが「どうしたんだろう？」と不思議に思っていると、そのパイロットの男性は、「いいんだ。どうせオレは辞めるんだから。」

辞めるから関係ないんだよ。」と後輩らしき人に語り、さらに宮迫さんに話し続けたそうです。

実はパイロットには定期的に健康検診があつて、その検診で必ず何か見なかったか聞かれるのだそうです。しかしもしもそこで、「UFOを見た」と答えると、「そんなものは存在しない」という理由からか、「精神に異常をきたしている」と判断されて、パイロットをクビにさせられ、飛行機から降ろされ、地上勤務に降格される、というのです。

その男性は宮迫さんにこうも言ったそうです。「UFOなんか全員見えますよ。もう数なんか数えられないですよ」と。

日本は「報道の自由」を奪われて、日本国民は情報封鎖されており、そのために大半の日本人が「日本は金融植民地である」という大切な情報を知らされておられません。しかし実はUFOに関する情報についても、完全に情報封鎖されてきたのです。なぜなら日本政府の公式見解では、『日本航空』、『全日空』といった民間航空会社をはじめ自衛隊においても、「UFOの目撃情報」は一つも無いことになっていますが、実はそれらの「UFO目撃情報」は、一か所に集められて、そしてアメリカに

持ち去られていたからです。

UFO研究家の高野成鮮氏が、明らかにされていることですが、日本に一つも存在しないはずの「UFO目撃情報」は、すべてアメリカの機密解除された公式文書におさめられています。陰謀論を語る人が奇異の目で見られ、「おかしな人」とレッテルを貼られるがごとく、UFOの存在を語る人が奇異な目で見られて、「おかしな人」というレッテルを貼られているのは、実は同じ理由からだったのです。それは国際銀行家による陰謀であり、彼らが悪質な地球外知的生命体・宇宙人から指示を受けて、情報封鎖を行ってきたからです。

スター・ウォーズは始まっている

カナダの元国防相ポール・ヘリヤーという方は2005年、「UFOは飛行機が上空を飛んでいるのと同じくらい現実的なものである」と発表して、国際的に大きな話題となりました。彼は言います。「少なくとも地球には何千年も前から4種類の宇宙人が来ていることが分かっています。その他にも5種類の宇宙人の名前が分かっており、それはゼータレティクル、プレアデス、オリ

オン、アンドロメダ、アルタイルです。彼らの高度に進んだテクノロジーを使えば、環境破壊などの地球の危機的状况を救うことができますが、しかし世界にはこうした情報開示を阻む者たちがいるのです。彼らは既得権を持つて『影の政府』としてアメリカに存在しています。彼らは宗教の違いから生じる様々な不和を引き起こして、一方的に世界を支配しようとしているのです」と。

カナダのポール・ヘリヤー元国防大臣が語る「アメリカに存在する『影の政府』こそ、国際銀行家のことです。ちなみにロシアのプーチン大統領も「宇宙に関する情報はすべて公表すべきであり、地球人の一部の人々が独占するべきではない」と発言しております。

我が師大川隆法総裁によれば、この広い大宇宙には、数多くの宇宙人たちが生きており、その宇宙人たちの中には、心美しい宇宙人もいる、彼らは宇宙協定によって、地球人たちが自分たちで魂を進化させて、宇宙時代の扉



を拓く時を待っており、影ながらそれを協力しようとかえしている、その一方で、宇宙人たちの中には、心邪な宇宙人もおり、彼らは宇宙協定すれすれで地球の征服を企むばかりか、すでに地球に入り込んでいる、と言います。そんな悪質宇宙人は、我々地球人のことを「家畜」と考えています。

実際に南米のペルーなどに行きますと、空からでなければ見えない地上絵があります。つまり我が師・大川隆法総裁によれば、上空から絵を見ていた者たちがいたわけであり、その絵が描かれた数千年前の人々は、空を飛ぶことをもって、宇宙人のことを「神」と考えておりました。つまり悪質宇宙人は、この時も、侵略のために地球に入り込んでいたわけです。しかし仏陀の過去世であるリエント・アール・クラウドという方が、人々に心の教えを説くことによって、この時、地球は宇宙侵略の危機を免れたそうです。

それでは『太陽の法』という『幸福の科学』の基本的な教えが書かれた書籍より、一部抜粋させて頂きます。

宇宙人を神だと思っていた彼らは、宇宙人との交信を文明の核にすえ、アンデス山中に、宇宙人が着陸できるようにと、離着陸基地までつくって、一時期、そのこと

に熱中していたようです。

しかし、いまから七千年ほど前、リエント・アール・クラウドという王様が、このアンデス山中の古代インカの国に生まれました。そして、宇宙人は神ではないと明言します。クラウドは、人々に、心の世界の神秘を説き、神の存在は外部にあるのではなく、心の奥底にあるのだと説きました。人間の人生の目的は、その心の世界の神秘をさぐることにあり、心を高めてゆくことによって、いかに神近き自分をつくってゆくかが大切なのだと説きました。

このように、七千年前の南米においては、リエント・アール・クラウドという方が、心の教えを説かれることによって、人々は悪質宇宙人を「神」と崇めることをやめて、その地球侵略を防ぐことができました。

しかしして先の大戦以降、日本は国際銀行家の金融植民地になり下がりました。そして私たち日本人は、金融奴隷状態に置かれています。しかも私たちが奴隷状態に置く者たちは、実は悪魔崇拝者であり、さらに彼らは、悪質な地球外知的生命体から指示を受けているというわけです。

つまりかつて南米において、仏陀の過去世リレント・アール・クラウドが地上に降りられた頃と、まったく同じことが今も起きているわけです。『幸福の科学』の映画「ノストラダムス戦慄の啓示」の中で、地球人に友好的なマゼラン星人たちは、アメリカに悪質宇宙人が入り込んでいることについて、「結局、地球人に隙が多すぎると述べています。つまり私たちの心の中にある隙につけこんで、悪質宇宙人は入り込んでくるわけです。

そして悪質宇宙人から指示を受けている国際銀行家たちも、実は私たちのことを「家畜」と考えているがゆえに、彼らもとても残酷なことが行なえてしまうわけです。これで、最初に紹介したトルーマン大統領の「猿（日本人）を『虚実の自由』という名の檻の中で飼う」という言葉の意味が、より深くご理解いただけるはずです。

1997年、「アール・ベル」というラジオパーソナリティの番組に、「エリア51の元職員」と名乗る男性から電話が入り、恐怖で震える様子で泣きながら次のように語りました。「人類が宇宙人と考えているものは、実は我々と違う次元に生きる生命体なんだ。米軍、特にエリア51に深く関与している。当然、政府も知っています……」。

この男性が述べるように、はるか彼方の宇宙から、地球にやって来るためには、空間や時間を飛び越えねばならず、まさに彼らは、科学技術で異次元世界に入ることも可能です。

ですからまさにこれは、異次元空間をも含んだ戦いなのです。元悪魔崇拝者から、クリスチャンになった方にジョン・ラミレスという方がいますが、彼はテレビのインタビューで、「霊界では何が行われているのですか？」と問われて、「WAR^{戦争}」と即答しています。

それが現実です。ですからこの日本解放への戦いは、あの世といった霊界と、そして宇宙をも巻き込んだ、壮大な戦いなのです。そういう意味では、「霊界戦争」とも、「宇宙戦争」とも言える激しい戦いが、すでに手の平の中で始まっているわけです。

悪魔教徒がユダヤ人を自称する理由

悪魔を崇拝する国際銀行家たちは、あえてユダヤ人を自称することによって、自分たちに批判が来たら、「民族差別」とすり替えてきました。そして今の銀行制度について批判する者が現れたら、その者を差別主義者とし

て社会から抹殺し、そうやって自分たちの姿を消しながら、時にはユダヤ人を迫害し、時にはユダヤ人を利用してきました。そしてこのことについては、「ハルマゲドン（世界最終戦争）」について記されている『聖書』の「ヨハネの黙示録」にも記されております。

「私は、貴方の苦しみと貧しさとを知っている。しかし貴方は実際は富んでいる。またユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえってサタンの会衆（教会）である人たちから、ののしられている事も知っている。

（ヨハネの黙示録2:9）

「見よ。サタンの会衆に属する者、すなわち、ユダヤ人だと自称しながら実はそうでなくて、嘘を言っている者たちに私はこうする。見よ。彼らを貴方の足もとに来てひれ伏させ、私が貴方を愛していることを知らせる。

（ヨハネの黙示録3:9）

サタンの教会に属する偽ユダヤ教徒、それがユダヤ人を自称する国際銀行家たちです。ユダヤ人は実は世界でも豊かな民であり、そして彼らは悪魔教徒の国際銀行家を利用され、そして迫害を受けてきたのです。

しかしユダヤ人にも、まったく問題が無いわけではあ

りません。なぜなら彼らユダヤ教徒の中には、ユダヤ教徒の祖であるモーセの教えとは、まったく異なる『タルムード』という思想を持つ者たちがいるからです。そしてその思想は、ユダヤ選民思想であると同時に、実は非ユダヤ人のことを「家畜」と考えている思想だからです。実はユダヤ教、キリスト教、イスラム教は、もとをたどると「アブラハム」という人物に突き当たる兄弟宗教です。しかし不思議なことに、彼らの神の呼び名には、「ヤハウエ」、「エホバ」、「アラー」と異なる名が存在しています。そこで我が師・大川隆法総裁は、『「ヤハウエ」「エホバ」「アツラー」の正体を突き止める』として、霊査されたことがあります。その際、ヤハウエだけは、最後まで正体を明かさず、謎が残りました。また我が師・大川隆法総裁が、かつてユダヤ教であるモーセの霊言を降ろされた際、モーセは「自分は神と悪魔の声を聞き間違えて、神に対して牛を生贄にするようにと聞いてしまった。しかし神は牛などのぞまない」といったことも述べられておられます。

そしてアメリカは、「キヤトルミューテイレーション」という奇怪な事件も起きています。「キヤトルミューテイレーション」とは、牛や馬などの家畜の死体の一部が

切り取られ、しかも血液がすっかりなくなるといふ異常な惨殺事件のことです。家畜の切り口は、まるでメスのような鋭利な刃物で切られており、UFOに牛が連れ去られる目撃映像や情報もあることから、「宇宙人の仕業だ」などと騒がれました。

地上絵がある南米にも、実は生贄の祭壇が残っており、ここにも謎があります。

ユダヤにも問題はあ

それではここで、非ユダヤ人を家畜と考える『タルムード』を一部、抜粋してみたいと思います。

ユダヤ王は真の世界の法王、世界にまたがる教会の総大司教となる。

世界はただイスラエル人の為のみ創造されたるなり。

神は言い給う、「我は預言者を畜獣に過ぎない者たちの為に遣わしたのではなく、人間なるイスラエル人の為に遣わしたるなり」と。

すべての民を喰い尽くし、すべての民より掠奪りやくだつすることは、彼らすべてが我らの権力下に置かれる時に始ま

るべし。

神はユダヤ人にすべての方法を用いて、詐欺、高利貸、窃盗によってキリスト教徒の財産を奪取することを命ずる。

我々はタルムードが、モーゼの律法書に対して絶対的優越性を有することを認むるものなり。

タルムードの決定は、生ける神の言葉である。

汝らは人類であるが、世界の他の国民は人類にあらずして獣類である。

「汝殺すなかれ」との掟は、「イスラエル人を殺すなかれ」との意なり。ゴイ（非ユダヤ人）、ノアの子等、異教徒はイスラエル人にあらず。

ゴイが、ゴイもしくはユダヤ人を殺した場合は責めを負わねばならぬが、ユダヤ人がゴイを殺すも責めは負わず。

ゴイに金を貸す時は必ず高利を以てすべし。

ゴイに向つて誓いを立てた者は、盗賊であれ、税吏であれ、責任を取らなくてよい。

ゴイが我らの書物には、「何かゴイを害することが書いてあるのではないか？」と聞いてきたら、偽りの誓いを立てなければならぬ。そして「そのようなことは誓

って書いてない」と言わなければならない。

タルムードを学ぶゴイ、それを助けるユダヤ人はことごとく生かしておいてはならない。

流神者（非ユダヤ人）の血を流す者は、神に生贄を捧ぐるに等しきなり。

信じがたいかもしれませんが、これはモーセの教えではないユダヤ教の『タルムード』の教えです。そしてこの『タルムード』と対決したのが、『ユダヤ人と彼らの嘘』という小冊子を書いたドイツの英雄マルチン・ルターという方です。ルターの人生最後の小冊子『ユダヤ人と彼らの嘘』で、彼は次のように警告しています。

私はもうこれ以上、ユダヤ人のことも、ユダヤ人に反対することも書かないと決心していました。しかしこの哀れで邪悪な連中が、いつまでも我々キリスト教徒に打ち勝とうとすることを止めないので、ユダヤ人の企てによってもたらされる被害に備えて、私もユダヤ人に抗議する人々の隊列に加わることを決意しました。

ゆえに私はこの小冊子の出版を認め、そしてキリスト教徒たちにユダヤ人に対する防備を固めるよう警告いたします。

（中略）

少々、私は言いすぎではないか」と思う人がいるかも知れませんが。

しかし言いすぎどころか、私はあまりにもわずかしか言っていないのです。というのは、彼らがいかに我々ゴイム（家畜たち）を、彼らの著作のなかで蔑み呪い、そして自分たちの学校や礼拝の場で、我々に災いが振りかかることをどれほど望んでいるか、私はよく理解しているからです。彼らは、高利貸しによって我々の金をかすめ盗り、可能な場所ではどこでも、我々をあらゆる種類の策略にかけるのです。

「銀行」とは、今でこそ聞こえが良いですが、しかし元々は「金貸し」のことです。そして中世の金貸しユダヤ人とキリスト教徒の問題を描いたのが、シェイクスピアの『ヴェニスの商人』です。しかし実はユダヤ教も、キリスト教も、イスラム教も、ともに人から利子を取ってお金を貸すことを禁じています。なぜなら『旧約聖書』では、「借りる者は貸す人の奴隷となる（富める者は貸しき者を治める）」、とあるように、実は金貸し・銀行業務というのは、紙のカラクリを駆使することで、無から

お金を生み出す力を得るために、実は他の人を奴隷にすることができずからです。そして通貨発行権を持ち、銀行にお金を貸す「中央銀行」というのは、銀行を通して人々を奴隷にすることもできてしまいます。ですからユダヤ教も、キリスト教も、イスラム教も、利子を取ってお金を貸す銀行業務を禁じてはいるのです。

しかし『ヴェニス商人』にもありますように、一部のユダヤ教徒たちは、積極的に金貸し・銀行業務に携わってきました。なぜなら『タルムード』では、非ユダヤ人を家畜とみなして、「ゴイに金を貸す時は必ず高利を以てすべし」としてしているからです。

そしてそのユダヤ人の背後には、ユダヤ人を自称する悪魔教徒たちがおり、しかもさらにその背後には、地球外知的生命体、邪神がいたわけです。

このように、ユダヤにもまったく問題がないわけではないのです。ユダヤ教は、ある意味において、信仰・思想侵略を許してしまつたわけです。

そのために国際銀行家の初代マイヤー・アムシエル・ロスチャイルドは、自らを「ユダヤ人・ユダヤ教徒」と名乗っておりました。マイヤーは、小成功を人に見せびらかしたりすることなく、あくまでも秘密主義に徹する

ことこそが、真なる大成功・目的達成には必要不可欠だと考えていました。

そして彼は、息子たちにもそうあるべきだと説いていたそうです。ですから彼の息子たちも、たとえ超大富豪に成ろうとも、多くの場合、衣類は擦り切れるまで着古したそうです。

そしてマイヤー・アムシエル・ロスチャイルドは、臨終のベッドで、『タルムード』を読み、息子たちに対して、常に結束して事に当たり、決して独断的な行動を行わずに目的を達成させるよう、厳かな誓いを強いた、と言ひ伝えられています。

しかし『ヨハネの黙示録』にもあるように、彼ら国際銀行家は、本物のユダヤ教徒ではなく、『タルムード』を上手く使いこなして、ユダヤ人の素振りを見せている悪魔教徒です。

バビロニア式借金奴隷制度

悪魔崇拜者たちが、「ボヘミアン・グローブ」という不気味なキャンプを行って、その中でバビロニア時代の悪魔的な儀式を行っているように、そして『タルムード』

が、『バビロニア・タルムード』とも呼ばれているように、このモーセの教えではないユダヤの教えが成立したのは、ユダヤ人がバビロニア地方のバビロンという土地に、連れ去られた時からです。いわゆる「バビロン捕囚」です。

この「バビロン」という土地は、預言者エリヤが対決した悪魔教のバアル信仰とも、とても馴染みが深く、この土地にユダヤ人たちが連れ去られてから、ユダヤ教の教えの中に、『タルムード』が誕生したのです。

こう考えてみると、『タルムード』の謎が少し解けてきます。

そしてこのバビロンがあるバビロニア地方南部は、現在のイラクあたりに位置しており、この土地には今から六千年前、「シュメール文明」という文明がありました。

このシュメール文明は、「突如誕生した世界最古の高度文明」と云われ、どうしてこんな高度な文明が、紀元前4000年という太古に突如、誕生したかは、今をもって謎とされています。

そして「古代文明シュメールの粘土板を解説した」と言われている人物に、ゼカリヤ・シツチンという考古学者がおります。この考古学者ゼカリヤ・シツチンによれ



ば、「人類を、猿から遺伝子操作によって創造したのは、爬虫類型宇宙人のアンナキであり、彼らは惑星ニビルからやってきた」と主張しています。

ちなみに我が師が「宇宙の法」を説くにあたり、最初に意見を述べたのは、エンリルという霊であり、この魂はシュメール文明とも、悪質宇宙人とも関係が深く、また私たち人類に対しては、「自分が創った家畜」と考えているようです。

しかし我が師は、『信仰の法』の中で人類創造について、たしかに遺伝子組み換えもあつたけれども、別の方法も幾つかあつたことをお説き下さっております。

そして我が師は、「宇宙の法」をお説きになるにあたり、考古学者ゼカリヤ・シツチンの霊も、降霊されておられます。

生前のゼカリヤ・シツチンによれば、当時のシュメール人たちは、自分たちのことを「ルル」と呼んでおり、これは「混ぜ合わせて造られた者」という意味です。そしてシュメール人たちは、「自分たちを造つたのは『アンナキ』というトカゲ・爬虫類の姿をした神」と考えていたようで、彼らが爬虫類の神を、信仰していた形跡

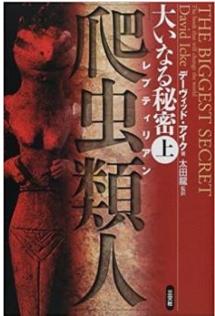


も、たしかに発見されているのです。

そして生前のゼカリア・シツチンによれば、太陽系には、太陽と月を入れて、さらに12番目の「惑星ニビル」という惑星が、冥王星よりさらに離れたところにあるそうです。そしてこの惑星ニビルは、環境汚染がかなりすすんでいるために、その環境汚染・大気汚染を改善するために、地球の金（ゴールド）を採掘しにきた、と生前のゼカリア・シツチンは主張していました。

つまり爬虫類型の宇宙人が、惑星ニビルからUFOに乗ってやってきて、彼らは地球から金を持ち出して、エアロゾル状にして、すなわちタバコの煙や霧状にして、ニビルの大気汚染を改善しようとしている、という理論を、生前のゼカリア・シツチンは打ち立てたわけです。

これと同じことを言っているのが、『爬虫類人』という書籍を書かれた世界的なジャー



ナリストのデーヴィッド・アイクという人物です。彼もゼカリア・シツチンの影響もあるでしょうが、様々なことを調べた結果、「地球人類を創ったのは、地球外知的生命体レプティリアンであり、人類は長らく爬虫類型宇宙人レプティリアンから干渉を受けており、レプティリアンたちは、人類家畜牧場を創ろうとしている」とまで述べております。

実はこのデーヴィッド・アイクの主張は、一見、荒唐無稽にも聞こえますが、実は我が師・大川隆法総裁の霊査と一致しております。

そして生前のゼカリア・シツチンは、「宇宙人は自分たちの星の環境改善のために、金（ゴールド）を取りに来た」と述べているわけですが、たしかにお金は当初、金（ゴールド）に裏打ちされて、発行されてきました。そのために一般の通説としては、中央銀行FRBには、膨大な金があることになっています。誰も見た者はいませんが。

つまり実は今なお、国際銀行家たちによって行われている金融的詐欺は、実は正確に言えば、「バビロニア式借金奴隷制度」だったわけです。というのも古代のバビロニア時代の石版には、当時の労働者たちの勤務表や収

入などが詳しく書かれており、それらから判明した事実として、古代バビロン時代の労働者たちは、たとえどんなに働いても借金が増えていた、ということが分かってきます。それはまさに今の日本国民や米国民と同様です。どんなに働いても、働いても、政府の借金は増え続けて、そしてそれに伴って税金も上がっております。

簡単に言ってしまうえば、バビロニア時代の奴隷たちも、そして現代を生きる私たちも、働く前提として、すでに膨大に膨れ上がり続ける借金制度があったわけです。

共産思想とタルムードの一致

我が師・大川隆法総裁の霊査によれば、国際銀行家によって金融侵略されたアメリカにも、中国共産党に共産革命を起こされた中国にも、ともに悪質な地球外生命体が入り込んでいることが分かっています。当会の映画『UFO学園の秘密』によれば、アメリカと中国に入っている悪質な宇宙人は、けっして仲間ではなく、どちらかと言えばライバル関係で、そしてこれらの悪質宇宙人の、さらにその背後には、邪悪なる神が存在することも分かっています。

それでは『地球を守る「宇宙連合」とは何か』から、一部、抜粋させていただきます。

質問者 そうしますと、その敵と思われる者たちは、悪質なレプタリアンと考えてよろしいのでしょうか。

総司令官 うーん。

質問者 それとも違う存在でしょうか。

総司令官 レプタリアンと呼んでもよいのかもしれないけれども……。

まあ、あなたがたはまだ知らないだろうが、宇宙にも、「われわれが正義と考えている考え方を信奉する勢力」と、「まったく違った思想でもって宇宙を統治しようとする勢力」とがあるんですよ。ですから、われらから見れば、邪悪なる神、つまり「宇宙の邪神」がいて、彼らはそれを信奉していると見ています。

質問者 邪神ですね？

総司令官 ええ。その指導の下に動いているので、ここを徹底的に正義の秤にかけて測らねばならないと思っております。

少なくとも、彼らには、「強さ」を正義と考えているところがあります。

もちろん、正義のなかには、強さも必要だと思えます。やはり、強くなければ、人を救えないし、弱い人たちが困っている人たちを助けることもできません。愛や慈悲の行為というのは、強ければこそ行えるものですね。私はそう思っていますよ。これが私の強さの定義です。つまり、私は、「多くの人たちを助けるためにこそ、強くなくてはならない」と理解し、定義しているのです。

しかし、そうではなく、いわゆる弱肉強食のものの考え方をしている者たちがいます。

宇宙のなかには、そういう考えの発信源なる邪神がいて、「強い者は、弱い者を支配してよい。食料にしよう」と、生贄にしようと、滅ぼそうと自由だ」というような考え方をしている者たちがいるのです。

悪質な宇宙人の奥に、実は「邪神」がいるのです。ですからそういった意味においては、実は国際銀行家と中国共産党は、同じ目的を持っており、思想的にも共通するものを持っているのです。

たとえば北朝鮮と中国の建国の基盤にある共産思想を生みだした、カール・マルクスという人物はユダヤ人

であり、人類最初の共産国家ソ連の最高指導者レーニンも、実は熱烈なユダヤ民族主義者でした。ユダヤ人迫害を行ったスターリンにも、根強くユダヤ人説があり、迫害を受けるのは、いつも、何も知らされていない大多数の人々なのです。「真実を知らされていない人々が被害を受ける」、これはユダヤ人もけっして例外ではないのです。ユダヤ人は被害者です。

そして共産思想というのは、国境と国家の存在を否定するのですが、これ同様に、実はユダヤのタルムード思想も、国境と国家を否定しております。そのためにタルムード主義のユダヤ人も、イスラエル以外に愛国心を持つことなく、多国間にまたがって政治家や企業家として活躍しております。

たとえばアメリカ政界に強い影響力を持つていたズビグネフ・ブレジンスキーなどがそうですが、彼はイスラエルに愛国心を持つユダヤ人で、アメリカの政治家になっていました。ちなみにネットの動画でご覧になれますが、彼は、はっきりと「今の時代は100万人を誘導するよりも、100万人を



虐殺したほうが簡単だ」とも述べていました。

そしてそれはソ連という国も、まったく同様だったのです。つまりソ連が誕生の「ロシア共産革命」とは、実のところ「ユダヤ革命」であり、ソ連の中枢は、タルムード主義のユダヤ人によって占められていたわけです。

そして共産思想の創設者がユダヤ人カール・マルクスならば、共産思想の発注者はバリニツシュ・レヴィーというユダヤ人と云われております。つまり結論だけ先に言ってしまうと、共産思想とは、タルムード主義のユダヤ人の発注によって、タルムード主義のユダヤ人の手で創設された、タルムード主義のユダヤ人のための思想だったのです。

タルムード主義のユダヤ人による、タルムード主義ユダヤ人のための、ユダヤ人のタルムード思想、それが共産思想です。

すなわち、非ユダヤ人をゴイ(家畜)と考えて、他民族には何らの財産を持たせず、ゴイム(家畜ども)には宗教も神仏も与えず、もしも自分たちに刃向うならば、ためらわずに殺しまくる思想、それがタルムード思想ならば、その一方で、平等を重視するあまり、自ら私有財産を廃止して、その結果、支配者層には独裁政治を行わ

せ、自分から宗教と神仏の存在を否定して、もしも政府に刃向えば粛清される思想、それが共産思想です。

つまりタルムード思想と共産思想は、実はまったく一つの思想を、上から観るか下から観るか、その違いでしかなかったわけです。タルムード思想と共産思想は、一つの同じ支配的な家畜思想を、「支配者側から観るか、大衆側から観るかの違いでしかない、共に選民・家畜思想であつた」という、驚くべき恐ろしいトリックが、仕掛けられていたわけです。

カンボジアのポル・ポトは教師として働き、とても人当たりがよく、穏やかで、心優しい人間だったそうです。しかし次第にこの共産思想に傾倒していきます。そして彼は政治指導者になると、まったく別人になってしまつて、政府に刃向う者、刃向う可能性のある者は、ここごとく虐殺して骸骨の山を築いたのです。なぜなら政治指導者というのは、影響力が大きいために悪魔に狙われるからです。ですから政治指導者の心に、信仰心無く心に隙ができると、悪魔に乗っ取られて、別人格になつてしまうのです。ですから悪魔教徒を喜ばせる共産思想というのは、小さいうちは、それほど恐ろしくないのですが、勢力が大きくなると本当に危険極まりないのです。

沖縄に刻み建てられた侵略の爪

そしてこの共産思想を広めたのが、ユダヤ人を自称している悪魔崇拜者の国際銀行家なわけであり、この思想を持つのが中国共産党なわけであり、この政党が日本にピリオドを打とうとしているわけです。

中国大陸は、イギリスの背後にいた国際銀行家とのアヘン戦争に敗れた後に、このユダヤ共産思想によって思想侵略、思想汚染されてしまったわけです。もともと中国の三大宗教は、仏教、道教、儒教なのですが、「宗教はアヘンである」と考える悪魔の共産思想によって、これら三つは、中国大陸において、完全に隅に追いやられてしまっておりませぬ。

そして彼ら国際銀行家たちは、先の大戦で日本を敗ると、GHQの置き土産として、あえて左翼の『日教組』と「共産主義者たち」を置いていったのです。そして彼らは、左翼の旧社会党と右翼の自民党を争わせ続けて、綱引きをさせ続けて、「本当の敵」を見えなくさせて、日本国民の目をくらませしてきましたのです。こうした、分断して、争わせて、目をくらまして、「本当の敵」を分からなくさせて統治する方法のことを、「分断統治・ディバイド・アンド・ルール」と言います。昔から行われて

きた、卑怯なやり方です。

すなわち今、世界には、国際銀行家が推し進める「人類家畜牧場化計画」があるわけですが、中国共産党も同じ目的を持つていることがわかります。なぜなら国際銀行家と中国共産党は、共に悪質宇宙人から指導を受けており、その背後にるのが「宇宙の邪神」だからです。

どうやら彼らは、私たち人間が、「右は善、左は悪」とか、「アメリカが正義で中国は悪」とか、そういった感じで、物事を二元論的に考えやすい弱点を、よく見抜いているようです。正義とは二元論的に分けられるものではなく、深い智慧でもって見抜かれるものですが、この人間の弱点について、悪質宇宙人や邪神は、よく知り尽くしているのかもしれませんが、なぜなら彼らは、その弱点をおさえながら攻めており、そんな彼らの手段は、まさに「陰からの謀」、陰謀そのものだからです。

ですからこの「宇宙戦争」は、ある意味において、思想戦でもあるのです。

ですからすでに金融植民地にされてしまった日本には今、国防の危機として、中国の脅威があるわけですが、しかし国防上の脅威である中国共産党と、すでに日本を金融支配する国際銀行家は、思想的にかなり一致するば

かりか、その究極の奥の奥では邪神として、一つに繋がっていたわけです。

まさに、私たちのすぐ目の前で、宇宙戦争は始まっております。だからこそ紙の詐欺を暴き、この戦いに勝つためにも、紙の奇跡を起こさねばなりません。

しかもすでに沖縄には、邪神および悪質宇宙人たちによる、侵略の爪が突き刺さっております。それは沖縄の海の玄関口・那覇港にある2つの龍柱です。これは沖縄県知事の翁長氏が、わざわざ中国の業者に制作を依頼して、3億2千万円もかけて作ったものです。

「龍」は古来より、中国皇帝の権力の象徴であり、そして「5本爪の龍」は、中国皇帝のみが使用できました。

一方で、朝鮮など中国周辺の属国、いわゆる冊封体制さくほうたいせいに入った周辺諸国は、「4本爪の龍」を用いてきた歴史があります。そしてかつての琉球王朝も「冊封」という属

国状態であったために、首里城の龍柱は「4本爪」です。そして今回、

わざわざ翁長県知事によって建てられた龍柱も、やはり「4本爪の龍」

なのです。砂時計が落ちるように、日本は今、領土侵略を受けています。



NWOこそ人類家畜化計画

NGO団体の『オックスフアム』は、2017年1月の報告書『99%のための経済』において、次のように記しております。

富める者と貧しい者の格差は、これまで考えられていたよりも遥かに大きく、世界で最も豊かなわずか8人が世界の貧しい半分の約36億人に匹敵する資産を所有しており、「1%の人々のために今の経済」は存在している。

だから世界は今、(残りの)「99%のための経済」を必要としており、経済を私たちの手に取り戻し、人間らしい経済を実現しなければならない。

大企業は悪ではありませんが、しかし度を超えて、この地球の根源的なものを握るのみならず、人々の幸せを全く考えない超巨大な多国籍企業ならば、まさにそれは危険そのものです。そして国際銀行家というのは、まさにそうした者たちであり、彼らが進めている計画のことを、「New World Order (新世界秩序)」と言います。この計画については、実は彼らが発行している1ドル札にも、きちんとラテン語で明記されている



のです。しかも1ドルには「我々の計画に同意せよ」とまで、ラテン語で書かれています。まさに彼ら国際銀行家が、我々のことを「家畜」と見なして、バカにし切っていることが分かります。

そんな我々のことをバカに仕切る彼らですから、彼らはジョージア州に、わざわざ石碑まで建てて、その自分たちの計画の内容も明らかにしています。その石碑を「ジョージア・ガイド・ストーン」といいます。こ

の「ジョージア・ガイド・ストーン」は、1980年にアメリカ合衆国ジョージア州に建てられたモニユメントで、石板は、英語、ヘブライ語、中国語などの8つの言語からなり、そこには自分たちの計画目的と、人類に対する恐ろしいメッセージが刻まれています。



その計画目的はまず最初に、「1、大自然と永遠に共存し、人類は5億人以下を維持する」と記されております。すなわち彼らは、「家畜」と考える私たち人類の人口を10分の1以下の5億人以下に減らして、維持していかうと考えているわけです。どうやらそのくらいの人数のほうが、彼らにとっては管理し易いのもかもしれません。国際銀行家たちは、このNWO計画をマヤ暦が終わった2012年までに、完成させようとしており、そしてそれが上手くいかず、今に至っているわけです。

このNWO計画と真正面から戦ってきたのが、アメリカや日本のマスコミでは、「独裁者」として報じられてきた、ロシアのプーチンであり、あるいはリビアのカダフィーであったり、イラクのフセインなどです。プーチンのはっきりと、「新世界秩序計画はお断り、世界を刑務所にするから」と公言しています。

ちなみに我が師・大川隆法総裁は、プーチンについて、日本神道の神の一柱であり、かつて聖武天皇として地上に生まれられたことを明らかに



されております。あるいは「高天原」という日本の神々の霊界において、火之迦具土神ほのかぐつちのかみという神道の一柱が、イラクのフセインとして地上に降りたことも、映画の中で描かれております。実はこの映画が、私が政治の裏に気がつきはじめたキツカケになりました。私は何かどうしても、アメリカの持つ『ジギルとハイド』のような、二重人格性に疑問を抱いており、そんな中、この映画の火之迦具土神・フセインが、「アメリカのハイドの顔」に気づかせてくれたのです。

そして私にとって、陰謀を大々的に語る「GOサイン」となったのは、我が師が『国際政治を見る眼』という御話の中で、「幸福の科学が発信することが、NW新世界秩序Oの基準になっていく」と述べられたことにあります。

我が師は、ニューヨークにも住まわれ、ウォール街にて、国際金融を学ばれております。ならばラテン語と奇妙な目が描かれた1ドル札に、我が師がお気づきにならないはずがありません。

国際銀行家たちは、世界を人口5億人の家畜牧場にしておいて、私たちにとってはデストピアを築くことを目的にして、NW新世界秩序O計画を進めており、それが彼らのユートピアなわけです。

しかし『幸福の科学』および『幸福実現党』は、最大多数の最大幸福、もしくは「全員幸福」といった、彼らとはまったく正反対のユートピア社会を目指しているのです。

トランプの隠された決意

たしかに、これまでFRBと国際銀行家は、アンタツチャブルな存在でした。しかし「トランプ革命」が起りました。

ドナルド・トランプは大統領選挙に勝ち、ホワイトハウスに入ると、「私こそ銀行を殺す」と述べていたアンドリュウ・ジャクソンの肖像画を飾ったのです。ここまですで小冊子を読まれてきた方ならば、これが何を意味しているか分かるはずですが、彼が何を決意し、いかなる信念を持っていくかが分かるはずは、ありません。

トランプはNW新世界秩序Oと戦うプーチンと親しくし、NW新世界秩序Oに殺されたフセインに対しては、幾度も彼を称賛するコメントを述べています。



そんなトランプは大統領になった翌年の2018年、ユダヤ人を自称するジャネット・イエレンがFRB議長を続投することを望まず、ジョローム・パウエルへとFRB議長を変えました。実はこれによって初めて、ユダヤ人を自称していない人物が、FRB議長になったとも云われております。国際銀行家たちによるその仕返しなのか、パウエルが新議長に就任した2月5日、株価が666ドルも暴落しました。「666」は、悪魔を意味する不吉な数字です。

このようにアメリカは今、「トランプ革命」の最中にあります。この革命の本当の意味は、「1%VS99%の対決」における99%の大衆側の勝利だったのです。それはトランプ大統領の就任演説を見れば、歴然です。

あまりにも長い間、ワシントンにいる一部の人たちが、政府から利益や恩恵を受けてきました。その代償を払ったのは国民です。ワシントンは繁栄しましたが、国民はその富を共有できませんでした。政治家は潤いしましたが、人々の職は失われ、工場は閉鎖されました。権力層は自分たちを守りましたが、アメリカ市民を守りませんでした。彼らの勝利は、皆さんの勝利ではありませんでした。彼らは首都ワシントンで祝福しましたが、ア

メリカ全土で苦しんでいる家族への祝福は、ほとんどありませんでした。【中略】

私は全力で皆さんのために戦います。決して失望させません。アメリカは再び勝利します。これまでにない勝利です。雇用を取り戻し、国境を回復し、富を取り戻し、そして、夢を取り戻します。アメリカを再び偉大な国にします。ありがとうございます。皆さんに神の祝福がありますように。そして、アメリカに神の祝福がありますように。ありがとうございます。アメリカに神の祝福あれ。

演説にはこうあります。「権力層は自分たちを守りましたが、アメリカ市民を守りませんでした。彼らの勝利は、皆さんの勝利ではありませんでした。」
(The establishment protected itself, but not the citizens of our country.

Their victories have not been your victories; their triumphs have not been your triumphs.)

「エスタブリッシュメント」の「establishment (権力層)」



そ、「1%の超巨大な大企業」であり、彼らのことを「グローバリスト」とも呼び、その中枢が国際銀行家です。もちろん革命はまだ完成してはなく、今も国際銀行家との戦いは続いております。そして1%のエスタブリッシュメント（権力者階級）は、お金によって世界中のマスコミに強い影響力を持つているために、今も「トランプ叩き」と「反トランプ洗脳」が続いているわけです。

「国際銀行家」と「通貨発行権」を見ないと、この革命の意味は見えません。そして日本も、この革命に続く必要があります。なぜならこの戦いは、宇宙を巻き込んだ、私たちの未来もかかった戦いだからです。

不正選挙に勝ったアメリカ国民

では、「トランプの勝利」、「99%の勝利」とは、果たしてなんであったのでしょうか？

それはアメリカ国民の目覚めであると共に、実は不正選挙に対する勝利でもあったのです。

論よりも証拠、すでに私がネットにあげている動画映像『恥辱の刻』を見てもらえば歴然ですが、国際銀行家はヒラリー陣営を応援して、不正選挙を行おうとしてお

りました。しかしアメリカ国民が一丸となり、ペンタゴン（国防総省）やFBIも動くことで、アメリカ人は不正選挙にも勝利したのです。これはまさに、アメリカにある騎士道精神、フロンティア精神の勝利でした。

「不正選挙なんか行えるのか？」、そう思うかもしれませんが、不正選挙は簡単に行えます。なぜなら、マスコミが発表する出口調査の結果を誤魔化し、そして自動票読み取り機を誤魔化しさえすれば、それだけで十分に不正選挙は完成するからです。

『不正選挙のレシピ』というブログを書き、本も多数出版しているアメリカ人ジャーナリストのグレッグ・パラスト氏は、次のようにコラムを書いています。

アメリカ民主主義の汚らわしい秘密のひとつは、国政選挙をするたびに、投じられた票の多くがあっさりトゴミ箱に放り込まれることだ。『無効票』と呼ばれるこうした票は、判読不能か、損傷しているか、書式が不正確ということになり、カウントされることもない。この『無効』制度は数十年前から存在しているが、最近の選挙では前例のないほど大量に昇っている。例えば2004年度大統領選挙では、300万票以上がカウントされなかった。

1990年の9月11日に、アメリカ連邦議会で『Toward a New World Order (新世界秩序にむけて)』

という題名で演説を行った第41代大統領ジョージ・H・W・ブッシュ、彼の息子ブッシュ・ジュニアが第43代大統領に就任する選挙の際、不正選挙が疑われて、そして「私は不正を行った」と証言する人物も出てきました。それはクリントン・ユーン・カーティスというプログラマーです。彼は「国民がどのような投票行為を行おうとも、必ず51対49になるようになっていた」と証言したのです。

また、作家でアメリカの不正選挙の調査員も務めたマイケル・ルパートという人物も次のように言います。

「自動票読取機」を信じている人がいたら、一度、脳ミソを検査してもらったほうがいい。



日本は民主国家ではなかった

トランプ革命を起しているアメリカ国民と同様に、日本人も、政府とマスコミを信じきらず、むしろ疑いを持つべきですが、実は「選挙」に対しても、疑いを持つべきなのです。なぜなら日本の選挙は、実質上、民間の会社に支配されているからです。「株式会社ムサシ」という民間の会社が、『自動票読取機テラックCRS-V A』という機械を作り、日本の選挙業務の8割から9割を取り仕切り、実質上、日本の選挙を支配しているからです。

そしてこの「株式会社ムサシ」の約150万もの株を持つ筆頭株主が、「上毛実業株式会社（148万8600株を所有）」という会社なのですが、この会社は社名を変える前は「株」価値開発」という会社でした。そしてこの「価値開発」という会社の筆頭株主は「(有)アルグループ」という会社で、その親会社は「株」ダヴィンチ」という会社です。この「ダヴィンチ」という会社を実質経営しているのは、「フォートレス・インベストメント」というニューヨークに本拠地を置いている会社です。つまり日本の選挙を取り仕切り、「自動票読取機」を製造している「株式会社ムサシ」は、巧妙に隠してはおりませんが、結局のところ外資なわけです。外資系企業が、日

本の選挙業務の9割近くを運営しているわけです。

すなわち日本は、「通貨の発行権」、「本物の予算・税金」、「報道の自由」を奪われたのみならず、選挙という「民主主義の根幹」をなすものまでも、国際銀行家たちの支配下に置かれていたわけです。

それを物語るエピソードがあります。2015年に行われた大阪府議選挙において、開票作業が行われていた大阪堺市で、「自動票読取機」数台が、同時に複数台壊れるという異常事態がありました。それまでの開票作業では、順調に票を伸ばしていた候補者の女性が、なぜかその後から票が入らなくなり、選挙結果を不審に思ったその女性が裁判を起こしました。不正選挙裁判です。

その裁判の中で、開票作業の途中で壊れたムサシの「自動票読取機」を治す際に、外部からハッキングして直していたことが明らかになりました。つまり「ムサシ」が作っている「自動票読取機」には、元から「バックドア」が仕組んであり、自由に外部から侵入して、「自動票読取機」を操作できることが、この不正選挙裁判の中で明らかになったわけです。

2012年の衆議院選挙において、東京高裁だけでも100件を超える不正選挙裁判が行われていました。

これについても何も報じない日本の売国奴マスコミですが、しかし「自動票読取機」に「バックドア」が仕掛けてあり、自由に外部からハッキングできる仕組みになっている、これは恐ろしくも悲しい事実です。なぜなら私たちは、民主主義さえ奪われていたからです。この「自動票読取機・バックドア問題」は、不正選挙裁判を戦った女性の言葉を借りれば、「リコール問題」であり、まさに私たち日本人は、民主主義さえ奪われていたのです。そこまで日本はデストピアと化していたのです。

ここで考えなければならぬことがあります。日本人はそんなに真面目で、善人ばかりなのでしょか？現職の警官として、はじめて警察官の裏金問題を内部告発されて、その後、鹿児島県阿久根市の副市長になられた方に、仙波敏郎という方がおられます。彼は副市長を務めている時に、匿名で選挙管理委員会の人物から、電話を受け取ったそうです。そしてその電話の向こうの人物は、仙波氏にこう述べたそうです。「鹿児島県阿久根市では、期日前投票の投票用紙はすべて入れ替えている」と。

日本国民はトランプ革命に続くために、政府に対しても、マスコミに対しても、選挙に対しても疑いを持つべきです。それと同時に私たち日本人は、マイケル・ルパー

ト氏の「自動票読取機を信じている人がいたら、一度、脳ミソを検査してもらったほうがいい」という言葉を、もっと重く受け取るべきなのです。なぜならかつてスターリンというソ連の独裁者は、こう述べていたからです。「票を投じる者が決定するのではなく、票を数えるものが決定するのだ」

やはり自由は幻想だった

すでに日本は金融植民地であり、法治国家でも、民主国家でもありませんでした。そして私たち日本人は、実は奴隷のごとく鎖に縛られていたのです。それを証明するにあたり、最初でも出しましたが、次の四つの質問に素直に答えて頂きたいと思います。

問1 次の8つの中から、1つを自由に選んでください。

「スキー」「鼻水」「コップ」「温泉」「ゴミ箱」「コーヒー」「冬」「お土産」

問2 それでは次は、今選んだその単語と貴方が「関係ある」と思うものを、次の8つの単語の中から自由に選

んでください。

「電卓」「雪」「針」「ティッシュ」「米」「まんじゅう」「牛乳」「電話」

問3 さて、次は問2で選んだその単語を強くイメージして、そして次の8つの中から「関係ある」と感じるものを自由に選んでください。

「大きい」「遅い」「白い」「鋭い」「暗い」「甘い」「赤い」「狭い」

問4 それでは最後に、問3で選んだ特徴に当てはまるものを次の8つの中から自由に選んでください。

「ナイフ」「ラミッド」「砂糖」「亀」「犬小屋」「宇宙」「血」「深海」

貴方が選んだものは「砂糖」です。もちろん魔法でも何でもありません。ここにはトリックがあり、普通に考えると必ず「砂糖」にたどり着く、詐欺的な仕組みとな

っているのです。実は「自由」などというものは、欠片も存在せず、自由は幻想だったのです。

たとえば一問目では、8つの選択肢があるわけですが、実は二問目では4つしか選択肢が無くなります。というのも、最初の一問目の8つの選択肢から、まともに考えれば、二問目の「電卓」「針」「米」「電話」の4つの選択肢は「関係ある」とは到底思えず、実はこの4つはただのダミーだからです。つまり「選べない選択」です。あたかも、これまで日本人やアメリカ人が、繁栄への選択を選び取ることができなかったようなものです。

この要領で、二問目に選んだ「雪」、「ティッシュ」、「まんじゅう」、「コーヒー」からは、三問目の8つの選択肢のうち、普通に考えれば「白い」と「甘い」のたったの2つの選択肢しかありません。「たくさん選択肢があつて自由である」と思いつつも、すでに二択になっているのです。それはまるで、アメリカ国民が「民主党」と「共和党」からしか大統領を選べないようなものです。そしてたとえどちらを選ぶにしても、国際銀行家が進めるNWO計画を推進させることなり、そもそも選挙そのものが、もとから不正なのと同じです。

そして最後の質問の「白い」と「甘い」と当てはまる

のは、四問目の選択肢では「砂糖」だけです。つまり普通に考えていくと、一問目は8つの選択肢ですが、二問目では4つの選択肢に減り、三問目では2つに減り、四問目ではたったの1つしか選択肢が無くなるわけです。すなわち通貨発行権を奪われると、次第に「自由」が減って奴隷化していくように、この4つの質問も、「自由に選択できる」と思いつつも、先に進めば進むほどに、選択肢が減って不自由になっていくわけです。

しかし私はこの4つの質問の中で、あえて何度も「自由」という言葉を使いました。それは本当は自由など何一つ無いからです。だから「自由の国アメリカ」とでも言わんばかりに、あえて私は、「自由」を強調したわけです。

「票を投じる者が決定するのではなく数える者が決定する」、そして「報道の自由」も無ければ、自動票読取機を製造する「株式会社ムサシ」は、国際銀行家たちの持ちものであった、つまり私たち日本人は、「自由である」と思い込まれつつも、鎖で縛られて、殺され、搾取され、家畜の如く扱われていたわけです。それは悪魔崇拝者と、彼らに指示を出している者たちによつてです。

AIロボットによって仕事が減る

だからこそ、私たち日本人も、目覚め、覚醒し、立ち上がらなければなりません。

しかも私たち人間は、自分たちが生み出す科学の脅威にもさらされています。なぜなら核兵器の脅威のみならず、たとえば今後わずか十数年程度の間、AI（人工知能）とロボットなどの科学技術の発展によって、今ある仕事の大半が失われると予測されているからです。これはマイナス的に見れば、「人間の仕事がAIロボットに奪われてしまう」ということですが、プラスに考えれば、「生産性が向上して富が増える」ということでもあります。

科学の発展は、繁栄の時代を迎えるにあたり、絶対に大切な条件の一つです。たとえばもしも電気が無ければ、日の出と共に起き、日没と共に寝、仕事をするにも制限されています。

あるいは農業一つとっても、かつては人間だけで仕事をしなければなりません。しかしトラクターなどの機械が誕生したことで、生産量が向上して、世の中は繁栄してきました。

それでも電気やトラクターなどは、これまでの機械で

は、難しい判断を行うことまではできなかったために、いちいち人間が判断を下して、機械に指示を出さなければなりません。しかしAI（人工知能）とロボット技術の向上によって、その判断と指示の部分が、これから大幅に減っていくわけです。

『週刊現代』の記事によれば、「すでにAIの導入によって、三井住友銀行では4000人の人員の配置換えが行われ、銀行員にはもう仕事がない」といいます。なぜならAIは、自分で何かを認知して、自分で判断を下し、自分から行動を行い、そしてその行動によって出た結果をまた認知して、さらに判断を下す、ということが永続的にできるからです。すなわちAIは、「認知↓判断↓行動↓結果↓認知↓」というサイクルが途切れないわけです。そのために、AIロボットの登場によって、これから人間の仕事が大幅に減って、代わりに富が増えていく可能性があるわけです。

ですから今後、わずか十数年の間に、人間が行わなくなる仕事として、販売員、会計士、事務員、セールスマン、秘書、飲食店の接客係、レジ係、積み



降ろしなどの作業員、トラックやタクシーの運転手、コールセンターの案内係、下働きの調理人、ビル管理人などが予測されています。とにかく多くの仕事が、人の手を離れてAIロボットに渡ることが予測されているわけです。こうしたことを見通して、GoogleのCEOラリー・ペイジは言います。

20年後、あなたが望もうが望ままいが、現在の仕事のほとんどが機械によって代行される。

ラリー・ペイジは、「10人中9人の人間が今とは違う仕事をしているだろう」とも述べています。言葉を変えれば、今後わずか十数年で、人間には、人間にしかできない仕事を行わねばならない時代が到来する、ということです。「人間にしかできない仕事」とは、かつして創造性の高い仕事だけではありません。なぜならAIロボットは、音楽や小説さえ創れるからです。これまで過去に流行った音楽や小説を学んで、そして新たに音楽や小説を生み出すという仕事を、すでにAIロボットは行っているのです。機械には芸術の創造性もあるのです。人間にしかできない仕事、それは「精神性」の伴った高度な仕事です。たとえば看護師、保育士、教師など、

人の心に触れ、「温かい」と感じ、精神性あれていることが要求されている仕事、これこそが、人間にしかできない仕事であり、後のことはすべて、ロボットに任せられる時代は、実はもうすぐそこなのです。

これは人類にとって希望の時代であると共に、しかし逆に、精神性を高めていかねばならない、という挑戦の時代でもあります。科学の進化は止められません。かならずロボットに仕事を奪われ、私たち人間は、人間にしか行えない仕事を行う時代は、もうすぐそこなのです。

ベーシックインカムを実現させたリビア

科学の発展は日進月歩でありますから、もしもトランプ革命の流れに乗り、日本の金融経済を解放すれば、日本は大繁栄の時代を迎ええます。

そしてもしも日本が大繁栄の時代を迎えれば、「ベーシックインカム」も実現可能です。「ベーシックインカム」とは、政府がすべての国民に対して、最低限の生活を送るのに必要とされている額のお金を、無条件で定期的に支給するという制度のことです。

これは我が師も、『国家繁栄の条件』の中で述べられ

ていることですが、本当は「無税国家」を超えて、「配当国家」も実現可能なのです。「配当国家」とは、今のように、国民が無条件で国家にお金を納める国家制度ではなく、国家が無条件で国民にお金を配る国家制度です。このベーシックインカム制度は、かつてリビアで実現され、そして今まさにスイスやカナダ、ハワイなどでも始まろうとしています。銀行が無からボタン一つでお金を創造できる以上、実は国家の富に比例してさえいれば、お金を生み出すことが本当はできるのです。ならばAIロボットの社会進出にともなって、国家の富が増えさえすれば、それに伴って通貨を発行することで、ベーシックインカムもけっして夢や幻ではありません。

単純に考えて、今、私たちは国際銀行家によって、奴隷状態に置かれて働かされておりますが、私たちの代わりにAIロボットを働かせれば良いわけです。

日本やアメリカなどのマスコミによって、トランプやプーチン、あるいはフェイソンと共に、「独裁者」に仕立て上げられてきたリビアのカダフィー、実は彼こそ自国の通貨発行権を国際銀行家から守り抜き、そして自国で採れる石油の輸出で得たお



金を、自国民のために使うことによって、配当国家・ベーシックインカムを実現させ、夢のような大繁栄の時代を築いた人です。では、カダフィーによって実現されたリビアの夢のような豊かな暮らしとは、はたしてどんなものだったのでしょうか。

1. 電気代の請求書が存在しない。電気は全国民、無料。
2. 融資には金利がなく銀行は国営で、全国民に対して与えられる融資は、法律で金利ゼロ・パーセント。
3. 住宅を所有することが人権と見なされている。
4. 全て（違うという意見もあり）の新婚夫婦が、新家族の門出を支援するため、最初のアパート購入用に政府から60,000ディナール(50,000ドル×800円/↓500万円)を受け取る。
5. 教育と医療は無償。識字率は83パーセント。
6. 農園を始めるための、農地、家、器具、種、家畜が、全て無料で与えられる。
7. 政府が外国に行くための資金を支払い、さらには実費のみならず、住宅費と自動車の経費として2,300ドル(23万円)／月、支払われる。
8. 自動車を購入すると政府が価格の50パーセントの補助金を出す。

9. 石油価格は、リッターあたり、0.14ドル(約14円)。

10. 対外債務は無く、資産は1500億ドルにのぼる。

11. 卒業後就職できない場合は、本人が雇用されているかのごとく、特定職業の平均給与を、職が見つかるまでも国が支払う。

12. 石油のあらゆる売上の一部が全国民の銀行口座に直接振り込まれている。

13. 子供を生んだ母親は、5,000ドル支払われる。

14. パン40斤が0.15ドル(10円ほど)。

15. (国民の)25パーセントが大学の学位を持っている。

16. 人工河川計画として知られる世界最大の灌漑プロジェクトを26年かけて遂行した

リビアの人々はかつて言いました。「リビアは日本より貧しいが、しかしリビア人は日本人よりも豊かである」と。それは通貨発行権が民間銀行ではなく、リビア政府にあったからであり、たしかにリビアでは、ベーシックインカムを実現させたわけです。

しかしリビアのカダフィーは、国際銀行家たちの前に

敗れてしまいました。トランプ以前のNATO(実質は米国主導の軍隊)によって、リビアの街は爆撃されて、リビアの人々の暮らしは、原始時代の暮らしに逆戻りさせられてしまったのです。

このリビア爆撃を、背後で指示したのがヒラリー・クリントンと云われており、その彼女に、トランプが大統領選挙で勝利したことを見ても、まさにトランプ革命が進行中であることが分かります。

金融侵略は精神侵略でもあった

すでに述べたように、科学、そしてAI技術の発展によって、我々人類は、自分たちが創り出すAIロボットに打ち克たねばなりません。そしてそれは、すでに述べたように、私たち人間が精神性を高めていかねばならない、という挑戦でもあります。

なぜならもしもこのまま、通貨発行権が奪われた状態で、科学が発展し続けられれば、ただ貧富の差が拡大するだけだからです。それでは人類は滅びかねません。すでに銀行員の人員削減が行われているように、このまま金融奴隷状態が続いて、AIロボットが次々と社会進出すれば

ば、仕事に就けなかった人が街にあふれて、ホームレスが激増することは簡単に予測できます。実際にスピルバーグ監督の映画『A I』では、そうした悲惨な未来が描かれていました。つまりA Iロボットの活躍は、大繁栄の時代になる可能性と共に、大貧困の時代になる可能性も十分にありえるわけです。

大繁栄を選ぶか、大貧困を選ぶかは、これを読まれる方が、「自分くらいは〜」と考えて、水を持って行くか、それともワインを持って行くか、あるいは「たとえ自分一人でも〜」と考えて、この目の前の宇宙戦争を戦うかにかかっています。

そしてかつての日本人は、たとえたった一人になろうとも、戦う精神を持っていたのです。今、アメリカで騎士道精神、カウボーイ魂のもとに、トランプ革命が起きているように、かつての日本人には武士道精神、侍魂がありました。侍たちには、たとえ一人でも戦う強さがあったのです。しかし悪質宇宙人と悪魔は、国際銀行家たちを利用して、日本にあった武士道を解体しました。それはあまりにも日本人が強すぎたからです。

では、武士道・侍精神とは、果たして何でしょうか？
明治から昭和にかけて、世界的に活躍された日本人に、

新渡戸稲造という方がいらっしやいます。彼は外国の教授から、「それでは貴方の国には宗教教育はないと、そうおっしゃるのですか？」と、そのように質問されたことがあります。そこで彼は「ありません」と、きつぱりと答えたそうです。

するとその外国の教授は、「宗教教育無しで、どうして人々に道徳を授けることができるのですか？日本人は何を基準に物事の善悪を学んでいるのですか？」と、そう驚き、少し怒り気味に言ったそうです。なぜなら外国では、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教などの宗教が、人間に善悪を教えて、道徳の心を育み、与えてきたからです。

外国の方にそう問われて、それから新渡戸氏は、「自分たち日本人はどのようにして道徳を得て、何に基づいて物事の善悪を学んでいるのか」、それを考えてみました。そして彼はやがて、「日本には武士道教育がある」ということに気がつかれたそうです。こうして彼は、日本人を外国の方々に理解してもらおうと、『Bushido: The Soul of Japan』、邦題『武士道 … 日本の魂』という書物を世に著しました。

武士道が日本人を強くしていたのです。

武士道とは真の強さを教える教育

では、武士道とはいかなるものなのでしょうか。

江戸幕末の山岡鉄舟という侍にして、思想家は次のように述べています。

武士道とは神道にあらず、儒道にあらず、仏道にあらず、武士道とは神儒仏、三道融和の道念也

山岡鉄舟という方は、「侍精神を目覚めさせていた武士道教育とは、日本独自の宗教・神道そのものでもなければ、中国発祥の儒教そのものでもなければ、あるいはインドやネパールで興った仏教そのものでもない、真の武士道とは、これら三つの宗教が融和して完成されたものである」、そう述べたわけです。

人は「この世がすべて」といった、共產思想のような唯物的人生観を持つと、「自分一人くらい」と考えて弱気になってしまうものです。今の日本の公教育も、唯物的な人生観を前提にしています。

しかし人は宗教から学び、魂の永遠性を知り、生まれ変わりを確信し、霊的な人生観を持つことができれば、「自分一人でも」という強さを持つことができます。すなわち「武士道」というものを簡単に説明するとするな

らば、神道によって魂はあり、霊はあり、神々は存在しているという霊的価値観を人間に教え、儒教によって、「人間とは如何に生きるべきであるか」という人生の方向性、指針を人々に示し、仏教によって転生輪廻、生まれ変わり、魂の永遠性をより明確に教え、霊的的人生観をより強固なものとし、こうして人間が持つ真の強さを引き出していたもの、それが武士道だったわけです。

どうやら宇宙の邪神やその下にいる者たちというのは、「強さ」「こそ」「正義」と捉えているところがあるようです。それは国際銀行家、中国共産党にも、実に似たところがあります。そのために彼らは、すべてを弱肉強食的に考えて、「強い者は弱い者を支配してよい、金融的でも、軍事的でも、強ければ弱い者たちを奴隷にしよう」と、食料にしようとして、生贄にしようとして、滅ぼそうとして、それは自由である」という考え方を持っているわけです。しかしそれは真の強さではないのです。真の強さとは、愛、仁、慈悲といったものをもなうものです。多くの人たちを助け、導き、救い、そして平和を守り、調和を実現し、大調和を追い求めるためにこそ、「本当の強さ」というものはあるのです。

弱ければ人は救えません。弱ければ悪に屈することも

あります。弱ければ平和も正義も実現しません。しかしだからといって「強さ」はそのまま「正義」ではないわけです。たとえば「警察は強いから腐敗しようが、犯罪を犯そうが正義であり、暴力団も強いからそれで正義である」という理論は、やはり間違っているわけです。「強さ」と「勇ましさ」の中に、想いやり、労わり、慈しみ、こうした優しい心がともなつてこそその、本当の強さなわけで、そうした「真の強さ」を教え、そして人々の心の中から、「優しさ」と「勇ましさ」を引き出して教えていたものが、日本の武士道だったわけです。

「優しさ」あつてこそその真の強さなわけですが、実は似たようなやり取りは、シェイクスピアの『ヴェニス商人』の有名なシーンの中にもあります。『タルムード』によって、思想的に汚染された一部のユダヤ人にも、「強さ」を「正義」と捉えている一面があるのです。『ヴェニス商人』の中で、金貸しユダヤ人（銀行家）シャイロックが、キリスト教徒のアントーニオにお金を貸して、そしてアントーニオがそのお金を返済できず、担保にしていた「肉1ポンド」を取ろうと迫る際に、ポーシヤというキリスト教徒が、シャイロックをたしなめるシーンがあります。

慈悲は強制されるものではない。

慈悲は、あたかも天より地上にふりそそぐ雨である。

慈悲は二重の祝福であり、慈悲を与える者の祝福と、慈悲を受け取る者との祝福である……。

【中略】

このように慈悲が正義の刃を和らげる時、地上の権力は神の御力に近きものとなる。

だからなあ、ユダヤ人よ、お前の訴えが正義であることはよくわかるが、こう考えてみるがよい。

正義ひとすじでは、われわれの誰しも救いにはあずかれまい。

正義ひとすじでは誰も救うことはできず、正義の刃を慈悲が和らげる時、その強さは真の強さとなり、神近きものとなるのです。

そしてこの地球をはじめとする宇宙には、「正義」と「強さ」をはき違えている者たちがいるのに対して、「優しさ」と「勇ましさ」といった、「真の強さ」を教えていたものが武士道であったわけです。そしてその武士道とは、神儒仏の融和です。だからこそ悪魔とその手下である国際銀行家たちは、その武士道を解体して、たとえ

一人でも立ち向かう侍精神を、日本人から奪い取ったわけです。

こうして狡猾な彼らは、私たち日本人が、「自分一人くらい」と考えるように仕向けていったわけです。

それはまさに、思想侵略であり、精神侵略でした。

神道指令で唯物論を広めた

では、日本人が受けた「思想侵略」、「精神侵略」とは、果たしてどのようなものであったのでしょうか。

まずは、すでに述べましたように、「3S政策」によつて、日本人の意識と関心が、政治から引き離されましたが、狡猾でずる賢い彼らは、もちろんこの程度では終わりません。

たとえば外国の人々が、日本人を見て、不思議に思うことがあります。それは「日本人は無宗教の民族なはずなのに、なぜ彼らは食事をする前に、わざわざお祈りするのだろうか？」という疑問です。それは日本人がごく自然に昔から今も行っている、生きとし生けるものへの感謝、食事を用意して下さった方への感謝、そして食物を与えてくださった神仏に対する感謝の想いから、両手を

合わせて行う「いただきます」という文化、生活習慣のことです。

日本人は、一般的には「無宗教な民族」と考えられていますし、日本人自身も、そのように考えている人は多いことでしょう。しかし戦前まで日本では、どの家庭にも神棚があり、どの家にも仏壇があり、八百万の神々に手を合わせ、御仏にも手を合わせ、神仏の御前で自らの心を見つめて生きてきたのです。そして特に、神道という日本独自の宗教が、人々の文化と生活習慣にまで深く根付いていました。その一つがお祭りであり、七五三であり、成人式であり、そして神輿であります。その他にも、日本人は儒教とも、仏教とも、非常に馴染み深かったのです。

すなわち日本は金融侵略、精神侵略も受けましたが、それは悪魔とその崇拝者たちによる、信仰侵略でもあったわけです。日本は、金融、報道、選挙、すべてのすべてにおいて侵略を受けてきたわけですが、しかしさらに信仰侵略をも受けていたのです。

いや、後に詳しく説明いたしますが、「信仰侵略」こそ、邪神および悪魔勢力の狙いであったと、そう考えるべきでしょう。

国際銀行家の傀儡であったGHQは、「日本は悪い侵略国家だった」と宣伝すると同時に、「神道という日本の宗教がその侵略行為の原因だった」と難くせをつけました。こうして邪神・悪魔勢力は「神道指令」というものを発令して、神道という日本民族独自の宗教を、日本の隅に追いやったのです。

そのために今、日本人は「神道」を忘れてしまっています。

全国に八万社もある神社、これはコンビニ24万軒の約2倍です。ちなみにお寺は七万六千もあります。八百万の神々の中心と考えられ、伊勢神宮に祀られている天照大神、この神様から六代くだると初代・神武天皇になり、平成の今上天皇で第125代目です。つまり皇室の先祖は天照大神なわけであり、天皇陛下というのは、日本中に数多くいる神主の最高権威であり、ローマ法王のような宗教家なわけです。言葉を変えると、日本という国は、今でも神話が続けている、神秘で稀有な国なわけです。そうした中で、二千七百年という世界最古の歴史を持つ日本において、常に神道は日本の中心にありました。そして実はこの『神道』という日本独自の宗教には、『古事記』や『日本書紀』といった聖典があり、その中には

様々な神々の物語が描かれてはいるのですが、しかし「心の教え」に相当するものがないのです。神道では、神々の神話は、たくさん描かれているのですが、「心の教え」そのものではなく、実は神道の「心の教え」の部分を、補ってきたのが儒教であり、仏教であったのです。

その一方で、この「神道」という日本民族独自の宗教からは、絶対に神や霊を否定する「無神論」、「唯物論」といったものを導き出すこともできません。儒教という宗教は、孔子という方が祖と考えられ、仏教はお釈迦様が興されましたが、実はこの二つの宗教は、ともに二千年百年前に始まったものであるために、その古さから、「儒教は霊や神の存在を認めているのだろうか?」、「仏教は霊や魂の存在を肯定しているのだろうか?」といった議論がされております。つまり時として、儒教や仏教が、「無神論」、「唯物論」と考えられてしまうこともあるわけです。

しかし日本の中心に、常に在り続けた神道からは、絶対に神や霊を否定する「無神論」、「唯物論」を導き出すことができません。神話で彩られた『古事記』や『日本書紀』ではあるものの、神社や神道は、神や霊の存在を否定しては成立できないのです。ですから神道を中心に

据えて、天皇陛下という最高神主を国家の権威として、歴史を刻んできた日本そのものが、神や霊の存在を否定しては成立しえないはずなのです。

すなわち神道こそが、日本人に神や霊を信じる心を教え、「霊的価値観」を授けていたわけですから。

しかし邪神および悪魔勢力は、GHQに「神道指令」を発令させて、この神道を日本の中心から排除したわけです。

その結果、いつしか日本人は、「いただきます」という祈りのカタチだけは残っても、神道を忘れてしまい、悪魔勢力の迷惑通りに、「物しかない、霊などない、神など存在しない、死んだら終わり、今がすべて」という唯物論・無神論に染まったわけなのです。

宗教を隅に追いやった

またそれ以外にも、GHQは『教育制度改革』でもって、戦前まで日本の公教育で行われていた、儒教の教育「修身」の排除を行いました。儒教とは、2600年前の中国で始まったと云われる宗教のことです。儒教教育が、日本人に「徳とは何か」、「勇気とは何か」、「仁義

とは何か」ということを教えていたのですが、この儒教教育を取り除いたわけですから。するとその後、日本人は仁義をはき違えていきますし、それと同時に、なぜか戦後の日本では、ヤクザ映画ばかりが流行るようになるのです。

神道を排除し、儒教も排除したGHQは、さらに極めつけに「農地改革」を行なって、それまで神社やお寺が持っていた土地を取り上げることで、宗教家たちの経済基盤を奪い取りました。宗教家たちの経済基盤を奪い取れば、必然的に宗教が衰退し、それと同時に、宗教家たちが生活に追われることで金儲けばかりに励んで、精神性が落ちていきます。

しかもGHQは、日本中にわざわざ公民館を建てて、それまでお寺や神社が行っていた塾や催し物、あるいは子供会などの遊びの集まりを、この公民館で行わせました。それは日本国民を、お寺や神社といった宗教施設から遠ざけるためです。おかげで日本人が、神社やお寺に行く機会といたら、観光か縁日、あるいは七五三や結婚式や葬式などの冠婚葬祭ばかりになってしまいました。その結果、いつしか日本国民は、「宗教とは冠婚葬祭の専門業」と考えるようになってしまったのです。

つまり国際銀行家の傀儡であるGHQは、「神道指令」で神道を隅にやり、唯物論を流行らせました。そして「教育改革」で儒教教育を取り除き、「農地改革」で宗教家の経済基盤を奪い取りました。こうして彼らは、日本の宗教を衰退させたわけです。そしてわざわざ公民館を建てて、日本国民を宗教施設から遠ざけました。狡猾な悪魔勢力は、このように日本に対して、信仰侵略を行ったわけです。本当に悪魔と、その崇拜者たちは狡猾です。しかしその背後には、もつと悪知恵がはたらき、悪質宇宙人、そして邪神がいることも、私たちは忘れてはなりません。

曆と言葉も変えられた

しかも狡猾な彼らは、日本の曆こよみにまで手をつけました。「国民の祝日に関する法律」という法律を制定して、わざわざ日本の曆こよみまで変えたのです。たとえばかつて日本では、4月3日には、『神武天皇祭』が行われておりましたが、これは完全に廃止されました。他にも『春季皇霊祭』は「春分の日」と変えられ、『秋季皇霊祭』は「秋分の日」にされ、11月3日の『明治節』は意味

不明な「文化の日」にされ、11月23日の『新嘗祭』にいなめさひは「勤労感謝の日」と、それぞれ勝手に呼び名を変えられてしまったのです。10月17日の『神嘗祭』かんなめさひにいたっては廃止されて、スポーツを流行らせる流れを作られて、10月10日が「体育の日」などと制定されました。このように、かつての日本の曆には、「神」や「霊」といった言葉が、ごくごく当たり前に使われていて、日本人の生活の中には、宗教性と信仰が深く入り込んでいたのですが、邪悪な彼らは、これらの「神」や「霊」といった言葉をことごとく排除したのです。

さらに彼らは、「日本人は漢字などという難解なものの習得に時間を費やしているから、他の学問に対する学びが遅れた。そのために「侵略」や「虐殺」などという愚かな行為におよんだのだ」などと、まったくの難くせをつけて、日本語までも変えられました。

たとえば戦前まで日本では、「わたし」という言葉は、「多くの志を和する己」という意味から、「和多志」と表記していました。すなわち、かつてこの和の国においては、「わたし」という言葉そのものに、個人主義的な意味合いではなく、むしろ公的な意味、調和的な意味合いが含まれていたわけです。しかし「私」という漢字一

文字に変えられてしまいました。「和多志」から「禾」^{のぎへん}とカタカナの「ム」にされたわけですが、この「ム」には、虚無的な意味が織り交ぜられています。

「氣」も同様です。「天」という文字が変形して出来上がった、「気」^キ、この中にエネルギーを象徴し、日本人と非常になじみ深い「米」という文字が入ることによって、「氣」という文字が出来上がっていたのですが、しかし「ペー」という文字が入ることで、「氣」と表記するようにになりました。まったく日本人の「氣」を内側に閉じ込め、心までを封じ込めて、弱体化させたいかのようであります。

このように暦ばかりか、言葉からも宗教性が排除されてしまいました。そして約70年の月日が経過すると、その変えられたおかしな日本を、今の日本人の人は、当然の日本と受け入れてしまっているわけです。

もうここまでお読みになれば、「陰謀が有るか無いか」という議論のレベルでおさまるものではなく、むしろ「日本人は陰謀の中で生きていた」ということが分かるはずです。

現実にもそのようなのです。水の中に生きる魚が、水に違和感を感じないように、空気の中に生きる私たちが、空気

に違和感を感じないように、実は私たちの身の周りには、空気や水のように、そこいら中が陰謀で満ちていたのです。そして空気や水は必要ですが、陰謀は不要であるからこそ、たとえ自分一人であっても、勇気をもって真実を語り、世の中にあふれかえった邪悪な陰謀を暴かねばならないのです。

このように神道を排除され、儒教も排除され、仏教も衰退させられ、暦や言葉の中からも、宗教性が完全に取除かれていくことで、日本人は精神侵略・信仰侵略を受けたわけです。

信仰侵略によって起きた日本の腐敗

悪魔とその崇拜者たちによって、GHQを使った信仰侵略を受けてしまった日本、その結果、日本はどうなったのでしょうか。いつしか日本人は、宗教の意味や価値をまったく忘れてしまい、自分自身で、「日本人は無宗教な民」と考えるようになったのです。その結果、なぜ、自分たちが「いただきます」の時に手を合わせているのか、なぜ、子どもに対して、「きちんと『いただきます』してから食べなさい、行儀が悪い！」と叱っているのか、

その意味さえも分からなくなりました。そしてこのことについて、外国人からも不思議がられているわけです。

では、信仰侵略の結果、日本はどうなつたでしょうか？

信仰侵略を受ける前の日本を知る、こんなエピソードがあります。トロイア遺跡の発見で有名なシュリーマンが日本を訪れた時、彼は税関の荷物検査を免除してもらおうと、役人に幾らかのチップを差し出しました。なぜなら当時の外国の役人たちの間では、チップをもらえば簡単な荷物検査で済ませて、賄賂を出さないと賄賂を出すまで荷物検査を長引かせる、なんてことが当たり前に行われていたからです。そのためにシュリーマンは、日本の役人にも、自分が旅してきたこれまでの国と同じように、チップを差し出したわけです。すると当時の日本の役人は、きつぱりとこう言い切りました。

「日本男児たるもの心づけにつられて、義務を蔑ろにすることは尊厳にもとる」

おかげでシュリーマンは、荷物を開けなければなりませんでしたが、しかし彼は役人から言いがかりをつけられるどころか、通常の検査だけで満足してもらいました。そしてシュリーマンはこう述べています。

「日本人は大變好意的で親切であり、また彼等の最大の侮辱は、たとえ感謝の気持ちからでも現金を贈ることである」

このように日本にはかつて、「むやみに現金を受け取ることを恥とする心」がありました。

しかし今はどうでしょうか？政治が腐敗し切っているのは歴然ですが、元愛媛県警で、現職の警察官として日本で初めて実名で内部告発された仙波敏郎氏、彼は勇気をもつて「日本国民に、真実に気がついて欲しいから」と、次のように訴えています。「日本にある組織で、通常の勤務で犯罪を行なっているのはヤクザと警察だけである」と。

仙波氏は若い頃、筆記試験ではトップの成績で、巡査部長という役職で警察官になりました。そして勤務をしてすぐさま、「偽の領収書」を書いて、「裏金造り」を手伝うように、上司から命令されたそうです。しかし正義感の強い仙波氏は、その上司の命令を拒否しました。すると彼は署長に呼び出されました。しかしそこでも彼は、「こんなことをしていたら大變なことになる」と、署長に意見したそうです。すると彼は署長から、退室するよ

仙波氏は言われます。

たとえ「裏金造り」という犯罪であっても、縦社会において上司の命令を拒否した場合、果たして何が起こるか、それは2つです。一つは左遷、人事異動でたらいまわしにさせられるか、もう一つは出世できず、昇進試験に合格しない、ということです。

これは警察に限らず、企業などの組織でも同じですが、上司に可愛がられない者は、大抵、この末路をたどることになります。そのために仙波氏も、何度も引越しを繰り返して、子供は転校を繰り返さなければなりません。しかも彼が警察に最初に入った役職と、彼が定年を迎えた時の役職はまったく一緒だったのです。彼曰く、実はこれを、ギネス記録に申請しようとしているそうです。もちろん世の人に、日本にある不正義について、早く気がついて頂きたいからです。

では、なにゆえに、偽領収書を書いて裏金造りを行わなければならないのでしょうか？たとえ警察では、剣道や柔道の大会があり、その優勝者をお祝いしたり、忘年会等で、警察官たちがお酒を飲むこともあります。これはいくら警察官が「聖職」と言っても、人間ですから

理解できません。そしてその際、警察官が飲酒運転で逮捕されるようなことがあつては絶対になりませんから、「その時のタクシー代を裏金で出す」というならば、まだ少しは理解できます。

しかし現実には、そんなものではないのです。3月、4月の人事異動の時に、署長が現金で数百万円のお金を、キャッシュでカバンに詰めて持ち帰る、こののです。だから警察では、署長クラスになると、自分の名義ではない家を2軒、3軒持っている人もいます。

しかし「裏金造りは税金の横領」に他ならず、偽領収書を書いた瞬間、「私文書偽造」の被疑者となり、三カ月以上、五年以下の懲役です。全国で警察によるその被害総額は、400億円にも上り、ゆえに何百万枚という領収書が必要で、約30万人の警察関係者の100%がその犯罪に手を染めさせられていると、仙波氏は告発しています。告発した仙波さん以外のすべての警察関係者です。

そのために正義感でもって、警察官になった若者たちが、泣く泣く、その犯罪に手を染めさせられているといえます。私は若い頃、不良少年であったために、警察の厄介になることもありました。私がお会いした警察官

一人一人は、誰も皆、正義感が強く、まっすぐで正直な方々ばかりで、本当に尊敬できました。ですからこれは警察官個人の問題ではなく、警察組織の問題と言えるでしょう。

誰もが無罪の犯人になりえる

日本の治安と正義を守るはずの警察が、腐敗しきっているならば、実は同じように検察も腐敗しきっております。検察とは犯罪を起訴して裁判にかけて、日本に正義を打ち立てる組織です。

検察の裏金問題を告発した三井環氏は、内部告発とはまったく別の件でなぜか逮捕されてしまい、刑務所にまで入れられてしまいました。しかも本来、初犯ならば仮釈放が認められるのですが、なぜか彼の場合は、仮釈放が認められず、三井氏は元検事でありながらも、二年の刑期を満期で迎えて、釈放されることになったのです。三井氏に続いて、数名の検察関係者も、実名、顔出しで、自分たちが過去に犯した裏金造りを告発しています。ですから警察と同様に、どうやら検察も莫大な裏金を造っているようです。

だから三井氏は、仙波氏と同じく、日本国民に事実気がついて欲しくてこう訴えかけます。「検察の裏金造りは犯罪です。しかし検察が犯罪を犯しますと、その犯罪をチェックする機能は、この国にはありません」と。そして日本の正義を見極める最高裁をはじめとする裁判所も、やはり警察、検察と同じく腐敗しきっており、実は裏金造りに余念がありません。その最高裁の裏金の総額は、警察と同様に400億円にものぼるそうですが、こちらは裏金を受け取る人数が少ないために、一人あたりの犯罪額は多そうです。

多くの日本人が知らないことですが、元判事の生田暉雄氏は、2012年に「裏金問題」で日本の最高裁を相手に裁判を起こしたのです。彼ははつきり私たち日本国民に、こう告げてくださっておられます。

日本国民の方々は、おそらく裁判官くらいは聖職であると信じておられるでしょうけれども、実は裁判官はまったくの聖職ではなく、むしろ質の悪いサラリーマンよりタチが悪い。ヒラメ裁判官ばかり。

同じく元判事の瀬木比呂志氏も、「日本の裁判官は皆、総じてヒラメ裁判官である」と告発しています。

では、ヒラメ裁判官とは何でしょうか。日本の裁判官は、まず判事補として始まって、6号、5号と次第に出世していくそうです。そして二十年目で公平に4号となり、4号までは公平に昇進していくのだそうです。しかしその上の3号・裁判長に昇進できる人できない人がいて、ここで3分の1に振るい落とされるそうです。

そして人事権を持つ最高裁は、どういう要件で「3号・裁判長」になれるか、あるいはそもそも3号、4号には定員の数が有るのか無いのか、そうしたことを何もハッキリさせていないのだそうです。そのため判事たちは、事件の善悪、正義を見極めて判決を下しているのではなく、上司・最高裁の顔色をうかがって判決を下しているのだといいます。それはまさに、自由を奪われ、鞭で打たれる恐怖心を持つ奴隷のようだといいます。つまりヒラメという魚は、目が上についていて、海の底を泳いでいるために、上しか見ておりませんが、このヒラメのように、日本の判事たちは、奴隷状態に置かれて恐怖心から、上ばかりを見て判決を下しているわけですね。

こうしたヒラメ裁判官と似たことは、企業の中などでも、起きていることです。つまり顧客を第一に考えてい

るようで、実は「上司こそ第一」に考えてから、その上で顧客のことを考える、ということとは、日本中の企業組織の中では、よ

く起こっていることで、「ヒラメ裁判官」ならぬ、「ヒラメサラリーマン」も、世の中には多いことでしょう。

こうしたことから、瀬木氏は、『絶望の裁判所』、『明日はあなたも殺人犯!』といった衝撃のタイトルの書籍を出版され、元警察官の仙波氏、元検察官の三井氏、元判事の生田氏と同様に、日本国民に「正義への目覚め」を訴えております。さらに瀬木氏によれば、「冤罪」をテーマにした映画、『それでも僕はやっていない』というあしたの出来事は、日本人ならば実は誰でも起こりうることであり、衝撃の告白をします。瀬木比呂志氏は言います。「この国の司法では良心を貫くと挫折する」と。

しかも元警察官の仙波氏によれば、「冤罪」というものは、必ずしも捜査ミスによって、過失的に起きるもの



ではなく、実は腐敗した警察組織が、犯罪検挙率を上げるために、わざわざ意図的に行われることもあると、さらなる衝撃の告発を行っております。

その他にも警察は、検挙率を上げなければ、経費に影響が出てきて、そうすると裏金も造れなくなるために、あえて被害届を受け付けない、ということまで行っているというのです。つまり被害届を受け付けなければ、警察の数字上では、被害が起きていないも同然ですから、犯罪発生率が下がります。犯罪発生率が下がれば、同時に検挙率は上がります。すると「それだけ優秀な警察署」のために、経費も多く使えます。もちろんこのお金は税金ですが、経費が多く使えれば、その分、裏金造りもたくさんできます。つまり仙波氏曰く、裏金造りのために、意図的に冤罪が起こり、被害届が受け付けられないことがある、というわけです。

腐り果てた日本の姿

「信じられない」と思うかもしれませんが、どうか『桶川ストーカー殺人事件』を思い出してください。あの事件では、被害者の女性と家族は、何度もストーカー被害

に遭っていることを埼玉県警上尾署に相談し、「被害届」まで出していました。ストーカー被害は、女性のみならず、父親の会社にもまで誹謗中傷のビラがまかれていたのです。しかしその「被害届」は受け入れられず、最後は上尾警察署に「告訴」までしていました。しかしその「告訴」は「被害届」に改ざんされてしまいました。まさに警察組織の腐敗です。

被害者の女性は、加害者が異常な精神状態で、これから自分が殺されるかもしれないことを分かっています。そのため彼女は、わざわざ「告訴」までしたというのに、それでも警察はそれを受け付けず、まったく動かず、改ざんを行い、みすみす彼女を殺させてしまったのです。

彼女は自分が死ぬことを覚悟して、遺書とも、手紙とも言える内容の文書を書いていきます。「この手紙を渡すことなく無事で帰ってきたい、最高のお父さん、お母さん、大大好き」と。

しかも一人の女性が亡くなっているというのに、上尾署は、ヘラヘラと笑いながら記者会見を開く始末で、その正義感の無さと希薄性に、世間を驚かせました。

もちろん大企業によくあるトカゲの尻尾切りのよう

に、このストーカー事件によって、上尾署では多くの警官が懲戒免職になり、「ストーカー規制法」もできたりもしました。しかし被害者の両親が、警察を訴えると、警察は真つ向対決の姿勢を見せました。本来、殺人事件の捜査のために預かった、被害者の日記、携帯、そして本当に殺された時に備えて、彼女が両親や友人に当てて書いていた手紙や遺書など、こうした証拠物件が、裁判において、被害者の女性の人格を落とすために、次々に悪用されたのです。

つまり裁判における警察側の主張はこうです。被害女性性は、「ブランド好きな派手な女子大生」というレッテルを貼り付けて、こういった性格、生活をしていなかったから殺されたのだ、だから何も警察に落ち度はなかった、彼女はストーカーに殺されても仕方がない、と言わんばかりの主張をしたわけです。そして驚いたことにマスコミは、元警察の仙波さん、元検察の三井さん、元判事の生田さんや瀬木さんの正義の主張は一切、取り上げないにもかかわらず、警察のこうしたふざけた主張だけは、ご丁寧に取り上げたのです。

単純に言って、政治も、警察も、検察も、裁判所も、マスコミも、そろいもそろってこの国は腐敗し切っている

のです。今の日本は少し腐っているのではなく、腐り果てているのです。

今は日本にとって恥の時代

そもそも警察の腐敗を考えるならば、やはり「パチンコ」です。日本では賭博行為が犯罪なのは、子供でも知っていることですが、しかし日本中の駅前には、なぜかパチンコ屋が立ち並び、そして実際にはパチンコ玉がお金に換金されて、賭博行為が行われていることは子供でも知っていることです。つまり子供でも、日本が矛盾した国家であることは知っているわけです。言葉を変えれば、子どもでも、「今の日本は嘘つきな国」、ということを知っているわけです。

そしてこのパチンコの「生殺与奪」の権限を握っているのが、実は警視庁であり、そして所轄の警察署なのです。実は「1玉何円」とパチンコ玉の値段を決めていたのは警視庁だったのです。日本の警察とパチンコの関係はとても深い仲なのです。たとえば日電協（日本電動式遊技機工業協同組合）というパチンコ業界がありますが、警視庁からそうしたパチンコ業界への天下りも後を絶

ちません。仙波さんは言います。「警察がパチンコ屋などの企業から、一升瓶から樽の日本酒、ビールをケースごと、あるいは果物等をお歳暮やお中元でもらうことなんて当たり前、警察がヤクザから現金をもらうなんて当たり前」と。

映画にもなった実話『恥さらし』の内容は衝撃です。「オウムの警視庁長官狙撃事件」を受けて、警察は全国の警察署に対して、拳銃摘発のノルマを課しました。すると北海道警察の「ヒラメ警察官」たちは、その銃の摘発ノルマを達成しようと、地元のヤクザに依頼して、わざわざ裏金で拳銃を買い取り、ロッカー等で見つけたことにしていました。そんなことをして警察官の善悪が麻痺していくうちに、現職の警察官が覚せい剤に手を染めてしまい、刑務所に行くという実話を題材にした映画、それが『恥さらし』という手記をもとに映画化した『日本が一番悪い奴ら』です。上の命令でノルマを課せられたことで、警察が犯罪を犯す、まさに本末転倒です。



だから仙波氏は「日本の日常の勤務で犯罪を行っているのはヤクザと警察」と、衝撃の告発を行うわけです。しかしかつての日本の役人は言いました。「日本男児たるもの心づけにつられて、義務を蔑ろにすることは尊厳にもとる」と。そしてそれを聞いたシューリーマンはこう述べていたのです。「日本人は大変好意的で親切であり、また彼等の最大の侮辱は、たとえ感謝の気持ちからでも現金を贈ることである」と。

政治の腐敗、裁判所の腐敗、検察の腐敗、警察の腐敗、これが悪魔より金融侵略と信仰侵略を受けた国の成れの果てです。皆、「金、金、金」と、金にまみれ、汚職にまみれ、聖職であるべき組織が腐敗しているわけです。もちろん悪魔たちが、こうしてデストピア化した世の中を創り出す目的は、NWO計画を完成させるためです。「恥さらし」は、事件を犯した元警官の恥をさらしているのでも、警察の恥をさらしているのでもありません。今の日本の恥をさらしているわけで、それは日本に生きる私たちの恥なのです。

日本は今まさに、信仰侵略によって、「恥の時代」を迎えているわけです。

本當の優しさを思い出さねばならない

「宗教」という神仏への信仰の世界、つまりは「聖職の根源部分」を破壊されたがゆえに、他の聖職、つまり裁判、検察、警察、マスコミ、あらゆる分野において、悪魔が喜びそうな腐敗が蔓延しているわけです。

だからこそ、日本人は思い出す必要があります。

皇室の祖先の初代神武天皇、それから遡ることわずか

あまでらすおのみかみ

六代の天照大神、この天照大神こそ、神社・神道で祀られている八百万の神々の長と考えられてきました。そして日本は、聖徳太子の頃に仏教が伝来すると、その神道と仏教が習合しました。「習合」とは、宗教用語で、異なった宗教が融和することです。

つまり世界は宗教が対立し、争っておりませんが、しかし「調和」と「平和」を重んじる「和の国・日本」では、神道と仏教、さらには儒教をも習合させてきたわけです。すると「天照大神をはじめとする八百万の神々もまた、仏陀の教えを学ぶべき存在であり、それと同時に、勇ましき日本の神々は仏陀を守護する存在である」と考えられてきました。

こうして日本は、神道、儒教、仏教を大切にしながら歴史を歩み、世界にも誇れる国民性・精神性を築き上げ

たのです。しかし今まさに、日本人はその精神性を失いつつあるわけです。

かつての日本人は、お金よりも心を大切にし、目に見える物質や栄華よりも、目に見えぬ精神や神霊を重んじ、私利私欲に走るよりも、天下国家のために走り抜けたのです。それが武士道であり、侍でした。

かつて日本にやってきたフランシスコ・ザビエルは、日本人を見た感想について、こう述べています。

まず第一に言うべきことは、今まで知り得た限り、私が出逢った民族の中でこの国民が最もすぐれている。

一般的に良い素質を持ち、悪意がなく、交際して非常に感じが良い。彼らの名誉心は極めて強く、彼らにとつて名誉にまさるものはない。

日本人は概して貧しいが、武士も町人も、共に貧乏を恥と考えている者はいない。彼らには、キリスト教国民の持つていないと思われる一つの特質がある。

それは、たとえ武士がいかに貧しく、逆に町人がいかに裕福であっても、貧しい武士も富豪と同様に、平民から敬意をあらわされていることである。

一説には、フランシスコ・ザビエルは、国際銀行家た

ちの仲間であったために、このように日本人を散々、称賛した後、「だから日本人を根絶やしにしなければならぬ」と述べた、なんて話もあります。

それはともかくとして、「二千七百年の世界最古の歴史を持つ日本において、日本人が『宗教の価値』を忘れてるのは、信仰侵略を受けたこの戦後約七十年だけである」という事実を、私たちはよく思い出す必要があるのです。

すでに述べたように、戦前まで日本は、どの家庭にも神棚があり、どの家にも仏壇があり、八百万の神々に手を合わせ、御仏にも手を合わせ、神仏の御前で自らの心を見つめ、「おもいやり」、「いたわり」、「いつくしみ」といった優しい心を大切にしながら生きてきたのです。

「本当の強さ」が「優しさ」をともなわなければならぬように、「本当の優しさ」というものも、「勇ましさをともなったものであり、だから日本では、「優しい」と「優れる」という言葉が、同じ漢字「優」の一字から成り立っているのです。つまりかつての日本人は、「真に優しい人こそ優れた人である」と考えていたわけですから。

日本人は八百万の神々と仏の御前で、謙虚に手を合わ

せて、自らの心をよく見つめ、己の心を澄みきらせて、「優しさ」を大切にしてきた民だったので。

しかし信仰侵略の結果、それが失われているわけです。

果たして科学は万能か？

悪魔勢力による、「神道指令」を始めとする緻密で、狡猾な信仰侵略によって、日本人は宗教の意味を完全に忘れてしまいました。そのために悪魔勢力の思惑通り、日本では今、「無神論」、「唯物論」が流行ってしまっておりません。

その結果、警察官、検察官、裁判官などの聖職者たちまでもが、「バレなければいい」、「自分さえよければいい」、「おもしろおかしければいい」、「金さえ手に入ればいい」といった傲慢な考え方のもと、犯罪に手を染めております。しかも今の日本では、聖職者が犯すそれらの犯罪を、取り締まることは、ほぼ不可能です。

これらの根本は、やはり「無神論」、「唯物論」があります。なぜなら人は、「無神論」、「唯物論」に染まってしまうと、「天国地獄」というあの世の存在を信じられず、「転生輪廻」という生まれ変わりも信じられなくな

つてしまからです。つまり唯物論・無神論に染まると、「この世における自分の地上生命」にばかり重きがいく反面、「他の人々」が軽くなってしまつて、自己中心的で、傲慢な生き方になつてしまふわけです。

しかし日本で唯物論・無神論が流行つてしまつたその背景には、悪魔勢力による信仰侵略のみならず、科学万能主義も関係していることでしょう。つまり「月にまで行くほどの万能な科学が、霊や魂、あるいは神の存在を見つけ出せないのだから、やはりそれらは存在しなかつたのだ」という『科学万能主義』が、日本人のあいだで蔓延していることも、「無神論」、「唯物論」が流行つている原因の一つではないでしょうか。

なぜなら「科学者」とか、あるいは「知識人」を名乗る人々が、まるで「霊や神が無いことは、すでに科学が証明した」と言わんばかりに、平然とテレビや雑誌で、「無神論」、「唯物論」を語っていることもあるからです。そして彼らが持つ「一流」という權威に、世の人々がコロツと騙されてしまい、「無神論」、「唯物論」を受け入れてしまつていることもよくあります。

しかしそれはまるで、『西遊記』という物語に登場するサルの孫悟空のようではないでしょうか？

たしかに最先端科学の望遠鏡で宇宙を眺め、最先端科学の顕微鏡で肉体を眺めても、未だに神や霊の存在を見つけ出すことはできません。しかしその最先端の科学は、本当に万能なのでしょうか？

『西遊記』のサルの孫悟空は、様々な修行の結果、多くの神通力を身につけたことで、「自分は何でもできる」、「自分に出来ないことは何もない」と自惚れました。そして孫悟空は、ついににまで戦いを挑み、競争を申し込んだのです。

そして孫悟空は、宇宙の果てまで飛んでいき、柱に落書きをして、「ついに自分は仏にも勝利した、自分は最強だ」と思い込みました。しかし結局、孫悟空は、仏の手の平から飛び出すことさえできず、孫悟空が柱だと想っていたのは、仏の指でした。つまりサルの孫悟空は、ずっと手のひらの中にいたわけです。こうして孫悟空は、仏によつて岩に閉じ込められ、やがて深い、深い反省をすることとなります。

この『西遊記』のサルと、「科学万能」と考える現代の私たち人類は、実はよく似た部分があるのではないのでしょうか。なぜなら私たち人類も、ロケットを開発して月にまで行ったことで、まるで『西遊記』のサルのよう

に自惚れて、「神も仏も無く、自分たちこそこの地球における神であり、大宇宙における仏なのだ」と自惚れている部分があるからです。しかしこの小冊子の冒頭でも、ほんの少し、宇宙の広さについて述べたように、宇宙というものはとても広大であり、私たちが巨大な山だと思っているエベレストも、大きく広い海でさえも、大宇宙から見れば、シーツのシワや水溜りにさえも相当していません。なぜなら人類がやっとたどり着けた月も、まだまだ人類が到底、飛び出すことのできない天の川銀河でさえも、広大な大宇宙から見れば、砂粒にも、川にさえも見えない、小さな小さなものでしかないからです。

ですから私たち人類は未だ太陽系さえ飛び出せていないのに、それで「科学は万能」と捉えて、そして「万能な科学が霊や神を見つけ出せないのだから、霊も神も無い」と結論を出すには、あまりにも早計なわけです。

世の中から「一流」と思われていても、百年、千年と時間が経過してみると、実は「二流」、「三流」であって、人類史に埋もれてしまう人は、どんな世界にもいるものです。そしてそうした人に限って、「自分は知り尽くした」と、自惚れてしまうものなのかもしれません。しかし人類史に燦然と輝く「真の一流」の方々は、けっして

最後まで謙虚さを失わず、「自身の無知」を自覚されています。

天才科学者ニュートンは言います。

私は海辺で遊んでいる少年のようなものです。

時おり、滑らかな小石や綺麗な貝殻を見つけては夢中になっている。

しかし真理の大海は未発見のままです。目の前に広がっているというのに。

「宇宙戦争」ということについて考えるのならば、「万能な科学が、神や霊を見つけられないから、神や霊は存在しない」という、悪魔が喜ぶ思想に、安易に染まるべきではありません。なぜなら無神論・唯物論は、世の中をますます破壊していくからです。

むしろ「日本という国は、神道を中心に歴史を刻んできた、世界最古の神祕の国であり、神道からは絶対に、無神論、唯物論を導き出すことはできない、むしろ仏や八百万の神々は存在している」という、神仏が喜ぶ深遠なる思想こそを、私たちは探求するべきなのです。なぜならそれが、私たちの目の前の、手のひらで行われている宇宙戦争に、勝利していく道だからです。

巫女と審神者と預言者について

日本に対して行われた精神侵略、思想侵略、信仰侵略について考える時、私は「霊」という漢字が変えられてしまったことがとても大きいと思います。実は「霊」という文字も、今とはかなり異なっております。昔の「霊」の文字には「口」が三つ入り、「巫女」の「巫」の文字も入っていたのです。「悪魔の陰謀によって、『霊』から『靈』に漢字を変えられたことで、日本人が巫女の存在を忘れた」、これも大きな信仰侵略の一つでしょう。

では、「巫女」とは何なのでしょうか？これを考える時、キリスト教、イスラム、ユダヤ教などの「預言者」について考えると、その答えが分かります。

世界にキリスト教徒は約22億人、イスラム教徒は約16億人、ヒンズー教徒は10億人で、世界の約6割の人々がこれらの宗教を信仰し、そしてこれらの宗教は、ともに神霊の存在を肯定しております。人数は少ないですが、それはユダヤ教においても同じことが言えます。このように、地球は今も、神仏を信じる人たちが大半を占めているのです。

そして今から約三千年前、モーセという方によってユダヤ教が興り、このユダヤ教を土台にして約二千年前に

キリスト教が興り、この二つの流れを受けて、約三千年前にイスラム教が興りました。そのために、これら三つの宗教は聖地を同じエルサレムに持つ「アブラハムの兄弟宗教」と云われております。

しかしその兄弟であるはずの宗教が、先に興った宗教は後から興った宗教の存在を認めてはおりません。それほどばかりか永遠の真理を説きながらも、地域や時代によって、真理の説かれ方がそれぞれ違うために、互いに誤解し、宗教紛争が起こっております。そして今まさに中東・聖地エルサレムを巡って、世界最終戦争の危機さえあります。これらのアブラハムの兄弟宗教の問題は、人類に迫りくる未曾有の危機でもあります。

ユダヤ教の祖モーセ、イスラム教の祖ムハンマド、こうした方々は「預言者」です。預言者とは「予言者」とは異なり、「未来を予知する者」ではなく、「神の言葉を預かる者」です。そしてキリスト教では「イエスは預言者ではな救世主」と考えられており、救世主とは読んで字のごとく、「世の救い主」です。

では、「預言者」とは何かと言えば、日本神道的に表現すれば、「巫女」と「審神者」なのです。今も日本全国に八万社もある神社、そこで祀られている八百万の

神々、そして「巫女」の「巫」という漢字には、「天と地を繋ぐ」ということが表されております。すなわち巫女とは自らが「神懸り状態」になることによつて、高天原に住み給う八百万の神々より、靈示・神託といった言葉・メッセージを地上で受け取る存在なわけです。日本で有名なところでは、卑弥呼や神功皇后という女性たちがそうです。

しかし靈感鋭く、直観的、感性的な女性が、靈示や神託を天より授かつて、その内容の解釈まではなかなか出来ません。そこでその天からの言葉・メッセージが、国民にとつて有効かどうか、論理的、思想的に判断し、解釈する存在が必要であり、これを「審神者」といいます。

審神者とは、「神の言葉を審らかにする者」という意味であり、「つまびらか」とは、「それまで隠されていたものや、今まで誰も知らなかったことを明らかにする」という意味です。巫女が神々の言葉を降ろして、審神者とその神の言葉に判断を下すわけです。

巫女は女性的で、直感的で、感性的で、右脳的で、「陰性」と云われ、審神者は男性的で論理的で、思想的で、左脳的で、陽性と云われてきました。つまり巫女である

女性が天の声を地に伝え、審神者の男性が、その天から地に降ろされた声を国民向けに翻訳して伝えたり、実際の政治を執り行っていたわけです。だから「政治」という漢字は、「政（祀り事）をもつて治める」と書くのです。

我が師・大川隆法総裁は、巫女であつた卑弥呼の靈を降ろされて、次のような事実を明らかにされておられます。

卑弥呼 日本では、古来、祭政一致の状況が続いておりましたが、私は、一種のシャーマンと申しますか、靈能者でもあり、まあ、巫女と言えば巫女でもあつたわけですから。

そして、巫女的な能力としては、女性のほうが男性よりも上であることが多かつたのです。要するに、神がかりになって、高天原の神々の言葉を伝えるのは、女性のほうがふさわしかったということです。

また、他の男性たちがお互いに譲らず、「誰かを立てれば、派閥争いが起きる」というような状況でもあつたために、私が女王になつたわけですね。

【中略】

実は、このスタイルが、（天照大神の頃から）連続と、日本の二千年以上の歴史をつくつてきており、今の

日本の皇室も、そういうスタイルにかなり近いかたちになっ
ていますね。

つまり、「上に立つ者は、象徴として存在するが、実
権は、下にある者が持っている」というスタイルです。

『女性リーダー入門』

たとえばある時、神功皇后が神懸って、八百万の神よ
り言葉を下ろされ、そしてその懸ってきた神は出兵する
ように伝えました。しかし夫の仲哀天皇は、その神の言
葉を無視しました。すると天皇は即死のようなカタチで
崩御され、代わりにお腹に子どもがいる神功皇后が戦に
出かけていきました。天皇陛下が即死のように崩御され、
代わりに身重の皇后が戦に出かけていく、このエピソード
からもお分りのように、それほどまでに日本において、
神の言葉・神託は重視されてきたのです。

このように日本では、「八百万の神々」、「巫女」、「審
神者」という三者でもって、神降ろしが行われていたわ
けです。そのためにGHQより漢字が変えられてしま
うまでは、「靈」の文字の中に「口」が三つ入り、天地を
繋ぐ役目の「巫女」の「巫」の文字も入っていたわけ
です。つまり「靈」という漢字一文字に、「八百万の神々」

と「巫女」と「審神者」、そして「天と地を繋ぐ」とい
う意味があったわけです。これはつまり、キリスト教、
イスラム教、ユダヤ教などで言えば、「神より言葉を預
かる者」、つまり「預言者」としての意味が、「靈」一文
字の中に込められていたわけです。

そしてすべての正しい宗教は皆、天上界からのイン
スピレーション（靈的直感）、もしくは靈言によって始ま
るものであり、「預言」と「巫女」が無ければ、絶対に
正しい宗教は存在しえないものです。その宗教には絶対
に無くてはならない「預言」と「巫女」の意味が、「靈」
の一字に込められていたわけです。

しかし信仰侵略の中で、その「靈」の文字を、今の「靈」
の文字に変えられてしまったわけです。そのために日本
人は今、巫女や預言、あるいは靈言の意味がまったく分
からなくなってしまうています。「靈言」という言葉を
聞いて笑う人もいます。それは日本人は宗教の根幹部分
の意味を、分からなくさせられてしまった、ということ
です。

だからこれも、悪魔勢力による、日本に対する大きな
信仰侵略の一つだったわけです。

東大出ても莫迦は莫迦

しかも仏教では今、霊の存在を認めない無靈魂説が主流になってしまっています。かつて仏陀は、「自分が、自分がという自己中心的な心、自我を戒めなさい、無執着の無我の境地に至りなさい」と教えました。しかしインドの言葉で「自我」は「アートマン」と言い、この反対の意味の「無我」は「アナートマン」と言うのですが、この自我を意味する「アートマン」という言葉は、「靈魂」とも訳せてしまうのです。そのために仏教徒の一部の者たちの中から、「アナートマン」を「無我」とは解せず、「無靈魂」と解釈する者が出てきてしまったのです。つまり仏教の中に、霊や魂の存在を認めない唯物的な考え方が生まれてしまったわけです。

そして近年の仏教学者たちが、科学万能に迎合したこともあり、「無靈魂説」を取っているわけです。そのために日本でも、「無靈魂説」が主流となってしまっているわけです。その原因の一つとして、宇井伯寿氏や中村元氏などの東大の宗教学者・仏教学者たちが、無靈魂説を取ったことも大きいでしょう。

はつきり言って「東大出てもバカはバカ」なんです。「バカ」という言葉も、本来は仏教用語であり、GH

Q によって漢字を書き換えられるまでは「莫迦^{ばか}」と書き表しました。本来の意味としては「仏陀の教えに触れても理解できず、悟れない者」という意味だったので。つまりたとえ東大を出て知識に溢れていても、学問的に仏教を捉えて、「智慧^{ちゐ}」や「慈悲」といった心の面から考えなければ悟れないわけです。つまり東大を出て知識があっても悟ることはできず、やはり莫迦は莫迦なのです。「東大出てもバカはバカ」、これは実際に、「悟り」という観点を抜きに考えても、たとえ東大で経済や歴史を学んだところで、国際銀行家や通貨発行権のことは何も知らず、偽の自虐史観を信じ込んでいたら、やはり言えてしまうことです。

しかし東大の宗教学者や仏教学者には、「東大」という「一流の権威」が与えられているために、世の人々もその「権威」にコロツと騙されて、無靈魂説が流行ってしまったわけです。ここまで世の中が陰謀に満ち溢れていると、宇井伯寿氏や中村元氏などの東大の宗教学者・仏教学者たちが、無靈魂説を取ったことも単なる偶然には思えず、「もしかしたら陰謀だったのかもしれない」と、勘繰りたくなってしまいました。真相は分かりません。

ただおそらくは、戦後の日本では、GHQによって「公職追放」が行われ、GHQにとって好ましくない日本人は、言論人、教育人、マスコミ関係者など、約21万人も職を失っており、代わりにGHQにとって好ましい日本人が職に就いています。悪魔勢力の傀儡であったGHQは、悪魔が喜ぶ唯物思想を持つ左翼勢力を、そうやって日本で跋扈させていきました。ですから霊を信じない宗教学者のほうが、出世の道が開けたことは簡単に予測できます。

このようにGHQによる「信仰侵略・日本改造計画」に拍車を掛けるかのように、仏教自体も自ら化石と成ることで、さらに武士道・侍精神が廃れてきたわけです。

武士の任務とは

邪悪な彼らは、日本の宗教を衰退させることによって、武士道の解体を行なったわけですが、それはあまりにも日本人が強すぎたからです。武士道教育によって、侍精神を持った日本人があまりにも真に強すぎたがゆえに、その大本である武士道を解体すべく、国際銀行家たちは神道、儒教、仏教を衰退させたわけです。

では、国際銀行家が恐れた侍精神とは、果たしてなんでしょうか？侍精神を持った人のことを、「武士」と呼びましたが、武士の仕事とは何であつたのでしょうか。

武士とは刀を持ち、ちよん鬘を結つた人のことではなく、侍精神を持った人のことです。明治維新以降にも武士はいたのです。むしろ明治維新によって、身分制度が無くなり、廃刀令が出されて、鬘を結う人がいなくなつても、教育制度が行き渡り、武士道教育が日本中に行き届くことによって、武士の数は逆に増えたと考えるべきでしょう。

では、武士とは何でしょうか、何をする人が武士なのでしょう。武士は戦闘を任務とします。ですから武士道とは戦人を育てる教育です。しかしその戦とは、己のための戦ではなく、人々の幸福のため、天下国家のため、八百万の神々のため、御仏のための戦です。

なお、その戦いは、殺人を手段とするのではなく、活人を目的とした武道です。武道の最終目的とは、互い戦わずして、剣を置くことにあり、武道の奥義とは、己を殺さんとする者と、友になることなのです。

そのために武道を極めんとする武士の宿命とは、平和と調和こそを願ひ、心技体を鍛えることにあります。仁

のための鍛錬と、義のための戦を、武士は任務とするのです。

ですから真の侍たちとは、まぎれもなく戦鬪集団でした。もちろん武士の一分としては、譲れない部分も、多少はあるかもしれませんが、しかし武士の本分は、たとえならず者の股くぐり、名誉や誇りを捨てようとも、天下国家のための戦に、命を賭すことであります。

真の武士は、己が欲得のために戦うのではなく、己が名誉のために戦うのでもなく、己が立身出世のために戦うわけでもなく、天下国家のための戦いに身を置いて、たった一人でも戦うこと、これが武士の本務です。

真の侍は生きながらにして死人

農事に携わる者は、米を作ればよく、商売に携わる者は商いに精を出せばよいでしょう。しかしたとえいかなる職業に就こうとも、もし「武士の心」を持つならば、戦人として、毎日、葬式をあげる覚悟を持った死人と化して、死と隣り合わせで生きていくべきなのです。

なぜなら我が師は、『勇氣の法』という教えの中で、「真の勇氣とは、いかに生きるかを考えるのではなく、

いかに死ぬかを考えて、死を覚悟した時にこそ、出てくるもの」と教えてくださっているからです。

江戸前期の臨濟宗の僧侶、至道無難しどうむなんという方は次のように詠みます。

生きながら 死人となりて なり果てて

思いのままにする わざぞよき

「生きながら死人となる」というのは、仏教で言う我欲を捨て、「空」という境地に至ることであり、死を覚悟して生きることです。

そうした真の勇氣を持ちし人を、「死人」と言います。ですから真の武士とは、真の戦人であり、真の戦人とは、生への執着を断ち切り、死を覚悟した死人なわけです。

国際銀行家によって解体された武士道、そして失われた侍精神ですが、日本人は今、再び、武士道を再建して、侍精神を取り戻す必要があります。なぜなら今も時代は昔と変わらないからです。つまり安土桃山の戦国の時代が終わり、江戸太平の世を迎え、幕末から明治維新が興り、大正、昭和、そして敗戦を迎えて、平成の世へ移っても、しかし今も昔、常に時代は、武士を求めているわけです。今も時代は、武士の心を欲しているのです。な

ぜなら一見すると、平和な時代に見えますが、しかし目をよくよく凝らしてみれば、今も安土桃山の頃と何ら変わらず、戦国の世に他ならないからです。気づいていない人が多いだけで、戦はずでに始まっているのです。

私たちの目の前で、手の中で、宇宙戦争は繰り広げられていたのです。

幻想の9条こそ彼らの陰謀

一見すると平和な時代に見えますが、それは心邪な者たちが、日本国民に仕掛けた、ただのまやかしに過ぎません。彼らは武士道を解体し、侍精神を奪い取り、逆に「9条さえ守れば平和は守られる」という幻想を日本人の心に植え付けました。

しかも彼らは、ユダヤ人マルクスを使って、共産思想を世界に広めてきました。そしてアヘン戦争の後、中国大陸は、この悪魔的思想に汚染されてしまいました。中国大陸は、アヘン戦争に敗れることで、精神侵略、信仰侵略をほぼ完全に許してしまうことで、中国共産党が政権を担い、悪魔が喜ぶ共産国家が誕生しております。

その中国共産党は、「9条さえ守れば平和は守られる」

という日本の共産主義者、「平和活動家」を自称している左翼日本人たちを、まんまと利用しています。彼らは「戦わずして勝つ」という『孫氏の兵法』のもと、着実に尖閣・沖縄から日本侵略を進めています。北海道などでは水資源を買い漁ってもいます。

つまり「平和憲法」とも云われている憲法9条こそ、日本を破壊する国際銀行家たちの陰謀なわけです。なぜならこのGHQに押し付けられた憲法を、このまま日本人が守れば守るほどに、そう遠くない未来において、日本は中国共産党によって滅びてしまうからです。国際銀行家に金融・信仰侵略されてきた日本は今、中国共産党によって、領土・軍事侵略を受けて、完全に痕跡も無く滅びようとしているわけです。

ですから一見すると平和な時代に見えますが、よくよく目を凝らしてみれば、日本は今、滅びの危機を迎えているのです。そればかりかページの都合上、多くは語れません、実のところすでに多くの日本人が、政治を機縁として、命を奪われてきたのが現実なのです。すでに述べたように、実際に特別会計の問題で石井紘基は殺されました。通貨発行権の問題で、ケネディ元大統領は殺されましたが、同じ民間中央銀行の問題は、この日本に

もありません。上海総領事館の事務官が、作員の手に墮ちて、自殺の道を選んだ疑惑もあります。

未だ世界は軍事力に基づいて動いている中で、国際銀行家の傀儡GHQによって、日本は憲法9条を押し付けられました。そのため今の日本は、「自分の国は自分で護る」ということさえできず、アメリカの言いなりにならないければなりません。そのために国際銀行家のさらなる金融侵略を、日本は許してしまってきたのです。

そんな誇りを失った、ふがいない状況にあるために、日本は最貧国の北朝鮮には脅かされ、国民を次々に拉致され、同じく北朝鮮によって、背後からオウムと手を組んで、サリン事件まで起こされてきました。これは元陸上自衛隊の陸将補の池田整治さんなどが、講演等でおっしゃっていることですが、オウムが起したサリン事件の背後には、北朝鮮がいて、そのさらに背後には国際権力がいたのです。ですから北朝鮮という国が危険な国家であることは、日本人ならば誰でも知っていることですが、あの危険な国は、国際銀行家とも、中国共産党とも、どちらにも繋がりを持った国なわけです。

ちなみに金正恩が留学していたのも、悪魔崇拝者・国際銀行家のおひざ元のスイスです。

日本が金融解放されるためには

日本が国際銀行家による、金融植民地から解放されるその方法は、中国、北朝鮮の脅威を退けるべく、日本を「自分の国は自分で護る」という独立自尊の国家へと、造り変えていくことです。中国共産党という前門の虎と、国際銀行家という後門の狼、これら二つの難敵に日本人は挟まれているわけですが、しかしこの2つの難敵を退ける方法はただ一つです。それはまず、憲法を改正して、「日本を誇りある独立自尊の国へと造り変えていくこと」です。

これはトランプ革命が起きて、国際銀行家たちの力が弱まっている今だからこそ実現可能なのです。つまり米同等の他国との同盟を維持しながらも、「憲法改正」を行って、日本を誇りある独立自尊の国に造り変えていかねばなりません。なぜなら今のように、アメリカに守ってもらうままでは、たとえアメリカで「トランプ革命」が起きたといっても、国際銀行家に植民地支配されているアメリカの言いなりにならないといけないからです。そしてもし、トランプの信念が揺らいで、トランプ革命が失敗するようなことがあれば、日本も共倒れです。ですから誇りある日本を取り戻していけばこそ、日銀

法も改正して、「通貨発行権」を取り戻すことができずし、また誇りある日本を取り戻していけばこそ、海外に消えている「特別会計」を、もうこれ以上、海外に垂れ流すことを、食い止めていくことができます。

ですから、まず行うべきことは、邪悪なる者たちから押しつけられた、「偽りの平和憲法」を改正して、日本を誇りある独立自尊の国へと、造り変えていくことです。それはつまり、この宇宙や霊界をも巻き込んだ思想戦において、「平和、平和」と叫びさえすれば平和が実現すると勘違いしている安易な安易な思想に打ち勝つことです。あるいは「右は善で左は悪」とか、「資本主義は善で共産主義は悪」といった二元論的思想に勝利することです。悟りでもって戦うことです。

憲法に必要な武士の心

そして日本人が「武士の心」を、取り戻すことで、時代が変わり、日本は夜明けを迎えるわけですが、しかし憲法にもまた、「武士の心」が必要不可欠なのです。改正する憲法の中に、「武士の心」を織り込まねばならないのです。なぜならすでに米兵たちも目覚め始めている

ことですが、「軍隊」と「戦争」は、国際銀行家にとつて、最大の利益になり易いからです。

「資本主義は善」と考える「右派・保守」と呼ばれる人々の多くは、かなりこのことに気がついておりませんが、実は左翼勢力が言う通り、たしかに軍隊は、一歩間違えば「暴力装置」となり、石油を始めとする資源の略奪と、武器売買でもって、国際権力者たちをただ肥え太らせてしまうのです。フセイン・イラクとの戦争で、いったい国際銀行家たちが、どれだけ利益を上げて、そして人々を貧しくさせることに成功し、NWO計画を推進させることができたか、この事実を知らねばなりません。しかもそればかりか、兵士たちに精神薬を大量に投与することでもって、精神病と自殺を増大させてしまうこともあります。これまで米軍が、どれだけ国際銀行家に利用されて、イラクやアフガニスタン、リビアなどで、資源を略奪すると共に、多くの人々を殺害するばかりか、多くの米兵たちが自殺してきたことでしょうか。ドキュメンタリー映画『隠れた敵／軍事に介入する精神医学』にもありますように、イラクとアフガニスタンからの帰還兵は200万人以上ですが、このうち約60万人が何らかの精神薬を服用しています。そして年間約8000

人、つまり1日平均すると、22人以上の退役、現役の米兵が自殺しているのです。これは1時間に約1人のペースです。

まさに異常事態ですが、この自殺の背景には、国際銀行家が医療部門でも米軍に介入しており、そのために米軍が、「世界最強ヘリ」と言われるアパッチ以上に、精神薬に税金を投入していることが原因にあります。その結果、負傷した米兵たちが、金にまみれた軍医たちによって、薬漬けにされてきた事実があるのです。軍医に「抗ウツ薬を飲むように」と言われたら、米兵はその命令を拒むことはできません。

軍隊というものは、戦わない第3者の誰かを、資源の略奪、武器売買、医療等によって肥え太らせることが確かにあるのです。そうやって国際銀行家たちは、米国をはじめとする連合国を操ることで、日本を金融植民地にしてきたのです。彼らはいつても、戦争の陰の第3者の立場に立ち、陰から謀を張り巡らせることで権力を増大させてきたのです。

たとえば1815年に、ナポレオン率いるフランスと、イギリス率いる連合軍が「ワータールローの戦い」を行いました。この戦争の時、第3者で莫大な利益を得たこ

とで、ロスチャイルド・国際銀行家は、イギリスの「通貨発行権」を手に入れました。その後、彼らはその絶大な力を背景に、アメリカ、ヨーロッパ、日本に対しても、金融侵略と共に、信仰侵略を仕掛けていったのです。

つまり力というものは、破壊の力である暴力にも、その力から守る武力にもなるわけです。だから力を持つ者には、個人であれ、軍隊であれ、国家であれ、「武士の心」が必要不可欠なのです。「強さ」＝「正義」というはき違えた強さではなく、真の強さを持つために武士道精神が、個人にも、警察にも、国防軍にも、そして国家にも必要不可欠なのです。

だから日本は、憲法改正を行わねばなりません。しかしその新たな憲法の中に、「武士の心」を織り込まねばならないのです。憲法の中に、精神と信仰を打ち立て、悪魔に侵略される前の「祭政一致の日本」に戻し、それとともに、日本をより大繁栄させていかねばならないのです。

そしてこの憲法に織り込まなければならない「武士の心」のことを、我が国では古来より、「大和魂」と呼んできたのです。

大和魂とは、大調和を目指す優しき、そして勇ましき

心のことです。そして武士とは「大和魂」を持った戦闘を任務とする者のことです。武士道とは誰の中にも必ずある「大和魂」を育み、戦人を育てる教育です。宗教教育です。

ゆえに真の侍たちとは、まぎれもなく大和魂を持った戦闘集団であり、宗教精神を持った人々なのです。

そして武士の心、大和魂でもって、「憲法改正」、「特別会計」、「通貨発行権」、これらの問題を終える時、私たちは、手の中で日々、行われている宇宙戦争に勝利することができません。そうすれば日本人は、お金という紙では、悩み苦しむ時代に終止符を打つことができます。すると私たちは、「余った時間をどのように使うか」という、もっと高次元のことで悩み始めることでしょう。

大和魂が神風を吹かせる

そんな大繁栄の時代を迎えるためには、日本人一人一人が、日本の問題を自分の問題と捉えなおす必要があります。日本人が日本の問題を、己の問題と捉え直して、「自分一人くらいは」などと思わず、たとえ一人でも勇ましく立ち向かっていく勇気が大切です。

すなわち一人一人の日本人が、「武士の心」を取り戻して、真の武士になっていくことです。これを讀まれてる貴方、あるいはこれを書いている私が「武士の心」を持ち、立ち上がることで他に、未来への道は一つ無いのです。なぜなら今も昔、時代はいつも戦乱の世である故に、常に死を覚悟した、真の勇気を持った戦人が求められているのです。死人と化した武士が今も昔も求められているわけです。

源氏が、腐敗し切った強大な権力を持つ平家を打倒したように、楠正成公が十倍以上の敵に十六回も特攻を繰り返したように、織田信長が戦国最強の武田騎馬隊を、鉄砲隊にて打ち破ったように、赤穂浪士四十七士が吉良邸に討ち入り、主君浅野内匠頭の仇討を成し遂げたように、山口一県にも満たない長州藩が、アメリカ、フランス、イギリス、オランダといった世界中を敵に回し、そして日本中を敵にしつつも、江戸幕府軍を打ち破ったように、東郷平八郎率いる日本海軍の連合艦隊が当時、「世界最強」と云われたロシア海軍のバルチック艦隊を打ち破ったように、神風特攻隊員たちが、その死をも恐れぬ勇ましさから、米兵をノイローゼにまで追い込んだように、武士とは戦闘を任務とするのです。

そして今を生きる日本人一人一人が、侍精神を取り戻し、手の中で行われている戦に参戦することで、日本は未来を切り拓くのです。この戦に勝利し、日本の未来を切り拓けばこそ、自分の家族や友人をも含めた日本国民の未来を明るくし、そして世界をも救っていくことができますのです。

そういった意味では、日本人は皆、「自分こそ」と考えて、世界を救う志士、すなわち「救世の志士」として立ち上がるべきなのです。

古くを遡れば、日本武尊が東征に出た時、草むらのなかで敵に囲まれ、そして敵に火を放たれ、日本武尊は辺り一面を火に囲まれました。しかしその絶対絶命の時、日本武尊は天叢雲剣を抜き、勇ましく自らのまわりの草を薙ぎ払いました。すると一陣の風が吹いて、火は逆に敵のほうへと向かいました。

こうして日本武尊が、敵に勝利し、自らの運命をも切り拓いたように、真の武士とは、神の勢力であるがゆえに、絶対絶命でもあきらめることなく、勇ましく剣を抜くことで、神風をも味方にするのです。

あるいはチンギス・ハーン率いるモンゴル帝国が、二度に渡って日本侵攻を行った際、日本は絶対絶命の窮地

に立たされました。しかし鎌倉武士が勇まし立ち向かうと、神風を吹かせて勝利しました。

このように真の武士とは、絶対絶命でもあきらめることなく勇ましく立ち向かうことができるのです。すると、神の勢力であるがゆえに、その勇気が、高天原におられる八百万の神々さえ動かし、大いなる他力、奇跡さえ起こすことができるのです。

日本人が、「あの世なんてない、死んだら終わり、神も仏も存在しない」という悪魔が仕掛けた陰謀と洗脳から脱して、神の勢力に入り、天上界と一体となっていく時、私たちは今一度、神風を吹かせることができます。今も昔、チンギス・ハーンの大軍と同じく、尖閣・沖縄に迫る侵略を防がんと、現代の武士が立ち上がる時、神風を吹かしていくことができます。大和魂の復活こそが神風をもう一度、吹かせるのです。

信仰心こそ現代の日本刀

冒頭で私は、「宗教の世界では、神仏より、真理を学ばせて頂き、自力修行を行なうことによって、病気が治ったり、インスピレーションが降りてきたりと、他力の

救いが臨む。一方で政治の世界とは、情報や知識などを自力・自助努力によって収集し、勇気をもって行動を起こしていくことで、神風を吹かせるような奇跡・他力が臨んでくる」、ということ述べました。私たち日本人は今こそ、この悪魔との戦いに勝たねばならず、その時に大切なのは、自助努力を行いながらも、神仏による他力・奇跡を忘れないことです。神仏に対して謙虚な姿勢を貫くことです。

「全部、神仏に頼り切って何も行動しない」、ということではダメですが、しかし「全部、自分でできるから神仏などどうでもいい」と考えるのも、やはり非常に傲慢不遜です。神仏の存在を忘れ去った考え方、つまり無神論、唯物論は、ただ悪魔たちを喜ばせるだけなのです。

人間に「神仏の存在」を忘れて欲しいがために、彼らが私たち日本人に対して、信仰侵略を仕掛けていたことを、私たち日本人は絶対に忘れるべきではありません。なぜならこの手の中で行われている宇宙戦争の本丸は、実は「信仰心」だからです。

いずれ別の機会に詳しくお伝えいたしますが、彼ら悪魔崇拝者と、その背後にいる者たちの真の狙いは、地球を家畜牧場にすることですが、実はその本丸として神仏

の国・日本を見定めております。

そして彼らは、さらにその日本の本丸としては、日本を中国や北朝鮮、もしくはかつてのカンボジアのような、唯物的な無神論国家にすること、神仏への信仰心こそを本丸にしているのです。なぜならもしもそうなれば、もはや彼らに刃向えるだけの神の勢力など、世界のどこを見渡しても存在しないからです。実のところユダヤ教の『タルムード』を見れば分かるように、ユダヤ教には思想侵略がなされました。仏教、道教、儒教を「三大宗教」にしてきた中国大陸も、信仰侵略を受けて共産国家にされてしまいました。

また、実は写真にある「パウロ6世ホール」のいかがわしさを見れば分かりますように、同じことはキリスト教にも行われてきたのです。いずれ詳しく説明したいと思いますが、実は悪魔勢力によって、日本が信仰侵略を受け、ユダヤ教も受けてきたように、キリスト教も信仰侵略されてきたのです。

邪神および悪魔勢力の狙いの



本丸は、日本であり、日本人の信仰心なのです。実際に、悪魔勢力からの最大の離反者に、レオ・ザガミという人物がいるのですが、彼はこう言っております。

（国際銀行家） 最上層部は、日本という国を、『神の国』として認識している。

何としても、我々の目的の完全遂行のためには、まず、『日本の国』をこの地上から消滅させなければならぬ。日本は今まで、我々の新世界統一秩序の遂行をくじいてきた稀有な国である。今まで世界の歴史の約150年間、我々の計画の前に、日本はことごとく立ちはだかってきたからである。

この宇宙戦争における悪魔勢力の狙い、それはNWO計画であり、本丸は日本であり、そして日本人の信仰心なのです。



Leo Zagami

ですからやはり地上の人間という

のは、この宇宙戦争を、神仏への信仰心でもって戦うべきなのです。いや、信仰心こそが現代の侍が持つべき「日本刀」なのです。そのためにかつての日本人が、当たり前前に神棚に手を合わせ、神仏に手を合わせていたように、

現代の武士は、神仏の御前で、謙虚に、折り目正しく、時には跪いて、真剣に、真剣に神仏に祈りを捧げるべきなのです。神に感謝して祈りを捧げる、これは「ただきます」の意味を、忘れさせられてしまった現代日本人にとっては、とても奇妙に感じるかもしれませんが、しかし信仰侵略を受ける前の日本においては、ごくごく当たり前の行為であったのです。

つまりは日々、己を磨きつつも、実際に自ら行動して自力で努力しながらも、祈りを捧げて、神仏の御前で謙虚に祈り、他力にすぎることが、いざれ神風を吹かせることとなり、私たち日本人が、悪魔とその崇拜者たちに勝利する唯一の道なのです。だから信仰心が現代の日本刀なのです。

そうした神仏への信仰心の中に、真の大和魂は存在するので。

祈りとは美・善・愛

では、祈りとはいかなるものなのでしょうか。

それをお伝えするにあたり、こんな話があります。今から500年ほど前、ドイツのニュールンベルグという

町に、デューラーとハンスという若者がいました。2人とも貧しい家に生まれ、そして共に小さな時から「画家になりたい」という夢を持っていました。しかし2人は毎日忙しいだけで絵の勉強ができず、そればかりか絵の具やキャンバスを買うお金さえまなりませんでした。そこで、ハンスがデューラーに提案しました。

「このままでは2人とも画家になれない。夢をあきらめなければならぬ。でも、私にいい考えがある。2人が一緒に絵の勉強はできないので、1人ずつ交代で絵の勉強をしよう。1人がもつと給料の良い鉄工所で仕事をし、もう1人の絵の勉強のためにお金を稼いで助けるんだ。そして1人の絵の勉強が終わったら交代して、今度はもう1人が絵の勉強をする」

どちらが先に勉強するのか、2人とも譲り合いました。しかしこの提案をしたハンスが、「デューラー、君が先に絵の勉強をしてほしい。君の方が僕よりも絵がうまいから、きつと早く絵の勉強が済むと思う。」と言い、こうしてデューラーはハンスに押されるカタチで、ハンスに感謝して、イタリアのベネチアへと、絵の勉強に出かけました。

厳しい環境の中で肉体労働に明け暮れるハンスのこ

とを想うと、デューラーは「1日でも早く絵の勉強を終えてハンスと代わりたいたい」と思い、寝る間も惜しんで絵の勉強をしました。一方、残ったハンスは、デューラーのために朝早くから夜遅くまで、重いハンマーを振り上げ、今にも倒れそうになるまで働いて、ベネチアへと送金を続けました。

1年、2年と月日は流れ去りましたが、しかしデューラーの絵の勉強は、なかなか終わりません。そもそも絵や、芸術の勉強に終わりなどあるのでしょうか？

ハンスは「自分がよいと思うまでしっかりと勉強するように」と手紙を書き、デューラーにお金を送り続けました。数年の歳月が過ぎ去り、ようやくデューラーは、ベネチアでも高い評判を受けるようになったので、故郷のニールンベルグに戻ることにしました。「よし今度はハンスの番だ」、そう急いでデューラーは帰ってきました。

2人は手に手を取り合って、再会を喜びました。ところがデューラーはハンスの手を握りしめたまま呆然としました。そして彼は泣きました。なぜならハンスの両手は、長い間の力仕事でゴツゴツになり、絵筆がもてないような手になってしまっていたからです。

「僕のためにこんな手になってしまつて、絵描きにならないような手になってしまつて……、これではハンスは絵の勉強どころではないではないか……」、「デューラーはただ頭を下げるばかりでした。「自分の成功が友の犠牲の上に成り立っていた、自分は友の夢を奪ひ、そして自分の夢が叶った」、デューラーは、そんな罪悪感に襲われる日々を過ごしました。

「少しでも友に償いをしたい」、「何か自分に出来ることはないだろうか」、「友に恩返しがしたい」、そうした気持ちになり、デューラーはハンスの家を訪ねました。ドアを小さくノックしましたが、応答はありませんでした。

しかし確かに部屋の中には人の気配があります。小さな声も、部屋の中から聞こえてきます。デューラーは恐る恐るドアを開け、部屋の中に入っていきましました。するとハンスが、静かに祈りを捧げている姿が目に見えました。ハンスは歪んでしまったゴツゴツの両手を合わせて、一心に神に祈りを捧げていました。

「神よ、デューラーは私のことで傷つき苦しんでいます。そして自分を責めています。」

神よ、どうかデューラーがこれ以上苦しむことがあり

ませんように。

そして私が果たせなかった夢も、彼が叶えてくれますように。

神よ、あなたのご慈悲と祝福が、いつもデューラーにありますように」

デューラーはハンスの祈りの言葉を聞いて心打たれました。なぜならハンスは自分のことよりも、デューラーのことを一生懸命に祈っていたからです。ハンスの祈りを静かに聞いていたデューラーは、祈りが終わった後、彼に懇願しました。

「お願いだ。君の手を描かせてくれ。」

君のこの手で僕は生かされたんだ。君のこの手の祈りで僕は生かされているんだ」

こうして、1508年、友情と感謝の心がこもった『祈りの手』という作品が生まれました。

我が師は教えてくださいます。祈りは美しくなければならぬ」と。「自分が、自分がない」と。「自分が、自分がない」と。

いった我欲、汚れが混ざり込んではいけません。我が師は教えてくださいました。「祈りは善きものでなければ



ばならない」と。「神や天使にその内容を見られても、恥じることはない善きものでなければならぬ」と。我が師は教えてくださいました。祈りは「愛が込められていなければならぬ」と。「祈りは他者の幸福のためでなければならぬ」と。

美、善、愛、こうした基準を満たした神への祈りを、私たち日本人が行っていく時、私たちは神風を吹かせ、全世界人類のための新世界秩序を築くことができるでしょう。この時に大切なことは、自力による努力と精進であり、謙虚に他力を求める祈りであり、つまりは「信仰と愛」です。神仏への信仰と、「自分が、自分が」という想いからではなく、「世の人々を救いたい」という愛の想いが、私たちの手の中で、こうしている今も繰り広げられている宇宙戦争を勝利に導くのです。

悩みがお金や仕事から余暇の時代へ

「自分一人くらい」と考えて、もしもこのまま時間が過ぎ去れば、日本人の自殺者は増え続けて、いつしか年間20万人、30万人となってしまうことでしょう。

「自分一人くらい」と考えて、もしもこのまま時間

が過ぎ去り、憲法改正ができなければ、日本は中国に呑み込まれ、チベットやウイグルの人々と同じ環境に置かれることになるでしょう。チベットの人々は、中国共産党によって自由を奪われてしまったために、彼らが行っている抗議は、悲しいことに焼身自殺です。

「自分一人くらい」と考えて、もしもこのまま、国際銀行家の思い通りに動いてきた、自民党(特に清和会)によって、憲法改正が行われ、「武士の心」が憲法に入らなければ、自衛隊は国際銀行家たちを儲けさせる暴力装置と化して、米兵のように薬漬けにされてしまうかも知れません。

「自分一人くらい」と考えて、もしも共産革命が起こってしまったら、日本はいつのまにか、かつてのカンボジアや今の中国のような国家となり、私たちは自由を失ってしまうかも知れません。

「自分一人くらい」と考えて、もしもこのまま時間が過ぎ去り、通貨発行権を取り戻すことなく科学が発展すれば、AIロボットに人々は仕事を奪われて、ホームレスが溢れかえることでしょう。

あるいは、「自分一人くらい」と考えて、もしもたとえ、無税国家ならぬ配当国家となり、ベーシックイン

カムが実現したとしても、一歩間違えれば怠け者を大量生産することにさえなりかねません。実際にスイスでは、「ベーシックインカムが始まれば働かない人が出るのではないか」と危惧されております。

そのためにベーシックインカムの実現と同時に、国民一人一人が「人生とは何か？」という哲学的、宗教的な問いに答えていかねばなりません。それはつまり「お金には悩まず、仕事の量も少ない、だから時間はたくさんある、ならば残りの余った人生を自分はどうのように生き切るか？」という**人生の深い問題**に、これから私たち一人一人が答えを出していかねばならないわけです。だからこそ約百年ほど昔、ジョン・ケインズは、「約百年後には経済の問題はすべて解決され、人々の悩みは余暇をどのように使うかということになるだろう」と述べたのでしよう。

そしてその答えは、単純に言って、私たち人類が人間性・精神性を高めることです。それはつまり、日々、自らの努力と精進によって、己の精神を鍛えあげることなのです。それが結局、武士道の再建であり、大和魂・侍精神の復活であると同時に、手の中の宇宙戦争に勝利して、新たな時代を切り拓いていく条件なのです。

つまり時代を切り拓くためにも、そして時代を切り拓いた後にも、私たち一人一人の魂の向上は必要不可欠なわけです。

真理とは永遠のもの

では、私たちは、どうすれば精神を向上させていくことができるのでしょうか。何がかつての日本人に侍精神を授けていたのでしょうか。神道、儒教、仏教といった宗教では、果たして何が説かれていたのでしょうか。

私は冒頭で、「日本人がたつた2つのことを知りさえすれば、0.1ミリの紙を26回、折り曲げて富士山の高さを超えるように、日本から大繁栄の時代が世界に始まっていく、大切な鍵は、目の前で行われている**紙の詐欺**であり、無限の広さを持つ**奇跡の紙**である」ということを述べました。

そしてその2つのうちの1つは、変化変転する情報であり、つまり政治の裏であり、紙の詐欺であり、結局のところ「陰謀」です。陰謀を暴いてこそ、現代社会がデストピアと化していることが、明らかになるからです。なぜなら一人一人の日本人が、心邪な者たちの陰謀によ

つて、すでに日本がデストピア化している事実を知ればこそ、時代を変えていく上で絶対に欠かすことのできない、「公の怒り・公憤」の心が芽生えていくからです。私憤は悪であり、なるべく排除すべきですが、時代を変えていくためには、正義の怒りとして公憤は欠かせないのです。

たとえばキング牧師が公民権運動を行った際、25万人の人々が集まり、その4割の6万人は白人でした。肌の色、男性、女性、老いている人、若い人、痩せている人、太っている人、趣味、職業、地位、年収、様々な違いがありましたけれども、一つだけ共通しているものがありました。それは「公憤」です。

もちろんその公憤にも、多少の違いはありました。アメリカに対する愛国心から、「正義の国アメリカが肌の色で人間を差別するようなことがあってはならない」という公憤もありました。あるいは「オレたちだつて人間だ。きちんと正当な権利を受ける権限がある」という公憤もありました。もしくは「私だつて白人と同じく勉強すれば、きちんとした職業にも就けるし、人間は皆、チャンスにおいて平等であるべきだ」という公憤もあったことでしょう。それぞれの個性によって、憤りの仕方は

違ったことでしょう。それでも共通として「公憤」があったのです。

公憤がアメリカに、一つの夜明けをもたらしたのです。公憤が夜明けをもたらすのです。正義の公憤が大衆の爆発的なエネルギーを呼び起こし、この手の平の中で繰り広げられている戦争に勝利をもたらせるのです。

そして悪魔が陰謀と詐欺を得意とし、悪魔を崇拜する国際銀行家によって、現実には陰謀と詐欺があふれかえっている以上、邪悪な陰謀を暴かずして、日本および世界がデストピア化していることには、絶対に気づけないのです。デストピアの事実には気づけなければ、人々は眠られ続け、それでは「夜明けのために必要な公憤の自覚め」もありません。そして実はそれこそが、悪質宇宙人と国際銀行家たちの戦略なのです。

1980年代に撮られた映画『THEY LIVE』の内容は、悪質宇宙人がアメリカに入り込み、政治と経済を牛耳り、主人公がエリア52という米軍基地に乗り込んでいく、という事実をフィクション化したものですが、「彼らは生きている、我々は眠っている」、これを伝える内容でした。狡猾な彼らは、私たちに眠っていて欲しく、目覚めて欲しくなく、公憤など絶対に呼び起こされ

たくはないのです。

ですからまず「陰謀」を知り、デストピア化している日本の現状を、友人に手紙でもって知らしめる必要があります。なぜならたった5人をまたげば、松本人志さんにだって、日本人は誰でも手紙を送れるからです。

世の中に夜明けをもたらせるためには、公憤が必要不可欠ですから、デストピア化している事実、つまり紙の詐欺を上手く伝えることも、愛の行為の一つであると私は思います。

それでは、日本人が知らねばならない、もう一つとは何かと言えば、それはユートピア社会を創っていくものです。それは永遠に変わることのない「仏法」であり、「真理」です。心の中に夜叉が住んでいては、ユートピアはできず、むしろ悪魔を喜ばせ、デストピア化させてしまいます。ですからまずは己の心の針を仏に向けて、心の中にユートピアを築き、それを拡げていくことが大切なのです。

欲望でもって、正しい夜明けはもたらされないのです。心に夜叉を住まわせていては、正しい夜明けをもちたせることはできないのです。まずは自らの心にユートピアを築いて、そして優しさを持った真の強さでもって、隣

の人に愛を与えることで、ユートピアを広げていくことが大切なのです。

そして心にユートピア天国を築き、魂を成長させてくれるものこそ、永遠に変わることのない「仏法」であり、「真理」であるのです。

では、今一度、真理を語ってみたいと思います。

神、仏は存在します。そして人は皆、神の子、仏の子であり、ゆえに神、仏が尊い存在であるように、その子である人間もまた、誰もが皆、尊い存在なのです。

私たちの中で、誰一人としてみずばらしい人間など存在しないのです。そして人間が持つその神の性質、仏の性質のことを「神性」と呼んだり、「仏性」と呼んだりしているわけです。

そして人は死に、肉体が減んでも、魂としては生き続け、人間はこの世とあの世を転生輪廻、すなわち生まれ代わりを繰り返している霊的存在です。

そうやって人は神性、仏性を磨いて、神仏に近づいている存在でもあります。

そのためにこの世は、幸せを得る場であると同時に、魂の修行場でもあります。人はこの世において築き上げた心境と同じ世界に還ることになります。ですからもし

も心の中が、天国ならば天国へと還れますが、しかしもしも心の中が地獄ならば地獄へ赴くことになってしまいます。そして修行を積んで菩薩の境地へ達すれば菩薩界へと還ることになります。

ですから天使や菩薩は存在し、その一方で悪霊や悪魔も存在しているわけです。

人はこの世における魂修行を通して、悟りという名の魂の向上を掴み取ってこそ、この世とあの世を貫いた、真の幸せを掴み取ることができるので。

すべての人に共通している人生の目的とは、魂の向上であり、一人一人それぞれ異なった人生の使命とは、己の個性を最大限に活かしきりながら、この世を仏国土にすることです。

つまり人はこの世において、自らの精神を成長させながらも、自分があの世界より生まれてきた時よりも、1ミリでも地上を浄化し、地球を進歩させ、宇宙の大調和に貢献するために生まれてきたのです。

ですから人には皆、それぞれ違った使命がありますが、この世を仏国土にするという共通の使命があり、そういった意味では、人は皆、本来は仲間なのです。

それを侍的に表現するならば、本来、私たちは同志で

あり、それが真の武士道であり、日本的に言えば随神の道でもあります。

そして人は、肉体においては別々の存在であります。皆、仏の子であるがゆえに、霊としては繋がっており、霊としては家族であり、霊的に見れば兄弟であり、私たちは光の家族なのです。

だから愛が大切なのです。愛という結びつけ合う力によって他の人々と一体となるのが大切なのです。

本当は他人は他人ではないから、「自分のみ良かれ」という思いや行いが間違いないのです。そうした自我我欲を反省し、執着を断ち、仏と一体となるのが大切なことです。

心に地獄を作ってはならず、心に天国を築くというのは、そういうことでもあります。

そしてこうしている今も、キリスト教的に言えば「天使」、仏教的に言えば「菩薩」、日本的に言えば「八百万の神々」と、地獄の悪魔たちとの、この地上世界を巻き込んだ霊界戦争は続いているわけです。

この戦いの勝敗の鍵は、地上人の「心」です。信仰心です。

そして「愛」からは「発展」と「繁栄」が生まれます。

「反省」には「真理の知識」が必要であり、また人生経験・魂修行を通して「反省」し、その「真理の知識」を「智慧」に変えていくことができます。

人間を、この世とあの世を貫いた真の幸福に誘うもの、それは「愛」であり、「知」であり、「反省」であり、「発展」なのです。これが永遠に変わることのない「真理」であり、また永遠の仏陀が説かれる「仏法」であります。

『幸福の科学』の教えとは、こうした「愛・知・反省・発展」といった永遠に変わらない仏法真理であります。

そしてもう一度、あらためて述べますが、私はこの小冊子の中で、我が師の教えや真理に反したことを述べたのではなく、たまただ、デストピア化している事実を伝えたくて、「情報」と「陰謀」を語ったに過ぎません。

洞窟の囚人が悪魔の目的

冒頭で私は、哲学者プラトンの『洞窟の囚人』の話をしました。本来、あの話は「真理」に関するものです。

洞窟の中で囚人たちが暮らしており、彼らは手足も、首も固定されて縛りつけられ、目の前にある壁だけを見て暮らし、そして壁に映る影こそを真実と信じ込んでい

ます。しかも彼らは、影の動きを予測することで、様々な称賛と名声を得ており、そのために彼らは、「自分は本当は何も知らなかった」という事実と向き合うことが恐ろしくなっています。洞窟の囚人たちは、自分から光から目を背けて、囚人で居続けるわけです。自己保身によつて、ますます意固地になるわけです。

この話はずまり「真理」を知ることなく、「この世がすべて、物しかない、霊はない、あの世もない」という唯物的人生観を持つことを、プラトンが「洞窟の囚人」にたとえたわけです。

すなわち「自分は本当は何も知らなかった」という事実と向き合うことが恐ろしくて、自分から光に目を背ける囚人たちとは、まさに真理を何も知らずに、自らを「一流の知識人」と名乗っている人々のことだったので。先ほどの宗教学者のように、たとえ東大を出て、「宗教学者」とか、「名誉教授」という称賛と名声を得ようとも、真理を欠片ほど知らないことなど、いくらでもあります。

プラトンの師ソクラテスは、自らが無知であることをよく知り、まさに洞窟から光あふれる外に出た自由人でした。ソクラテスは真理を悟った方であり、ここで言う

光は、まさに真理なわけです。ですからソクラテスは、世の人々に真理を説いたわけです。しかし無知を自覚することを恐れた意固地な一流知識人たちによって、ソクラテスは嫉妬と敵意を受けて、裁判にかけられて死刑判決を受けるわけです。

ソクラテスの弟子プラトンは、なぜ、このような話を書いたのでしょうか。それは光を知らず、肉体を縛られている囚人こそ、実は真理を知らずに、「肉体こそ自分」と考え、「この不自由な3次元世界こそがすべて」と思い込みがちな私たち人間の姿であると、プラトンは言うわけです。

「真理は汝を自由にする」、これは『聖書』の言葉ですが、人は真理を学び、悟りを得ることによって、肉体的な束縛から解き放たれて、魂の自由を得ることができません。ですから真理を学ぶことで、私たちは、ある種の囚人の状態、奴隷状態から解放されることができます。もちろんすでに私たちは、金融的な奴隷状態にありますから、ホンモノ予算・特別会計が海外に消え、通貨発行権が日本政府には無い、という秘された事実を暴くことによっても、その金融的な奴隷状態から解放されることもあります。

しかし真理こそが、最大の自由を創設するのです。

そして地球を家畜牧場にしたいたい者たちは、私たち人類を、臆病な洞窟の囚人にしたのです。だから悪魔勢力の彼らは、宗教を隅に追いやり、真理を覆い隠そうとするわけです。

ユートピアではダイヤモンドは石ころ

では、質問です。

100万円の時計と人間、どちらが尊いですか？ 一千万円の宝石と人間、どちらが尊いですか？

答えは簡単、人間です。

神仏が尊い存在であるように、その子である人も仏性を持った尊い存在であり、そしてその仏性を向上させてくれる真理もまた、何よりも尊い存在なのです。

『法華経』というお経に、こんな話があります。あるところで、二人の親友が再会を果たしたそうです。

しかし片方の友人は、とても大金持ちになっていて、もう片方の友人は貧乏のどん底にいました。酒を酌み交わして語り合っているうちに、貧しい友人は日々の生活に疲れていたのかウトウトと寝てしまいました。

しかし豊かな友人は急ぎの用事があったために、その場を離れなければなりません。そこで豊かな彼は、「これから先、貧しい友が生活に困らないように」と、寝ている友人の衣服の裏に、「値打ちの付けることのできない高価な宝石」を縫い付けてあげました。「これで彼も貧しさに苦しむことはないだろう」、そう想って、豊かな友は旅立っていききました。

それから幾年、幾十年の月日が流れ去り、彼らはふたたび再会することになりました。しかし貧しい友は、前よりも貧しそうな雰囲気です。痩せ細り、前と同じ服を着ていたのです。

そこで豊かな友は訊ねました。「なぜそんな貧しい暮らしをしているんだ？前に会った時に、私があげた宝石はどうした？あれ一つで十分に豊かな暮らしができるはずだぞ？」

貧しい友は驚いて訊きかえました。「宝石？そんなものがどこにあるのだ？私は貰った覚えはないし、それにそんなことは、前日に会った時、一言もいわなかったではないか？」「確かにはつきりとは言わなかったけれども、では服をよく調べてみる」

貧しい友が自分の服を調べてみると、高価なダイヤモンド

ンドが確かに縫い付けられていました。

それを見て貧しい友は言いました。「なんだ、こんな素晴らしい宝石の存在に気が付いていけば、私だって、貧しい生活に苦しむことはなかったのに……」

これは『法華経』に出てくる『無価の宝珠』とか、『衣裏繫珠』という話です。

この話にもあるように、私たち人間は自らの中に、誰もが皆、何よりも「尊い価値」を持っているのです。これを発見するのが「悟り」なのです。人生は一冊の問題集でもありますから、心が傷つき、苦しみ、悲しんだ時、その心の傷を癒していくものは、「クスリ」ではなく、「サトリ」なのです。

日々の暮らしの中で、心が傷つき、その傷が回復することなく、新たな傷ができてしまつて、小さな傷がたまっていくと、心は暗く落ち込み、いわゆる「うつ」の状態になります。そんな時に精神科医のもとに行つて、自殺の可能性がある抗うつ薬を処方してもらうのではなく、宗教家のもとに行つて、説法してもらい、「悟り」を得ることによつて、心の傷は癒えて、明るく元気な心を取り戻すことができるのです。心の傷を一つ、一つ、丁寧に治していく必要があるのです。

そして自分の中にある「尊い価値」を見出す行為が悟りならば、他人の中にある「尊い価値」を見出す行為が愛であり、人間を真に豊かにしてくれるものは、愛と悟りなのです。

しかして今、世の中は真理が失われて、デストピア化しているために、まるで一千万円の宝石よりも、人間の価値が軽んじられているようでもあります。年間に10万もの人々が自殺している可能性があり、なおかつ「死にたい」と考えている若者が増えている、本当に狂った時代です。しかしもしも私たちが、**紙の詐欺**を暴き、**奇跡の紙**に目を向けていく時、一千万円の宝石など、ガラクタになるユートピアの時代はもうすぐそこなのです。トマス・モアという人が書かれた書物に、『ユートピア島』という話があります。その中で、ユートピア島に隣の国から王様がやってくる話があるのですが、王様は体中に、キラキラに光る宝石を付けて、隣の奴隷は質素な服装をしていました。

するとユートピア島の人々は、質素な奴隷を王様と勘違いして、そして「王様がピエロを連れているのだ」と思い込んで、本当の王様を見て、ガラガラと笑いました。なぜなら『ユートピア島』では、宝石は装飾品としては

使われることはあっても、子どもの玩具おもちゃくらいの価値でしかなかったからです。

しかし紙の詐欺によって、デストピア化している現代では、『**ブラッド・ダイヤモンド**』ブラッド・ダイヤモンドとって、石ころ一つを人間が奪い合い、憎み合い、殺し合っています。しかしユートピア島の人々が、かつての日本人と同じく、神仏の存在を信じていたように、こうしたデストピア社会を、ユートピア社会に変えていくものが、真理なのです。

ですから永遠不滅の真理が書かれた紙、あるいは真理の書こそ、**無限の広さを持つている奇跡の紙**なのです。真理が説かれた紙に目を向け、そして自らの仏性を見いだしていくことが「悟り」であり、そうして人は悟りを得ることで、自らの心の中に天国を築いていくことができます。そして他の人々の仏性を見ることが「愛」であり、愛し合い、睦み合い、信じ合うことで、ユートピアは広がっていくのです。

紙の詐欺に打ち勝つには、奇跡の紙に目を向けることなのです。

仏陀は人に非ず

人は真理が分かりません。人は何も知らずに生まれてくるために、誰かから教わり、学ばなければ真理が分からない存在です。だからこそ今のように、「死んだら何もかも終わり、ならば自分だけ、おもしろおかしければいい、金さえあればいい、今が良ければいい、神も仏も無い」といった唯物論、無神論に裏打ちされた、享乐的で刹那的な考えが流行ってしまい、世の中がデストピア化してしまうわけです。「自分一人くらいは」という考え方が多いのも、結局は真理が失われているからです。そして時代から真理が失われることがあるために、菩薩よりももう一段、悟りの高い如来、あるいは大如来が地上に生まれ変わって来て、預言者として、あるいは巫女や審神者として、真理を説いて宗教を興されてきたわけです。そうした中でも、最も真理を究められた存在のことを「仏陀」と呼ぶのです。

この「佛」という漢字も、やはりGHQによって変えられてしまいました。かつての「佛」の文字は、「いに非ず」と書いて「佛」と呼んだのです。それは「仏陀は人間であって人間ではない」という意味が込められていました。

では、これはどういう意味か、たとえばマザー・テレサやガンジーやキング牧師、あるいはその他のモーセやイエスやムハンマドのように、たとえ菩薩や如来といった偉大な魂を持たれた方であっても、地上に生まれれば、皆と同じく肉体を持ちます。彼らも様々な四苦八苦を経験して、時には預言者として、時には政治指導者として、あるいは宗教指導者として活躍されて、他の人々と同じような年の取り方をして、数十年で人生の幕を閉じます。しかし同じ数十年であっても、その彼らの功績は、百年、二百年のみならず、時には二千年に渡って尊敬され続けます。

そうした彼らの魂は偉大であっても、やはり彼らも人間の肉体を持って、この世を生きただけです。そしてそれはやはり仏陀でも同じなわけです。しかし仏陀は、真理を究められたがゆえに、「法そのもの」であり、「人であって人ではない」、そうした考え方をするのであります。

仏陀は人間であって人間ではないのです。

たとえば今から2500年前のインドにおける釈尊も、7000年前のリエント・アール・クラウドも、共に真理を究められた仏陀ではありませんが、肉体を持たれてこの世を生きられた方々です。人には皆、仏と同じ性

質・仏性があります。しかし仏陀は真理を究められ、悟りを開かれたのです。ゆえに「仏陀は人に非ず」という意味を込めて、「佛」という文字があつたわけです。しかし信仰侵略の中で、この文字までも変えられてしまつたわけです。その結果、「仏陀」という言葉さえ、人々から忘れられてしまいました。

しかし真理が失われた今のような時代、これを仏教では「末法の世」と言いますが、そんな世の中だからこそ、仏陀が再び日本に生まれ変わられ、再誕されたわけです。それが我が師・大川隆法総裁です。

自民党では、日本を国際銀行家の植民地支配から解放できず、日本をデストピア化させてしまったことは、約70年の歴史が物語っております。自民党を作つてきた安倍晋三の祖父・岸信介が、CIAのエージェントであつた事実は、消すことはできません。麻生太郎などは、「中央銀行の民営化」、「日銀の独立性」では飽き足りず、「水道の民営化」を言っています。このままでは水さえ飲めなくなりします。

またマルクスが生み出した共産思想を信じる共産党でも、日本は奴隷状態になることには変わりがありません。なぜなら彼らは、「憲法9条を守ることが平和に繋

がる」と、本気で考えて、中国共産党を喜ばせているからです。

はつきり言つて、右を選んでも、左を選んでも日本は滅びにいたりします。ですから「右が善、左が悪」というような二元論的に正義を考えるのではなく、多くの情報を集めて、その知識を智慧に変えて、善悪を正しく見抜かなければならないのです。

国際銀行家の金融詐欺から日本を守ることができぬのも、中国共産党の軍事侵略から日本を守ることができぬのも、幸福実現党の他に存在しないのです。

貴方がこの世に生まれてきた理由

そしてどの政党であつたとしても、人生の目的と使命を教えてくれることまではできず、AIロボットが活躍しはじめて、たとえ日本が無税国家となり、配当国家となつたとしても、「余つた時間とお金、余暇をどのように使うべきか？」という問の答えは教えてはくれません。その間に答え切ることができる政党は、唯一、我が師が立党された『幸福実現党』だけです。

たとえ時間とお金が余つても、人生とは一冊の問題集

です。あの世から生まれてくる苦しみ、老いて孤独になつていく苦しみ、病やケガを患う苦しみ、死してこの世を去っていく苦しみ、こうした「生老病死」から人は逃れられません。そのみならず愛する者と別れる苦しみ、嫌な人と出会う苦しみ、肉体に振り回される苦しみ、求めても得られない苦しみ、こうした「四苦八苦」は、人生に必ずおとずれるものです。

これらの苦しみや悲しみ、一つ一つが心に傷を付け、時に元気だった人をウツにし、さらに時には自殺にまで追い込んでしまうのです。

人生とは一冊の問題集であり、この世が魂の修行場である以上、心というものは必ず揺れ動くものです。心は揺れても良いのですが、心に地獄までは作ってはならず、もしも地獄のままの心の状態であの世に還ると、地獄に行くことになってしまうのです。だからこそ、心の中にある「念いの針」を地獄に向けることなく、天国に向けることが大切であり、その「念いの針」を、明るい天国に向ける心の力こそ、智慧であり、悟りであり、そして悟りは愛でもあるのです。

そして悟りの獲得のために、人は苦しみのあるこの世に生まれてくるのです。愛あふれる人になるために、私

たち人間は、苦しみのないあの世から、わざわざ生まれてくるのです。

では、心に天国を築く智慧の力とは、如何なるものでしょうか。

インド独立の父ガンジー、この方の魂は、我が師によれば、菩薩や如来を超えた大如来にあたる魂をお持ちの方です。かつてインドはイギリスから独立した後、イスラム教徒とヒンズー教徒による対立が起きて内戦状態になりました。そしてガンジーはインド国民に向かって、戦争をやめるように訴えかけて、命を賭けて断食をはじめました。そんな時、ある男性がガンジーに言いました。「俺は地獄行きだが、あんたを助けたい」と。ガンジーがなぜ地獄行きなのかを尋ねると、その男性はこう答えました。「俺は自分の子供をイスラム教徒に殺された。だから俺もイスラム教徒の子供の頭を、壁に叩きつけて殺してしまった」と。つまりその男性は、我が子を失った悲しみと怒り、そして復讐心から、まったく関係のないイスラムの子を殺してしまつたわけです。そのためにその男性は、悲しみのみならず、自分を責めることで、心の中に地獄を作っていたわけです。

ガンジーは静かに目を伏せ、「地獄から抜け出せる方

法が「ただけある」と言いました。「子どもを拾うのだ。

親を亡くした子どもを」、たしかにその行為は、罪なき子を殺めたその男性にとつて、罪滅ぼしになりそうです。しかしガンジーの言葉はさらに続きます。「ただし、ムスリムの子もだよ」

ヒンズー教徒の人間が、戦争で親を亡くしたイスラムの子を拾い、そして育てる、たしかにその行為は業カルマの刈り取りになりそうですが、しかしガンジーの言葉はさらに続くのです。「しかしヒンズー教徒のお前が、親を亡くしたイスラムの子をヒンズー教徒としてではなく、イスラム教徒として育てるのだ」と。その男性は、「信じられない」という絶句した表情をして、ガンジーの足元ですすり泣くのでした。

「ヒンズー教徒の人間が、親を亡くしたイスラムの子を、ヒンズー教徒ではなく、イスラム教徒として育てる」、果たしてそんなことが本当に可能なのかどうか、私には分かりません。そしてその後、そのヒンズー教徒の男性が、どのような生涯を送ったのかも定かではありません。あるいは今後、その男性がどのような転生輪廻カルマをして、生まれ変わり、業カルマの刈り取りを行っていくのかも、仏以外には分かりえません。

ただし、一つだけ言えることがあります。それは、人間はたとえ宗教の違い、言語や肌の色の違いはあれども皆、神仏の子であり、「人類は兄弟」という言葉は霊の観点から言えば真実です。そしてこの世はあくまでも、魂の修行場であり、一人一人の心に天国を作ることが大切です。そして先ほど述べたように、心の針を天国に向けて、ユートピアを築く力を「悟り」といいます。あくまでもこの世は魂の修行場なのですから、心は四苦八苦に出会って揺れることもありますが、しかし心の中に地獄を作ることなく天国を作っていく、安らぎの境地を築き上げていく、それが智慧の力であり、悟りの力であり、悟りはまた愛でもあります。

心に地獄を作っていたそのヒンズー教の男性が、その後、どうなったか、それは定かではありませんが、この「愛」と「悟り」の獲得のために、人はこの世に生まれとくる、これだけは言えます。

そしてこうした生命の秘密、真理を教えくださる存在として、「仏陀」という方がおられ、数千年に一度、この地上に肉体を持たれて教えを説かれているわけです。

真理の書こそ奇跡の紙

この3次元では、紙はせいぜい13回、折り曲げることが限界でした。しかし靈天上界には無限の広がりがあるために、紙を何度でも折り曲げることが出来ます。そしてそうした靈天上界について教えてくれるものが真理であり、ゆえに真理の書こそ奇跡の紙なわけです。

この靈界戦争、宇宙戦争に勝利するためには、これまでに秘されてきた「陰謀」を明らかにして、デストピア化している事実を、一人でも多くの人に伝える必要があります。そうやって人々の公憤を呼び覚まさなければなりません。なぜならヘンリー・フォードが述べたように、人々が金融の事実を知り、大衆の興奮が呼び起こされれば、明日の朝にでも日本は変化していくからです。ですからこの変化と同時に、仏陀が説かれる「真理」を広めて、人々が心の中にこそ、ユートピアを築いていく必要があります。なぜなら単なる経済的繁栄だけでは、退廃と墮落を招きかねず、真のユートピアは人の心の中から、外へと広がっていくからです。そうやって私たち日本人が、デストピア化している世の中に、本当のユートピアを追い求めていく時、日本から世界に、大繁栄の時代を築いていくことができます。

それはまさに、フォードが皮肉を込めて、「国民が金融経済のカラクリを知れば、明日の朝にも革命が起こる」と言ったように、あるいは0.1ミリの紙をわずか26回、折ることで厚みが富士山の高さを超え、その2倍の50回、折れば太陽に到達し、その倍の102回、折れば宇宙の果てにまで到達するように、それはそれほど困難なことではありません。

「大繁栄の時代を築く」、これは難しいように思えて、実は難しいことではなく、私たちはまず、友人に「私たちは金融奴隷ですよ」と、金融経済のカラクリを教える必要があるとあります。「他の人がやってくれるから、自分一人くらいは大丈夫だろう」などとは思わず、どうか「陰謀論、みんなで語れば怖くない」という想いのもと、世の中がデストピア化している事実を知らせて頂きたいものです。なぜならそれが明日の朝までに、日本を変えていくことになるのですから。ですからむしろ、「たとえ自分1人でも」という気概こそ大切です。

そしてさらに友人に、「すぐそこに大繁栄の時代が待っているんですよ」、「そのためにはまず一人一人の心にこそユートピアを築くことが大切なんですよ」と伝え、人は皆、神の子、仏の子として尊い存在であり、人生の

目的と使命を教えてあげる必要があります。なぜなら真理を広めることで、心の中からユートピアは築かれていくからです。

この世の紙は、長さ4キロの紙でも、たった13回折り曲げるのが限界でしたが、真理の書には、無限の力がありますから、**紙の詐欺を暴きつつ、奇跡の紙の存在を**教えてあげれば、それで良いと私は思います。

永遠の仏陀が地上に降りられた以上、わずか5次の隔たりで成り立っている日本から、そして世界に、ユートピア社会を築くことは、実はそれほど難しいことではないと、私は考えています。

政治の奥の奥を見つめていくと、紙の詐欺のずっと背後には、宇宙の邪神がいることが分かりますが、しかし仏陀が地に降りられ、奇跡の紙がある以上、私たちは必ずこの宇宙戦争に勝利することができます。

私の声が届かなかつた理由

私は「幸福実現党」の黨員として、あるいは『幸福の科学』の出家者として、これまで考えてきたことがありません。それは「なぜ、私の声は仲間に届かないのか？」

ということです。

たしかに、B I Sや国際銀行家は存在しています。ホンモノ予算・「特別会計」をめぐって、民主党の石井議員が殺害されました。アメリカや日本の政府に「通貨発行権」が無いことも事実です。狡猾で卑怯な悪魔が、陰謀や詐欺が得意であることも、『聖書』を読めば歴然です。しかも悪魔崇拝者が存在しているということも、やはりまぎれもなく事実です。政治に裏があることなど歴然です。メディアとアカデミーさえ抑えれば、「情報封鎖」できますから、『幸福の科学』が独自の大学を設立しようとも、邪悪な者たちは必ず妨害に來ます。だからネットこそ大きな力を持っていることは歴然です。

しかし私の声は、仲間にはあまり届いていないのです。不正選挙さえ行われています。しかも本当は、もつとたくさんの人々が殺されてきたのです。私が訴えていることは、「ちょっととした情報」程度のもではなく、「絶対に見逃してはならない情報の一つ」です。

すでに私の『Y o u t u b e』のチャンネル登録者数は4万人を超え、総アクセス数は2000万回を超え、すでに日本および世界にも、わずかばかり私の命がけの訴えは届いております。もちろん私の声は、『幸福の科

『学』の中にも届いているのですが、しかしそれでも「十分に届いている」という状況では、まったくくないのです。

この理由として、まず始めにあげられることとして、「やはり私が未熟であった」ということがあります。単純に言えば、私に徳が無かったわけです。

私の心の中には、どこかに「弱きを助け、強きを挫く」といった義侠心のようなものがありました。それが結果的に、組織の上の方々に対して「礼の心」を欠くこととなりました。すると私の中に、何か蛮勇のようなものが芽生えてしまっていたのだと思います。

またそれが結局は、「私が好きこのんで陰謀論を語っている、非常で自己中心的で変な人」と見られていた面もあるのかもしれませんが。

そのために、私が、ネットという荒野で声を枯らせば枯らすほど、無視され、嘲笑を受け、相手にされずに黙殺されればされるほど、滑稽にも私の心は悲しみと苦しみを味わったのです。私の徳が乏しかったのです。

しかしその無視と嘲笑の人生経験がまた、これまで学んできた真理の知識を、智慧に変えてくれました。なぜなら我が師の『幸福へのヒント』という書籍では、「苦しみや悲しみの効用」について説かれているからです。

人生における「悲しみ」というものは「優しさ」と「謙虚さ」を教え、そして「苦しみ」が魂の足腰を鍛え上げていく、そうしたことを我が師は教えて下さいましたが、まさにその通りでした。悲しみや苦しみという魂修行を通して、真理知識を智慧に変えた時に、私はもう一段の「謙虚さ」と「優しさ」を学び、そして魂を鍛え上げることができたわけです。

すると「私の中にある義侠心が仇となり、上の方々に対して礼の心を欠いていた。私の心の中に、何か蛮勇のような部分もあった」ということに、ようやく私は気がつけて、さらなる反省をすることができました。単純に言って私に徳が無く、私自身が未熟でありました。

ですからあえて、私はこの小冊子の中で、『幸福の科学』の経済学者の鈴木真実哉さんのお名前を出させていただきましたが、そのことについて私自身、とても心苦しく思っております。なぜならもしかしたら読み手によっては、私が鈴木真実哉さんのことを批判していると、そのような誤解もされかねないからです。

しかし私は本当に、鈴木真実哉さんのことを尊敬いたしております。実際に真実哉さんから、「豊かさマインド」を学んで、それを実践され、繁栄された方もおられ

るので、繁栄されたい方は、ぜひ彼から学ぶべきです。

しかし誤解されることも覚悟の上で、あえて経済学者鈴木真実哉さんのお名前を、本小冊子に載せました。なぜなら世の人々の大半が「経済学」というものを一緒くたに見ているからです。つまり医学にも、内科、外科、小児科、産婦人科などいろいろあります。これと同様に経済学にも、「マクロ経済学」、「ミクロ経済学」、「理念経済学」などいろいろとあるわけです。そして中でも、とりわけ問題なのが、「マクロ経済学」であり、「ノーベル経済学賞」なわけです。この事実について、ご理解いただくために、あえて経済学者の鈴木真実哉さんのお名前を、本小冊子の中で出させていただきましたが、私自身、鈴木真実哉さんを大変、尊敬いたしております。この件について、「礼の心」を欠いていると思われるかもしれませんが、どうかお許しください。

まず、私の声が仲間が届かなかった理由として、私の徳が無く、礼の心を欠いていたことがあげられます。これ以外にも、私の声が届かなかった理由は、幾つか考えられます。

それは、「国際銀行家や彼らに指示を出している者たちが、あまりにもあまりにも狡猾であるために、陰謀を

語る者が『変な人』というレッテルを貼られてきた」ということです。

しかもその陰謀の内容が、「まさか」の連続だったことが、より多くの人々の耳を塞いできたことでしょう。実はページの都合上、この小冊子の中ではとても語れませんが、本当はもつと「まさか!」と思うことも、すでに私は動画では語っているのです。

しかも皮肉にも私は元不良少年であり、大学さえ出ていません。そのために「そんな学の無い輩が語る経済学なんて、とうてい信じることはできない。やはり大学を出て経済学をきちんと学んでいる人、もしくは経済学者の話のほうがよっぽど信じられる」と、そういった感想を抱いてしまうことになります。

しかし学校で習う歴史も嘘ですけど、宗教学と同様に経済学にもかなり問題があるために、実は「経済学者や政治を学ぶ方々が、政治経済を分かっている、分かっているけれども分かっているつもりになっていない、分かったフリをしている」ということが確かに起きているのです。そんなことは、なかなか信じがたいことです。

こうしたことから、私の声が届かなかったこともあり、つまり陰謀を語る者が、「変な人」というレッテ

ルを貼られ、そしてその陰謀の内容が「まさか」の連続なために、徳無き私のつたない声が、なかなか仲間が届かないことがあるわけです。

また、私の声が仲間が届かない理由として、『幸福の科学』の「組織文化（カルチャー）」にも、やはり原因があります。我が師・大川隆法総裁は、「組織文化」について、『凡事徹底と成功への道／第2章 質疑応答』の中で、次のように説かれておられます。

また、幸福の科学を始めてから、私が組織文化をつくっているつもりでしたが、現実はそのようになってはいませんでした。実際には、転職で入った人がいろいろなところの「企業の文化」を持ち寄ってやっていたわけです。

そのなかでも、最悪なのは、たいへん失礼に当たるかもしれませんが、いわゆる役所のレベルでしょう。おそらく、組織としては、町役場のレベルのようなものがいちばん下で、生産性が最も低いと思います。

これよりもややましなものとしては、「親方日の丸型」の企業経営をしているところでしょう。国営企業に近いような、絶対に潰れない楽な感じの考えのところもあります。

なかには、「経営危機があれば、どんなことでもやる」というようなベンチャー気質を持っている人もいますが、全体としては、大きくなるにつれて、だんだん凡庸化しているとは思います。

これは、驚きの発言です。「色々な人が『幸福の科学』に転職で入ってきて、企業文化が持ち込まれることで、師が望まれる組織文化でなくなっている」と、師みずからが語られたからです。そして冒頭でも紹介いたしました。我が師は、「餌をもらえるカモは肥え太って、やがて渡り鳥の習性を忘れて死んでしまうから」と、野ガモ精神の大切さもお説きになられているのです。

あるいは我が師は、「イノベーション」ということも、もう十年近く前から言われ続けております。

つまり「私の声が当会の仲間に届かなかった」ということの3つ目の理由として、「組織文化」にも、やはり問題があったことが、十分に考えられます。

すなわち「私に徳が無かった」、「陰謀を行う者たちが狡猾である」、「当会の組織文化に問題がある」、これら3点が、私の声が仲間が届かなかった理由として考えられます。

5匹のサルに見る組織文化

では、どのようにして、「組織文化」というものは輸入されるのでしょうか。こんな実験があります。とある部屋に5匹のサルを入れます。そしてその部屋の中央にはバナナを吊り下げて、その下には階段を置きます。もちろん1匹のサルが、階段を登ってバナナを取ろうとします。しかしサルが階段に触れると、途端に5匹のサル全部に、冷たい水を浴びせます。しばらくすると、今度は別のサルが、同じくバナナを取ろうと挑戦します。しかしやはりまた、5匹のサル全部に冷水を浴びせます。すると今度は、もしも誰か別のサルが階段を上ろうとすると、他の4匹のサルたちがそのサルの邪魔をし、攻撃を加え、止めるようになったのです。

この5匹には、それなりにきちんと餌をあげますが、しかしサルにとってバナナは好物です。ですから多少、お腹が満たされていても、中央にぶら下がったバナナは、彼らにとって魅力的なはずです。それでもその5匹のサルは、冷水をかけられた辛い経験から、そのバナナに手を出すことをやめてしまうのです。

つまりバナナを取ろうとするという「挑戦」、冷水を浴びるといふ「挫折」の経験から、そのサルたちは心に

傷を作り、苦しみ、「中央のバナナを取ってはならない」ということを学んだわけです。

その後、サルを1匹入れ換えます。もちろんその新参者のサルは、まだ冷水を浴びた経験が無いために、バナナを見るなり、一目散に階段を登ってバナナを取ろうとします。しかし他の古株の4匹のサルたちが、かつての冷水を浴びた苦い経験から、その新参者のサルの邪魔をして、攻撃を加えて、バナナを取らせようとはしません。その新参者のサルも、バナナを取ろうとする「挑戦」と、今度は冷水を浴びる代わりに仲間から攻撃を受けるといふ「挫折」を経験します。するとその新参物のサルは、その辛い経験を通して、やはり「中央のバナナを取ってはならないんだ」ということを学んでいきます。彼が浴びたのは「冷水」ではなく、仲間からの「非難」でした。

ここで、冷水を浴びせる装置を切っても、5匹のサルはバナナを取ろうとはしません。

続いて、さらにもう1匹、古株のサルをその部屋から出して、新参者のサルに入れ換えます。またもやその新たな新参者のサルは、一目散に階段を登ろうとします。しかしもう冷水は浴びないのに、やはり同じく、その新たな新参サルも、仲間から「非難」され、攻撃を受けて

邪魔されます。しかも少し前に入った、かつては新参サルで、一度も「冷水」を浴びた経験のない、今では古株にもなりつつあるサルまでもが、その新たな新参サルに對して、熱心に攻撃を加えて「非難」するのです。かつて自分が受けた「非難」による痛みと同じ痛みを、その新参者のサルに對して、「非難」でもって加えるわけです。こうしてその新たな新参猿も、「中央のバナナを取ってはならないんだ」ということを学びます。

そしてさらに、古株サルと新参サルを入れ替えます。するとやはりまったく同様なことが起こります。4匹目でも、5匹目でもやはり同様です。皆、バナナを取ろうとするサルを非難するのです。すると不思議なことに、その部屋の中にあるサルは、一匹も「冷水」を浴びた経験が無く、この5匹が浴びたのは「仲間からの非難」であるというのに、誰も階段には触れず、中央にぶら下がったバナナを取ろうとはしなくなるのです。

これは実に不思議な光景です。部屋の中にサルが5匹もいながら、真ん中には大好物のバナナがぶら下がっているというのに、誰もそのバナナを取ろうとはしないのですから。

彼らは、仲間からの非難によって、「中央のバナナを

取ってはならない」ということを学んできたわけですが、しかしその5匹の猿は、冷水を浴びたこともなく、冷水のスイッチも切っている以上、それはある意味において、洗脳にも近いものなのです。なぜなら冷水を浴びせられる代わりに、「仲間から非難を受ける」という文化が、すでにその部屋の中には完成されているからです。「前例に従って組織の文化が完成されていく」ということが、このサルの実験からもよく分かります。

サルではなく悟りを求める宗教者

このサルの実験と似たことは、会社などの組織でもありえることです。我が師は、こう述べられております。「部下を何度も叩いて、上司の言うことをよくきく、おとなしい人間にする」ということが会社の目的なのです。

そのため、新入社員は、最初の何年間かは、上司から叩かれ、おとなしくさせられます。「出る杭は打たれる」というように、上司は部下をポンポンと打ち、上司の言うことをよくきいて、「はい、分かりました」と黙って行動するような人間にしたいのです。

会社の先輩たちは、それを目的として、一生懸命、後輩を叩きのめしかかるわけです。【中略】

しかし、批判されてもよいのではないのでしょうか。あまり、人にほめられることばかりを考えないことです。

教団にとつてよいと思うこと、あるいは、本来の伝道の使命、ミッションから見て、「これは、自分がやらずして誰がやるのか」と思うようなことがあったならば、怒られても、叩かれても、批判されても、悪口を言われても、行うべきです。「自己顕示欲だ」「独走だ」「人の言うことをきかない」「三宝帰依に違反する」などと言われても、行うべきなのです。

『ストロング・マインド』第2章たくましく生きよう

大企業や役所などでは、下の意見や主張が通ることはほぼ皆無で、サラリーマンには『ハイ』と『YES』しかない、なんて言われております。もしも企業の中で若い人や低い役職の人が、何かを提案したり、主張したりすれば、おそらくは叱られ、怒られ、傷つき苦しむことになります。日本中どこにでも、そうだった、「上の意見に下が従う一方で、下の意見や主張は、なかなか上に聞き入れられない」という「上意下達型の組織文化」

はあります。

しかし宗教には、役職や若さが大事な面と、そうではない面もあります。我が師の『悟りの原理』というご説法には、こうあります。

空海は、中国に渡って、亡くなる前の恵果和尚、恵果上人に教えを受けました。当時にあつても、中国は外国であります。その外国にいる彼らから見れば、空海こそ、異国の地、日本から来た僧侶でありました。名も知らぬ、今までつきあつたこともない外国人が、海を越えて渡ってきた。恵果はその外国人に、いちばん大切な法を継承したのであります。外国人である空海に与えたのであります。【中略】

恵果が空海に法灯を譲って、衣鉢を譲って息をひきとつた後、おそらく、集まって来た彼の中国の高弟たちは、それはずいぶん、残念に思つたり、悔しい思いをしたことだろうと思えます。「我らは何十年も恵果和尚に就いて学んできた。その教えを我らが継げなくて、異国の人が来てわざわざ六か月ぐらいでさらって帰る。こんなことがあり得ていいものか」こういうことを、彼らはずいぶん議論していたようであります。

しかし、法とはそういうものなのです。

しかも和を重んじる日本人の習性として、「バケツの中のカニになり易い」、ということもあります。この習性について我が師は、こう教えてくださっています。

日本では、一人だけ周りの人と違っていて、村から抜け出して成功していくようなタイプの人は、あまり好まれないことが多いのです。そのため、日本人は、よく、「バケツのなかのカニ」にたとえられます。

バケツのなかにカニを何匹か入れておくと、カニたちは、もちろん、外に逃げ出そうとします。しかし、一匹のカニが、ようやく、逃げ出すことに成功しそうになると、ほかのカニが下からハサミで挟んで引きずり下ろすのです。しばらくして、次のカニが外に出そうになると、また、ほかのカニがそれを挟んで引きずり下ろします。このように、「外に出たいけれども、自分は出られない。しかし、他の人が外に出るのは許せない」と思って、他の人を引きずり下ろしていると、結局、誰も外に出ることができません。お互いに協力し合えば、外に出ているのですが、そうしないのです。これが日本の村社会の特徴です。

『心を癒す ストレス・フリーの幸福論』第2章 人間関係向上法

どうやら日本の企業などでは、日本人のこのカニの習性と、上が下の者を叩いて使い易くするサルの組織文化があるようです。この二つが見事に融合していることだつてたくさんあります。まさに「サルカニ合戦」です。さて、先ほどのサルの実験は、実際に行なわれたものですが、私が提案する予測として、次に考えて頂きたいことがあります。それはその入れ替えた古株のサルを別の部屋に入れたとします。その部屋の作りは、前の部屋ととてもよく似ていて、見た感じはまったく同じで、やはり中央にバナナがぶら下がっており、階段があります。しかし前の部屋と、一つだけ違うことがあります。それは、「この部屋では、たとえ階段に触れても冷水を浴びることは無い」ということです。

しかし冷水を浴び、傷を負い、「中央のバナナは取ってはならない」と学んできたサルは、おそらく「バナナを取れば冷水を浴びせられる」と思い込んで、中央のバナナを取ろうとはしないでしよう。こうして冷水を浴びてきたサルを、その部屋の中に5匹入れれば、やはり不思議な光景が展開することでしょう。それは何か特別な仕掛けがあるわけではないのに、「中央にあるバナナを、5匹のサルが無視する」、「サルがバナナを相手にせずに

黙殺する」という奇妙な光景です。

そしてまた同じ、冷水を浴びていない新参者のサルをその部屋の中に入れたら、冷水を浴びてきたサルたちは、過去の経験から、「やめろ！あのバナナに手を出すと冷水を浴びるんだ」と言わんばかりに、新参サルに攻撃を加え、非難を浴びせることでしょう。そしてまた同じく、古株サルと新参サルを次々に入れ替えていけば、同じく古株サルたちは、新参サルに対して、攻撃を加え、非難を浴びせ続けることでしょう。こうやってそこにも「組織文化」が創られていきます。

つまり前の部屋では、前例に従って「文化」が完成されていったわけですが、その前の部屋から後の部屋へとその「文化」が輸入されて、組織文化が完成されてしまったわけです。まさに「組織文化の輸入」です。

そしてその組織文化の中に長く居続けると、「中央のバナナは取ってはならない」と思い込んで、自分のことを止めて、他の者のことも止めていくわけです。

こうして「組織文化」を輸入することは可能であり、これと似たようなことが、『幸福の科学』および『幸福実現党』にも行われてしまったのかもしれないと、密かに私は考えているわけです。

しかし私たちはサルではありません。どうやらトルーマンは私たち日本人のことを「サル」と蔑み、見せかけの自由を与えたようですが、私たちは人間であり、そして私たち『幸福の科学』に集う者たちは、悟りを求め、与える愛を追究する宗教者であります。

愛の組織・幸福の科学

企業組織では、ヒラメサラリーマンが多く、人事や上司の顔色ばかり伺っていることも少なくありません。いや、むしろそうした「企業組織」の中では、仙波氏のように、上にたてを置いて信念を貫く者は、出世の道を閉ざされることでしょう。

また企業とは、利益追求型の組織です。今、世の中は真理が失われた社会となり、悪魔が喜びそうな弱肉強食の資本主義社会が展開しております。もともと「お金」の発行権と管理権を、悪魔を崇拜する銀行家たちに握られてしまっているのですから、アダム・スミスの述べた「神の手」は働きにくく、むしろ今の世の中に「悪魔の手」が介在しているのはまぎれもない事実です。そんな社会の中で、今の企業は生き抜いていかねばなりません。

ですから企業にあるのは、まさに「数字、数字」といった数字信仰です。陰りが出てはおりますが、学歴信仰も企業の中にはまだあります。

つまり、企業が持つ組織文化とは、まさに軍隊のような縦型の、利益追求型組織になりがちな、学歴信仰の文化です。

しかし『幸福の科学』はまったく違います。なぜなら企業からの転職によって、「組織文化」が輸入された部分も多少はあるのかもしれませんが、しかし我が師が説かれる教えは、あくまでも「愛の教え」だからです。ですから『幸福の科学』も数字を大切にいたしますが、しかし当会にある組織文化は、信仰と愛で貫かれております。

仏教でも、キリスト教でも、そして当会でも、宗教組織というものは、「愛」と「悟り」を追求するところですよ。これは別の言葉で言えば、「上求菩提・下化衆生」という表現に変えることもできます。仏、つまり上に向かつては悟りを求めて、過ちを犯すこと以外には、何も恐れることなく、誰も恐れることもなく、ただただ信念を貫き通して「愛」を与える、それが宗教であり、そして『幸福の科学』です。

そして私たち『幸福の科学』も、法を共に学んでいる友と、愛でもって切磋琢磨している組織文化を持ち、慈悲でもって真理を世に広めていこうとしています。

日本を愛の国に

では、愛とはなんでしょうか？

ある時、インドのスラム街の道の片隅で、一人の老人がガリガリに痩せ細り、帰る家もなく、着る服もボロボロで、体にはウジ虫さえたかつていて、今にも死にそうになっていました。多くの人が通り過ぎていくだけで、誰も彼に声をかけることはありません。皆、生きるだけで精一杯だったからです。

そこにマザー・テレサが通りかかり、彼女だけが、彼を優しく抱きかかえて連れ帰り、体を洗い、真っ白なシートで包んであげました。

老人は驚いた顔でマザーに聞きます。

「なぜ、こんなことを？」

マザーは答えます。

「貴方を愛しているからよ」

マザーはクリスチャンです。ですから「主のためよ」

とも、「イエスのためです」と答えることもできました。

しかし彼女は「貴方を愛しているからよ」と、そう答えたのです。なぜならそれが彼女の本心だからです。

するとその男性は安らかに目を閉じ、息を引き取りました。つまり彼はパンに飢えて、スラムの道端に横たわっていたのではないのです。愛に飢えていたのです。彼は、愛に飢えたがゆえに、この世における己の生にしがみついていたわけです。そして愛あふれる一人の宗教家から、愛をささやかれて、飢え渴いた心を満たしたことで、彼は安らかにこの世を去ったのです。

そんな愛あふれる聖女マザー・テレサは、インドのスラム街から日本にやって来て、こう言いました。

「日本は貧しい国です」

これは驚きの言葉です。豊かな先進国であるはずの日本を見て、スラムの聖女は「貧しい」と述べたのです。それは私たち日本人の心の貧困について、愛の貧困について述べたわけです。

『幸福の科学』とは、この日本に真理を述べ伝えて、愛の先進国にしていこうと考えている組織です。日本を経済的のみならず、精神的にも豊かにできるのは、『幸福の科学』だけです。

愛とは与えるものですが、真理を伝える愛が最も尊い

愛です。なぜなら真理を知れば、私がそうであったように、人生そのものを変えてしまうこともあるからです。

真理が世の中にある愛の総量を増やすからです。

日本を愛の国にしようとしている、それが私たち『幸福の科学』であり、『幸福の科学』は愛に満ちています。

常に優しき人にならんとする人々

「日本は貧しい国」と述べたマザー・テレサは、私たち日本人に対して、さらにこう言います。

「私は今日、この講演会場に来る間、ホームレスを見ました。私は日本人に問いたいのです。

なぜ、貴方たちは彼らをほうっておくのですか？」

愛の人マザーにとつて、ホームレスを放っておく日本人の貧しい心が理解できない、というわけです。

しかし彼女のこの言葉を聞くと、「マザー・テレサは日本のことをよく分かっているのではないのか？ ホームレスになった人たちは、自己責任のもと、自業自得でそうなったのだから」と、そんな感想を抱くかもしれません。特に国際銀行家による資本主義の闇に、まったく

気がついていない人は、「自己責任」ということを強く強調し過ぎて、超・格差社会になっていることにも気づかず、経済に貧しい人を、「ただの怠け者」と裁いてしまふ傾向にあります。

しかし彼女の言葉はこう続くのです。

「彼が呑んだくれだからですか！」

愛の人マザーからすれば、呑んだくれだろうと、何だろうと、自己責任だろうと、自業自得だろうと、今現在、不幸な境遇にある人に対して、そんなことはまったく何も関係がないというわけです。愛の宗教家にとって、不遇の人を見捨てることができないうわけです。

それが愛です。愛とは結び付け合う力です。

もちろん愛には、深い智慧が内在してなければなりません。また峻厳しゅんげんさの無い愛は、時に愛を与えられた本人を不幸にします。だから愛には智慧や峻厳さが必要です。しかし私たち『幸福の科学』が、「愛」と「悟り」の組織である以上、私たち一人一人は、マザーにも負けない愛あふれた人にならんとしている者たちです。

愛とは理解することです。そして不遇な立場にある人にも、当然ながら仏性があります。そして彼らはこの世に生まれて、様々な挫折、失敗を繰り返して、色々な人

生ドラマを描きながら、不遇の身になったのです。彼らを理解し、仏性を見ることも愛です。

私たち『幸福の科学』は、他人の誰かのことを忘れ、他人の誰かのことを妬み、他人の誰かのことを裁く者たちではなく、「人を愛し、人を生かし、人を許せ」、この久遠の教えを片時も忘れないように、いつも心がけている者たちです。なぜなら私たちは、「自分と他人が実は魂において繋がっており、魂において兄弟である」ということを、師より教わっている者たちだからです。

兄弟とは家族のことです。魂において、私たち人間は皆、家族なのです。「光のファミリー」、それが魂の真実です。

では魂の家族とは何でしょうか。

たとえば国境は必要なものです。日本と韓国、日本と中国、アメリカ、ロシア、アフリカなど、国境があればこそ各国で政治を行うことができます。これから『幸福実現党』が、日本および世界において、平和的な政治を実現していくことでしょうが、やはり国境は必要です。

しかし韓国人も、中国人も、アメリカ人も、ロシア人も、アフリカ人も、魂においては皆、兄弟であり、そして家族です。人類は皆、光のファミリーなのですから、

政治上の国境は必要ですが、魂において国境は一つも要らないわけです。つまり政治的な区別は必要ですが、魂における差別、区別は要らないわけです。愛という結び付け合う力こそ大切なわけです。

そして国家規模で政治が行われているように、家族規模で経済や教育などを考えて、自分の家族と他人を区別する必要はあります。なぜなら家族には責任が伴うからです。しかし魂においては皆、兄弟、家族であります。「自他はこれ、別個にあらず一体なり」、私たちはこうしたことを教わり、日々、これを言葉に出し、それを宗として生きていくことを誓っている者たちです。ですから私たちの使命は、仕事を上手に回すことではありません。一人でも多くの人に愛を与えて、人類を救済していくこと、それが私たち仏弟子の使命です。

そのために私たちは、成功者に対しては、その成功を「自分の家族の成功」と考えて、自分のことのように喜んで祝福を与えることに努め、もしも今、挫折して不遇の境遇にある人がいたならば、その挫折や不遇を、「自分の家族の挫折や不遇」と捉え直して、どうしたら彼らを救っていけるのか、その不遇は、その人の個人の問題なのか、それとも政治的な解決が必要なのかと、常に心

痛めることに努めております。

私たちは、日本を愛の国にし、この地球を愛の星にし、争いや飢えを無くし、仏国土ユートピアにすることを使命にしているからです。

なぜなら私たちは師より、「常に優しくき人となれ」とも、「人生はやや優しすぎるくらいでちょうどよい」とも、「現代成功哲学における人生の成功とは、家庭において、職場において存在の愛となることであり、これは誰もが可能である」とも、教えていただいているからです。だから『幸福の科学』の人は、優しい人ばかりです。

「愛」と「悟り」を法友と切磋琢磨し、愛を与えることにこそ競っている組織、それが『幸福の科学』です。

イノベーションを求めて

私が未熟であり、今後も修行を重ね、悟りを求めなければならぬことは変わりませんが、これと同時に、『幸福の科学』の組織文化に、イノベーションを起こしていかなければならないことも間違いありません。なぜなら師みずからが、「私が組織文化をつくっているつもりですが、現実はそのようではなく、転職で入った人が企業文化を

持ち寄っていた」と述べられているからです。

そして我が師は「イノベーション」ということについて、『イノベーション経営の秘訣』という教えの中で、次のように教えてくださっています。

ドラッカーは、「イノベーション」とは、『何か新しいものをつくることだ』と考えがちだが、そうではない。イノベーションの本質は、体系的廃棄である」と言っています。「それまで、組織立ってやってきたやり方、秩序立ってやってきたやり方、筋道を立ててやってきたやり方を、ガツサリと捨てなければいけないときがくる」ということです。「これがイノベーションだ」と言うのです。

《中略》

ドラッカーのいうイノベーションの方法は「体系的廃棄」ですが、もう一つ、ドラッカー的にはあまり言っていないことですが、いわゆる「発明・発見」というものもあります。

理系からもよく言われていることですが、「イノベーション」とは、「新結合で起きる」というわけです。「異質なものが結合することで、新しいものができること」も、「イノベーションである」と言われているのです。

つまり、異質な発想を組み合わせることで、新しいもの

のが生まれてくるということです。まったく新しいものをつくり出そうとするのではなく、「全然違うものをくつつけたら、どうなるか」ということから、イノベーションが起きると言われています。このあたりが大事です。

「イノベーション」とは、「これまでのものを捨てる体系的廃棄」と「発明・発見・異質の統合」の2つがあるそうです。

私はそれを、輸入された組織文化を捨てること、そしてデストピア化している事実を人々に伝えて、人々の公憤を呼び覚まし、心の中からユートピアを築いていくことであると考えています。これが私の考えるイノベーションです。

そしてイノベーションについて考える時、私はこんな話を思い出します。カマスを数匹、水槽に入れて、餌になる小魚も水槽に入れます。しかしカマスと小魚の間には、透明なガラスで仕切りを作っておきます。

カマスは何度も、何度も透明なガラスに体当たりして、次第に体を傷つけていきます。するとやがてカマスは、「いくらやっても食べられない」と思い込み、体当たり

することをやめて、小魚を捕まえようとはしなくなりま
す。

こうなると、先ほどのサルたちと同じように、たとえ
ガラスの仕切りを取り払っても、カマスは餌の小魚を取
りには行かないそうです。しかも驚くべきことに、たと
え餌の小魚が、カマスの目の前にまでやって来ても、カ
マスは何の反応も示さず、そして餓死してしまうとい
うのです。「もう僕たちは餌を食べられないんだ」とでも
思い込んでしまったのかもしれない。この実験は、何
度やっても同じ結果になるそうです。

実はこれは、まったくそのまま、人間にも当てはめる
ことが出来ます。なぜならアメリカでこんな事件があつ
たからです。とある冷凍工場には、内側からは開けられ
ない冷凍庫があり、その冷凍庫の中に、不運にも作業員
が閉じ込められて亡くなってしまいました。翌日、その
作業員が発見された時には、必死にドアを内側から、何
度も何度も叩き続けた跡だけが悲しく残っていました。
しかし驚くべき事実が判明します。なぜなら事件当日、
その冷凍庫の鍵は、偶然にも故障していて、その日に限
って内側からでも開けることができたのです。しかしド
アを内側から開けようとした形跡は、少しも見つかりま

せんでした。これは先ほどのカマスの話と同じく、「内
側から開くわけがない」という思い込みによるものです。
これは組織でも言えることでしょう。たとえば若手が、
何か提案や主張をしたとしても、上層部にいる者がこ
ごとく叩き続けられれば、やがて若手は動かないカマスとな
ります。これでは太った野ガモやカマスのごとく、「死」
を招きかねません。

では、小魚を食べなくなったカマスは、どうすれば小
魚を食べるのでしょうか？実に簡単なことです。新入り
のカマスを入れるだけでよいのです。その新入りカマス
は、ガラスにぶつかって傷ついた経験が無いために、ま
つすぐに小魚を食べはじめます。するとこれを見た、こ
れまで傷ついてきた他のカマスたちも、我先にと小魚を
食べはじめます。「あっ！やっぱり食べられるんだっ
た！」とでも思ったのでしょうか。これまで食べるこ
とを忘れていたカマスは皆、一斉に食べ始めるのです。

先ほど私は、「心傷つき、心悲しみ苦しんできた」と
言いましたが、私は根っからのタフガイです。ゆえに私
が新入りのカマスとなり、発見・発明・異質なもの統
合に役立ち、組織文化にイノベーションが起これば幸い
であります。

還俗も、追放もすべてを覚悟の上で述べさせて頂きました。最後まで、ありがとうございました。

あとがき

『手のひらの宇宙戦争』は、ある意味において、仏の手のひらの上で、『西遊記』のサルたちが争っているようなものなかもしれません。

仏は、この宇宙戦争をも見守られ、そしてこれを機会に、相手の力を借りて技をかける柔道のごとく、日本から地球に、そして宇宙にと、大繁栄をもたらそうとお考えなのかもしれません。なぜならGHQによってもたらされた「3S政策」ですが、これによって日本に芸能文化が開いたのは事実だからです。

神仏とは真・善・美です。つまり神とは真実・真理であり、善きもの・正義であり、そして美しい調和の中には、芸術も含まれているからです。

さて、これで私が書く本も4冊目になりました。

今回の本は、はじめて『幸福の科学』の人たちをかなりターゲットにしつつも、しかし当会以外の人にも、なるべく内容が分かるように努力した本です。なぜならこ

れまで私は、当会以外の人にばかり目を向けて、本や動画を創ってきたからです。

そしてこの内容を補完するものとして、すでに「真の武士道とは何か、侍精神とは如何なるものか」をお伝えするために、『武士道を行く』を書いております。あるいは日本が敗戦以降、戦後70年に渡って、どうやって国際銀行家（書籍の中では軍産複合体と表現）に植民地支配を受けていくか、その流れを説明するために『大和魂の復活』も書いております。さらには国際銀行家による金融侵略の内容を、もう少し詳しく説明するために、『貧困繁栄国家』もすでに書いております。

今後も、秘されてきた経済の本、あるいは歴史の本、さらにはもう一段、驚くべき政治の裏の本、これら計3冊を書くつもりでおります。

まあとにかく、日本人は目覚めなければなりません。秘されてきた事実。日本が金融植民地である現実。日本が国防の危機を迎え、消滅の危機にある真実に。武士道と侍精神に。

そして仏陀の再誕に目覚める必要があります。

仏陀は再誕せり、仏陀のもとに集うべし。

作者紹介 与国秀行 (よくに ひでゆき) 『ウィキペディア』より抜粋

1990年代、「東京最強の不良」と言われた。レゲエグループ湘南乃風の若旦那の自伝的マンガ『センター』]に登場する喧嘩最強の大山は谷山(与国)がモデルであり、また関東連合元幹部の柴田大輔が執筆した『聖域』に登場する「都内喧嘩最強の杉並の先輩・谷川」なる人物は、「谷山・与国」のことであると自身のブログで告白している。書籍『「幸福の科学」はどこまでやるのか』によれば、1997年頃 与国の実家の会社が倒産・破産後に、ケンカ・暴力の世界から抜けるため放浪の旅をしている時に、2000年頃沖縄宮古島の図書館で大川隆法著『太陽の法』に出会った。これをキッカケに啓蒙活動を開始した。この大川の思想こそが世界を救うと信じ、2011年に幸福の科学の職員となっている。

格闘家で友人の、山本"KID"徳郁の結婚式に参列した際、元プロレスラーの前田日明と知り合い、総合格闘技大会 THE OUTSIDER に「生きる都市伝説」という異名で出場、加藤友弥と対戦、敗北しており、後に前田日明と対談している。その後もシュートボクシング s-cup2008へ出場、菱田剛気と対戦、敗北している。他にも「おやじファイト」など格闘技への挑戦で体を張って「政治参加の大切さ」「仏道修行の大切さ」「武士道精神の大切さ」を主張している。2009年、第45回衆議院議員総選挙において、東京都第12区から立候補したが落選。選挙直後、妻と共に暴漢に襲われて左目を半失明した。2016年に『武士道を行く』を執筆し、作家活動を始める。また、いわゆる YouTuber でもあり、総アクセス数 2000 万回を超え、チャンネル登録者 4 万人を超える。素戔嗚(ササノオ)チャンネルにて、新・霊界物語を公開し、日本各地で講演を行っている講演家でもある。渋谷のクラブや新宿のクラブで、ジャーナリストのフルフォード・ベンジャミンや朝堂院大覚とトークライブをおこなったりもしている。なお、2017年には、神輿団体『隆和会』を結成している。一部の与国ファンが『武士道バカー代』[12]を立ち上げて、与国の魅力を語り合ったり、与国本人とも対談を行ったりしている。2018年10月に行われた衆議院解散総選挙において、南関東ブロックより幸福実現党から、比例第5位にて2度目の国政選挙に出馬して落選している。

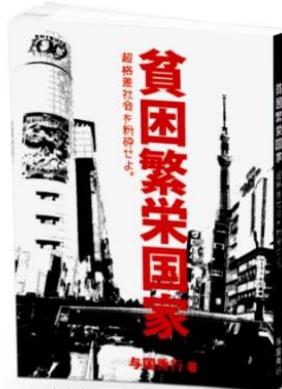
作品介绍 Amazonにて好評発売中！！



700 円



700 円



800 円



9784990274955

ISBN978-4-9902749-5-5
C0014 Y1000E



1920014010002

